目　　次

学部卒業論文

アイルランド独立運動におけるイェイツの見解.....赤坂　めぐみ (3)

21 世紀のゾンビ映画―変遷、現状、そして展望―.....荻谷　まどか (25)

トニ・モリスン『スーラ』のスーラと薔薇のあざ.....片桐　小雪 (49)

442 部隊におけるハワイ日系人のアイデンティティー.....宮本　諒子 (65)

エドガー・アラン・ポーの「黒猫」について
―天邪鬼の精神の表すもの―.....森安　小織 (85)

海外留学、英語運用能力が学習動機、学習方略に及ぼす影響
.....金子　優 (99)

The Effect of the Number of Years of Study Abroad on Second Language
Processing Among Japanese Learners of English.....Ayako Yamamoto (127)

On Classification of Old English Christian Terms
into the Native or Exotic Type.....Yuta Kinouchi (151)

大学院論文

A Wonder Book for Girls and Boys にみるホーソーンの文壇批判
.....内田　裕 (165)

Passives in Early Interlanguage Grammar:
A Preliminary Survey.....Takayuki Kimura (177)

中央大学英米文学会会則

英語文学文化専攻専任教員／編集後記

学部卒業論文

アイルランド独立運動における
イェイツの見解

赤坂　めぐみ

序論

ウィリアム・バトラー・イェイツ（William Butler Yeats）が生きていた時代のアイルランドでは、英国からの独立を求める運動が活発化していた。その中でイェイツが目指していたのは政治的な独立ではなく、詩や演劇などを通じたアイルランドの文化的な復興であった。しかし 1916 年のイースター蜂起をきっかけとして、アイルランドでは政治的独立を熱望する人々が増加し、対英独立戦争から内戦と続いてゆく戦乱に全国が巻き込まれていった。本稿の第 1 章では、アイルランド独立運動が活発化するに至った経緯と、イースター蜂起から内戦に至るまでの戦闘の詳細を説明する。第 2 章では「1916 年復活祭」（“Easter 1916”）を取り上げ、イースター蜂起と当時のアイルランドに対するイェイツの心情と、彼がとった姿勢を明らかにする。第 3 章では「内戦時代の瞑想」（“Meditations in Time of Civil War”）を考察する。内戦時のイェイツの手記も参考にしながら、イェイツとアイルランドとの距離、内戦の中でイェイツが追い求めた理想について論じる。

第 1 章　アイルランド独立運動の歴史

英国とアイルランドはおよそ 800 年にわたり、支配国と従属国という関係にあった。特に 17 世紀から、英国による本格的なアイルランドの植民地化が始まり、英国の支配から脱したいアイルランドと英国との間で、度々武力衝突が起こっていた。アイルランド側からの蜂起の中で代表的なものとしては、1798 年のウルフ・トーン（Wolfe Tone）による蜂起、1803 年のロバート・エメット（Robert Emmet）による蜂起などが挙げられる。アイルランドの一般市民が英国に対して強い不満を抱くようになったのは、1840 年代にアイルランドで大飢饉が起こってからである。英国政府はレッセ・フェール（自由放任主義）をとり、アイルランドへの無償の食糧支援を中止した。アイルランドは施しを受けるのではなく、食糧を購入しなければならないと考

えたためである（波多野 iii）。英国の慈善団体による支援も全員には行き渡らず、最終的にアイルランドの人口は、移住によって 100 万人、死亡によって 100 万人減少したと言われている（ライリー 109）。これにより、アイルランドの人々の中に深刻な反英感情が生まれたのである（ライリー 109）。しかし先に挙げた蜂起は、いずれもアイルランド軍が英国軍に敗北するという結果に終わった（波多野 170)。蜂起にあたって、民衆からの圧倒的支持が得られなかったためである（小野 117）。

このような蜂起が増えるとともに、アイルランド独立運動は活発化していった。英国においては、1886 年に親アイルランド派である英国の政治家ウィリアム・エワート・グラッドストーン（William Ewart Gladstone）によって、アイルランドの自治を求める法案が初めて議会に提出された。しかしそれは即否決された。1893 年に二度目に提出された法案も、同様に否決された。三度目の 1912 年に提出された法案がようやく議会で可決され、英国においてアイルランドの自治法が成立した。しかし 1914 年 8 月に第一次世界大戦が勃発したことにより、この自治法の実施は大戦の終結後まで凍結されることとなり、アイルランドの自治は先送りされてしまったのである。

しかしこの第一次世界大戦を好機と考えた者たちもいた。「英国のピンチはアイルランドにとってのチャンス」（小野 214）という考えのもと、武装蜂起の計画を練り始めたのが、アイルランド義勇軍とアイルランド市民軍のナショナリスト達であった。アイルランド義勇軍は 1913 年にオーエン・マクニール（Eoin MacNeill）を中心として設立された、アイルランドの全島独立を目指して活動する組織である。この計画を進める中心人物となったパトリック・ピアス（Patrick Pearse）という過激派の男も、この義勇軍に属していた。アイルランド市民軍は、義勇軍発足の二日前にジェイムズ・コナリー（James Connolly）とジェイムズ・ラーキン（James Larkin）によって創設された組織である。この市民軍の設立には、労働組合員を守り、団結心や目的意識を育成するという、義勇軍とは異なる目的があった。

ピアスを含む数人の義勇軍幹部は、ドイツに密使を送り、軍事支援を要請した。また市民軍の総裁であったコナリーに声をかけ、蜂起への協力を仰ぐなど、アイルランド国内でも人員強化を図った。こうした長期間にわたる周到な計画の末に起こったのが、1916 年のイースター蜂起である。1916 年 4 月 24 日、ピアスを総司令官とするアイルランド義勇軍・市民軍の共和主義

者およそ 1000 名が、武器を持ってダブリンに集結し、ダブリン中心部にある公共建造物を占拠した。ピアスは中央郵便局の屋根にアイルランドの三色旗を掲げ、群衆の前で「アイルランド共和国樹立宣言」を読み上げた。これを受け英国は、大砲や機関銃で武装した正規軍をダブリンに配置し、共和主義者たちを掃討し始めた。英国軍の弾圧によりダブリンの街は破壊され、一般市民の命までもが奪われた。市民に犠牲者が出始めたことを恐れたピアスは（小野 226）、たった一週間足らずで英国に無条件降伏し、蜂起はアイルランド側の大敗に終わった。このクーデターにより、ダブリンを中心としておよそ 3000 名が死傷した。そのうち 2500 名がアイルランド人、500 名が英国の軍人であった（Easter Rising 1916）。またダブリンを中心とした資産の被害総額は 300 万ポンドに及んだ（小野 226）。

イースター蜂起の当初、アイルランドの民衆は蜂起を暴挙とみなし、反乱を起こした部隊を非難していた（波多野 218）。しかしイースター蜂起の首謀者 16 名の処刑をきっかけとして、その非難は称賛へと変わることとなる。首謀者たちは簡易的な裁判で死刑判決を受け、降伏からわずか四日後の 5 月 3 日から 5 月 12 日にかけて処刑された。この処刑によりアイルランドの人々は、「彼らが祖国の独立と同胞の未来の幸福の為に、自らの生命を犠牲にした」と考えるようになった（小野 228）。処刑された 16 人は自らの生命をもって、アイルランド人の意識を変えたのである。そしてイースター蜂起は、独立を望む人々の心を奮い立たせ、ひとつにするという役割を果たし、アイルランドを大きく変えるきっかけとなった。英国側から言えば、早期の鎮圧を図ったはずが、かえって独立の気運を高める結果になったのである。イェイツの「1916 年復活祭」は、このイースター蜂起と蜂起の首謀者たちが題材となっている。

1918 年に、第一次世界大戦が終結した。これによって、凍結されていたアイルランドの自治が今度こそ認められる筈だったが、戦後の連立内閣はユニオニスト（アイルランドと英国の連合支持者）が与党であったため、自治法の実施はなされなかった。しかし年末に行われた総選挙では、イースター蜂起で指導者的役割を果たした急進派が票を集め大勝するという結果になった（波多野 225）。イースター蜂起以降、アイルランドの独立を求める人が増加していたためである。選挙に当選した議員たちは英国議会への参加を拒否し、ダブリンでアイルランド政府を樹立した。そして 1919 年 1 月 21

日に初めての国会が開かれた。

偶然にも同日、アイルランド義勇兵ダニエル・ブリーン（Daniel Breen）を含む九名が、採石用のダイナマイトを強奪しようとし、それを目撃した警官二名を射殺するという事件が起きた。これをきっかけに起こったのが、対英独立戦争である。この戦いでアイルランド側は、英軍の基地や警察署への襲撃、政府要人の暗殺など、かつてないほど激しい攻撃を仕掛けた。英国側も、民家の焼き討ちや容疑者の処刑を行い、アイルランドに対抗した。1920年3月に英国は、「ブラック・アンド・タン」と呼ばれる部隊を投入した。この部隊の多くは第一次世界大戦に参加した傭兵で、暴力や暴行も厭わない暴れ者集団であった。この部隊はアイルランドの鎮圧を目的として投入されたが、反対にアイルランド人に反英的な勇気を奮い立たせる結果を招いた（小野 253）。そして戦闘が連鎖的になっていったのである。同年11月、アイルランドの共和主義者が 14 名の刑事を殺害し、その報復としてブラック・アンド・タンはアイルランド人12名を殺害した。さらにそれに対する報復としてアイルランド側がブラック・アンド・タンを襲撃し、またその報復としてブラック・アンド・タンがコーク市を焼き払った（ライリー 110）。このように互いに報復が繰り返され、際限のない戦いが1921年7月まで続いたのである。この間に、英国軍兵士550人を含む1300人が殺害された（ライリー 111）。

1921年12月6日、ようやく英国とアイルランド双方が歩み寄り、英愛条約が調印された。これにより、アイルランド自由国が誕生する。しかし「アイルランド統治法」により、北アイルランドのアルスター六州は、自由国には含まれていなかった。このアイルランド統治法とは1920年に英国が提示したもので、「アイルランドを南北に分割し、それぞれに政府と議会の設立を認める」というものであった。南アイルランドは、アイルランド全島を統一し完全に独立することを目指していたため、この法を完全に拒否した。その一方、北アイルランドは英国との連合継続を望み、自治に反対していたが、南アイルランドに支配されるよりはましとして、これを受けいれた（波多野 226-227）。そのため、英愛条約が調印された時、北アイルランドにはすでに自治権が存在していたのである。

この英愛条約の内容をめぐって南アイルランドでは、「アルスターを除いた二十六州のみでも、分離独立をするべきだ」という条約賛成派と、「新生

アイルランドは全島で、共和国であるべきだ」という反対派の間で対立が起こった。そしてそれは戦争に発展する。1922 年 6 月に始まったこの内戦では、自由国政府の正規軍とナショナリスト達の非正規軍が争った。対英独立戦争と同様に放火や殺人などが相次いで起こり、一般市民も巻き込まれ、殺された。また軍事施設などの建物だけでなく鉄道も破壊されるなど、交通にも大きな影響をもたらした。この内戦による被害は甚大なものであり、死傷者は対英独立戦争時よりも多いといわれている。そのような状況にあったアイルランドで、イェイツは「内戦時代の瞑想」を書いたのである。

1923 年 5 月に休戦が成立し、アイルランド自由国政府の勝利という形で内戦は終結した。しかし 1916 年のイースター蜂起をきっかけとし、対英独立戦争、内戦と、何年にもわたり戦禍を被ってきたアイルランドは荒廃し、人々の心も荒れすさんでしまっていた（小野 267）。

第 2 章 「1916 年復活祭」について

「1916 年復活祭」は第 1 章で述べたイースター蜂起の五ヶ月後にイェイツが書き上げたものである。アイルランド独立運動を加速させるきっかけとなったこの蜂起をイェイツはどのように考え、どのような立場をとっていたのだろうか。また蜂起の首謀者となった知人たちに対し、どういった感情を抱いていたのだろうか。英雄たちに対するイェイツの心理的距離の変化、そして“A terrible beauty is born”というリフレインに注目し、それらを明らかにしていく。

まず英雄たちに対するイェイツの態度を、連ごとに比較していく。第一連では、蜂起が起こる前の日常の風景が描かれている。イェイツは蜂起の首謀者となる知人たちと会い、言葉を交わす。

I have passed with a nod of the head
Or polite meaningless words,
Or have lingered awhile and said
Polite meaningless words,
And thought before I had done
Of a mocking tale or a gibe

To please a companion
Around the fire at the club,　（5-12）
私は会釈をしたり、丁寧で無意味な
言葉をかけたりして、通り過ぎた。
あるいは、少しの間そこにいて、
丁寧で無意味な言葉を言ったりした。
そして、言い終える前に、私は
クラブの暖炉の周りにいる仲間を
楽しませるための馬鹿な話や、
からかいのことを考えていた。

イェイツが彼らに話すのは、“polite meaningless words”だけである。この表現からは、波風を立てないよう丁寧に、しかし深い話をするほど関わるつもりはない、といった冷たい印象を受ける。しかもイェイツは彼らと言葉を交わしている最中に、全く別のことについて考えている。彼らとの会話に心はこもっておらず、彼らと親しくしようという気持ちが感じられない。さらに“they and I / But lived where motley is worn”「彼らと私はまだらの服が着られるところで生きていただけだ」（13-14）と言い切っている。自分も彼らもまだらの服を着た道化であり、彼らとの日常は道化芝居のような馬鹿馬鹿しいものだと述べているのである。この連でのイェイツはどこか冷めており、平凡な日常から一歩引いたところに立っているような印象を受ける。

第二連では、イースター蜂起の指導者となった四人の男女について語られている。最初に出てくる“That woman”「あの女」（17）はコンスタンス・マーキェヴィッツ（Constance Markiewicz）を指している。彼女はアイルランド市民軍の一員として蜂起に参加し、参謀の役割を果たしていた。そのため一度は英国側に逮捕され死刑を宣告されたが、恩赦により釈放された。イェイツは彼女の一日についてこのように語っている。

That woman’s days were spent
In ignorant good-will.
Her nights in argument
Until her voice grew shrill.（17-20）

あの女性は、昼間は
無知による善意をふりまいて過ごし、
夜は金切り声になるまで
議論をして過ごした。

こう述べた後イェイツは、彼女が若く美しかった頃を思い出し、“What voice more sweet than hers”「彼女より美しい声の人がいただろうか」（21）と昔の彼女を称賛している。また 1919 年にイェイツが彼女について書いた、「ある政治犯に寄せて」（“On a Political Prisoner”）という詩の中でも、狩りをする昔の彼女を“clean and sweet”「清らかで美しい」（17）と述べている。若い頃の彼女の美しさは、それほど印象深いものだったのだろう。しかし現在の彼女は独立運動に熱中し、昼間は独りよがりな「無知による善意」をふりまき、夜は金切り声をあげて政治について議論している。イェイツはこの変化を非常に残念に思い、失われてしまった彼女の優美さを嘆いているのである。

二番目に登場する“This man”「この男」（24）はパトリック・ピアス、三番目の“This other”「このもう一人」（26）はトマス・マクドナ（Thomas MacDonagh）を指している。この二人には詩を書くという共通点があった。イェイツはピアスについて、“rode our wingèd horse”「私たちのペガサスを乗りこなしていた」（25）と評しており、彼に一目置いていたことがわかる。マクドナは詩人であり劇作家でもあった。イェイツは彼について、“He might have won fame in the end, / So sensitive his nature seemed, / So daring and sweet his thought.”「彼は最終的に名声を得ていたかもしれない。彼は感性が豊かな性質で、考え方も大胆で新鮮に思えた。」（28-30）と述べている。ここからは、イェイツが彼に期待を寄せていたことが窺える。これから良い作品をさらに生み出し、大成するかもしれないと期待していた男が、独立のために戦い、処刑された。同じく詩人であり劇作家でもあったイェイツにとって、これは非常に勿体なく感じられることだったろう。また詩や演劇を通して自分の考えを発信できるにもかかわらず、彼らは言葉ではなく暴力に訴えた。このこともまたイェイツにとっては残念なことであり、彼の武装蜂起に対する懐疑をより強くしたとも考えられる。独立運動に参加する前の三人を、イェイツは高く評価していた。しかし彼らは独立に固執しすぎて、品格や才能

を無駄にしてしまった。イェイツにとってそれは非常に嘆かわしく、憤りを感じることであったのだ。

最後の“This other man”「このもう一人の男」（31）はジョン・マクブライド（John MacBride）である。彼はイェイツが長年思いを寄せていたモード・ゴン（Maud Gonne）と結婚した。しかし彼の結婚後の振る舞いが原因で二人は離婚した。モード・ゴンに求婚して断られたことがあるイェイツの立場からすると、彼女を幸せにしなかったマクブライドは憎らしかったに違いない。他の三人と違い、“A drunken, vainglorious lout”「飲んだくれで自惚れが強く、無作法である」（32）と酷評しているのもそのような感情があってのことだろう。しかしその直後でイェイツは“Yet I number him in the song”「しかし私は彼をこの歌に含める」（35）、“He, too, has been changed in his turn”「彼もまた自分の番が来て変わってしまった」（38）と述べている。飲んだくれの酷い男であったマクブライドが、アイルランドに対して命を擲っても良いと思うほどの愛を抱き、独立運動という政治の場に積極的に参加した。そして蜂起の中心人物となり、人々を率いて戦った。イェイツはこの変化を、自分の詩に彼を含めても良いと思うほどに、好ましく英雄的なものだと感じたのではないだろうか。イェイツが感じたマクブライドの変化は、前の三人とは対照的である。

第一連でイェイツは蜂起の首謀者たちを“them”「彼ら」（1）と一括りにしているが、第二連では「あの女」、「この男」と一人ひとりを指している。第一連は一般のダブリン人としての四人を漠然と指しているのだからまだしものことだが、第二連は個人的交流のあった、しかも政治的英雄とも見なされている人々を指している語にしては、やや他人行儀で距離がある、冷めた印象を受ける。

第三連は、生きて変化していくものと、川の流れを乱す不動の石を対比させて、人々がとる様々な政治的姿勢の比喩としている。

Hearts with one purpose alone
Through summer and winter seem
Enchanted to a stone
To trouble the living stream.　（41-44）

夏の間も冬の間も
ただ１つの目的だけを追う心は、
石になる魔法をかけられ、
生きている流れを乱すかのようだ。

ここでの「石」はただ一つの目的だけを追う心、つまりアイルランド独立運動に熱中している人々のことを暗喩していると考えられる。独立を追い求めるあまり周囲に目が向かなくなり、自分を客観視することも、現実を見て冷静な判断を下すこともできなくなる。アイルランドやアイルランドの人々のためを思っての行動も、視野の狭い状態では、マーキェヴィッツの「無知による善意」のような自己満足でしかない。しかし心が頑なになったために、自分ではそのことに気付くことができない。このような独立運動における急進派の頑固で浅はかな様を石に例えているのではないだろうか。

また、「生きている流れを乱す」、“The stone’s in the midst of all.”「石が全ての真ん中にある」（56）という文章からは、川の中央に置かれ、流れを二つに分ける石が想像できる。石が川の中央にある場合、水の流れは一旦二方向に分けられるが、石を過ぎるとまたひとつに合わさる。イースター蜂起の際、最初は「積極的に独立運動に参加する人」と「それを冷めた目で見る人」の二種類に分かれたが、後のコナリーらの処刑によって民衆の心がひとつに合わさった。このような蜂起による民衆の変化を、川と石に例えているのではないだろうか。

また、「石になる魔法をかけられ、生きている流れを乱す」という箇所からは、彼らが理想ばかり追い求め、現実をきちんと見ていないというニュアンスが感じられる。第三連ではこの石と対比させるように、生物の様子が書かれている。

A horse-hoof slides on the brim,
And a horse plashed within it;
The long-legged moor-hens dive,
And hens to moor-cocks call;　（51-54）
馬の蹄が水際で滑る。
馬はその中で水を跳ねさせる。

長い脚のバンが水に潜り、
雌鶏が雄のバンを呼ぶ。

このような生物の生き生きとした動きと、石との対比が鮮明になっている。このような対比や、川の流れを乱す石という表現からは、イェイツが独立を求めて蜂起を起こした人々を批判していることがわかる。

第四連には、イースター蜂起に対するイェイツの複雑な気持ちが最もよく表れている。まず注目すべきなのはイェイツが自分の役目を明らかにしている部分である。

That is Heaven's part, our part
To murmur name upon name,
As a mother names her child
When sleep at last has come
On limbs that had run wild.　（60-64）
それは天の役目だ、私たちの役目は
次から次へと名前を呟くことだ。
自由に遊んで、やっと手足を投げ出して
眠りにつく子供の名前を呼ぶ
母親のように。

「子供の名前を呼ぶ母親」という表現からは深い愛情や慈しみが連想される。実際に第四連の最後にイェイツは、ここまで出さなかった彼らの名前を一人ずつ呼んでいる。固有名を伏せて自分との心理的関わりを断つかのような扱いをしていた二連とは違い、この連でのイェイツはまさに母親のように、蜂起を終えて永遠の眠りについた彼らの名前を、親愛と哀惜の情を込めて呼んでいるのだろう。しかし一方で、ここにはイェイツの冷淡な一面も見られる。イェイツは英国軍と闘って処刑された英雄たちを、遊び疲れて眠る子供に例えている。これは彼らが子供のように未熟であり、蜂起自体が子供の遊びだったという見解を表しているのではないだろうか。

さらに、“Was it needless death after all?”「あれは結局不要な死だったのだろうか」（67）と、知人の死に対して冷酷にも感じられるような問いかけを

している。そのうえ、“enough / To know they dreamed and are dead”「彼らが夢を見て死んだことを知っていればそれで十分だ」（70-71）と、まるで彼らの一生を突き放すような言い方もしている。彼らが命をかけて追い求めた祖国の救済を dream と表し、死ぬまでの戦いや苦しみにはあえて触れず、ただ dead と書いている。ここにイェイツの葛藤が表れているのである。

イースター蜂起の日、イェイツは英国にいた。自分がアイルランドを離れている間に、知人たちは独立という理想を現実にすべく、武装蜂起した。しかしすぐに鎮圧され、独立に繋がるような成果は全く上げられなかった。参加人数も武力も英国に劣っているにも関わらず、武装蜂起という方法がアイルランドを救うことになると、彼らは信じていた。そこには子供のような無謀さと、自分の力に対する過信があった。独立に執心せず、冷静に状況を見つめていたイェイツにとって、彼らの行為は子供の遊びのように拙速で愚かであり、苦々しいものであっただろう。しかし蜂起が鎮圧されてすぐに彼らは処刑され、それがアイルランドの人々を独立へ駆り立てるきっかけとなった。道化芝居のような日常で生きていた彼らが、たちまち殉国の英雄となったことは、イェイツにとっては非常に複雑であった。暴力という手段を使った彼らを全面的に称賛することはできないが、愛する母国の独立を追い求めて死んでいった彼らを完全に否定することもできない。このようなイェイツの中の相反する感情が、この詩には表れ出ているのではないだろうか。

またこの詩で印象的なのは、“A terrible beauty is born”「恐ろしい美が生まれた」（16,40,80）という言葉のリフレインである。これは第一連、第二連、第四連の末尾に記され、詩の締めくくりにもなっている重要なキーワードである。ではこの恐ろしい美とは何だろうか。私は「アイルランドに対する盲目の愛」であると推測する。イースター蜂起の首謀者たちの処刑によって、アイルランドには殉国の英雄が誕生した。民衆は彼らのアイルランドへの愛に感銘を受け、彼らを処刑した英国を憎み、彼らの遺志を継ごうとするかのように独立を熱望し始めた。こうして人々の心に芽生えたアイルランドへの強い愛情と、独立という一つの目標に向かって民衆が団結していくさまを、イェイツは美しいと感じたのではないだろうか。

しかしそれは同時に、恐ろしくもあった。首謀者たちに賛同する人が急増し、アイルランド全体が独立へと沸き立ったことで、彼らにあったような独善や狂信も全国へ蔓延していったのだ。英雄への尊敬や崇拝のもと結束を強

めた人々は、大多数が同じ方向を向いている。それは、たとえその方向が間違っていても、誰もそれを正すことができないという危険を孕んでいる。さらに蜂起の指導者たちが英雄になるということは、同時に彼らが起こした蜂起が正当化される、つまり暴力が肯定されるということである。たとえイースター蜂起がアイルランドへの愛によるものであっても、暴力という手段を用いたことによって街が破壊され、死傷者が出たことは間違いない。それを人々が疑問視しなくなることが、イェイツには恐ろしかったのではないだろうか。

イースター蜂起はアイルランドを大きく変え、独立への第一歩となった。しかし結果的にそうなったとはいえ、武装蜂起という方法は本当に正しかったのだろうか。そのようなイェイツの迷いと葛藤がこの詩からは窺えるのである。

第 3 章　「内戦時代の瞑想」について

「内戦時代の瞑想」は第一部のみ 1921 年に英国内で書かれ、その他は 1922 年から 1923 年の内戦の間にアイルランドのトール・バリリー（Thoor Ballylee）で書かれたものである（Jeffares 580）。英国との戦争、そして今や同胞たち内部での争いに変わった状況の中でイェイツは何を感じ、何を追い求めたのだろうか。イェイツの手記に見られる、アイルランドの内戦とイェイツとの間にある距離の理由、そして内戦の中でイェイツが理想としたものについて論じていく。

第 1 章で述べたように、1916 年に起こったイースター蜂起をきっかけとして、アイルランドの独立を求める声が高まっていった。1919 年には英国とアイルランドの間で戦争が起こり、両国が和解するまで二年以上も争いが続いた。和解後、ついにアイルランドは自由国としての独立が認められた。しかしその自由国には北アイルランドが含まれていなかったため、全島独立を志すナショナリストたちが自由国政府に強く反発した。これによりアイルランドでは、政府とナショナリストたちによる内乱が起こったのである。

アイルランドで内戦が始まった当時の状況について、イェイツはこのような手記を残している。

> I was in my Galway house during the first months of civil war, the railway bridges blown up and the roads blocked with stones and trees. For the first week there were no newspapers, no reliable news, we did not know who had won nor who had lost, and even after newspapers came, one never knew what was happening on the other side of the hill or of the line of trees. Ford cars passed the house from time to time with coffins standing upon end between the seats, and sometimes at night we heard an explosion, and once by day saw the smoke made by the burning of a great neighbouring house . . . （Jeffares 581）
> 私は内戦の最初の数ヵ月の間、ゴールウェイの自宅にいた。鉄道の橋は爆破され、道路は石と木で塞がれていた。最初の一週間は新聞も、信頼できるニュースもなく、我々は誰が勝ったのか、誰が敗れたのかも知らなかった。そして新聞が届いた後でさえ、誰も丘や木の列の向こう側で何が起こったかを決して知らなかった。座席の間に棺を立てて乗せたフォード型の自動車が、時折家の前を通り過ぎた。夜には時々爆発音を聞いた。また昼間に一度、近所の大きな家が燃えている煙を見た。（後略）

道路や鉄道の破壊により自らの足で情報を得られないだけでなく、新聞からも詳しい戦況を知ることができず、イェイツは内戦から引き離されているかのようだった。またこの手記には、犠牲者が出たらしいことや、近所で爆発と放火が起こったことについて書かれているが、イェイツが見聞きしたのは空の棺を運ぶ自動車や爆発音、家が燃える煙などであり、犠牲者や爆発の現場を直接目の当たりにはしていない。実際に周囲で被害が出ているにもかかわらず、内戦についてのイェイツの記述は非常に漠然としている。この手記からは、近くで繰り広げられている戦闘が、まるで遠くの出来事であるかのような隔たりが感じられる。一体なぜ、内戦の渦中にいるイェイツと内戦の間に、このような距離があるのだろうか。

まず「内戦時代の瞑想」の第一部でイェイツは、過去と比較して、現在のアイルランドの状況を嘆いている。第一連では豊かで生命に満ち溢れた過去の様子が語られている。

Surely among a rich man's flowering lawns,
Amid the rustle of his planted hills,
Life overflows without ambitious pains;
And rains down life until the basin spills,
And mounts more dizzy high the more it rains
As though to choose whatever shape it wills
And never stoop to a mechanical
Or servile shape, at others' beck and call.　（1-8）
確かに、花が咲き乱れる、豊かな者の芝生で、
植林された丘の木の葉のさらさらとした音の中に居れば、
野望に燃える苦痛もなく、生命は満ち溢れる。
そして生命は、水盤からこぼれ出るまで降り注ぎ、
降れば降るほどなお、眩暈がするほど高くまで昇る。
まるで自分の望むどんな形でも選んで、
他人の言いなりになって、無個性な形やこびへつらうような形には
決して成り下がらない、というかのように。

この連は、祖先から受け継いだ館の庭園の中にいるという、イェイツの想像から始まる。三行目からの、生命が満ち溢れ、降り注ぎ、高みまで昇るという部分は、第二連の“The abounding glittering jet”「溢れんばかりに光り輝く噴水」（12）と対応し、生の喜びを象徴的に表している（Jeffares 580）。つまりこの部分は、噴水が溢れるように自分自身が生の喜びで満たされるということである。また「自分の望むどんな形でも選ぶ」という言葉には、自分がこうでありたいと願う人間になれる、理想の追求ができるといった意味が含まれていると思われる。豊かで穏やかな館の庭園の中に居れば、心が生の喜びに満たされ、理想を追い求めることができるとイェイツはこの連で述べているのである。

しかしそれは第二連の冒頭で、“mere dreams!”「ただの夢に過ぎない」（9）という叫びによって一蹴されている。イェイツは現在のアイルランドについてこのように語っている。

though now it seems
As if some marvellous empty sea-shell flung
Out of the obscure dark of the rich streams,
And not a fountain, were the symbol which
Shadows the inherited glory of the rich.　（12-16）
だが今は、
噴水ではなく、豊かな流れの薄暗い闇から
放り出された不思議な空の貝殻が、
富者に受け継がれた栄光を翳らせる
象徴のようである。

現在を象徴するものは、豊かな噴水ではなく、受け継がれてきた栄光を翳らせる空の貝殻である。つまり過去に満ち溢れていた生の喜びは枯渇し、空虚になってしまっているのだ。さらに第四連では庭園や芝生、第五連では扉や廊下など、それぞれ屋外と屋内にある人工物を挙げ、それらが“violence”「暴力」（32）や“bitterness”「敵意」（40）を伴ってこそ“greatness”「偉大さ」（32,40）を得ると述べている。現在のアイルランドに生が満ち溢れる喜びはなく、歴史ある物の偉大さには、暴力や敵意が付随しているのである。第一部で既に、イェイツはアイルランドでの理想の追求を諦め、現実から目を逸らし、失われた過去を夢想しているように感じられる。

この第一部でイェイツはアイルランドの現状を語ったが、内戦については一切触れていない。「内戦時代の瞑想」という題の詩であるにもかかわらず、第一部から第四部までは、祖先の館、イェイツの家、机、子孫たちといった、イェイツ自身の過去、現在、未来に関わる事象が主題となっている。イェイツが現実に起こっている内戦にようやく目を向けるのは、この詩の後半となる第五部からである。ここでイェイツは、二人の兵士に会う。

An affable Irregular,
A heavily-built Falstaffian man,
Comes cracking jokes of civil war
As though to die by gunshot were
The finest play under the sun.

A brown Lieutenant and his men,
Half dressed in national uniform,
Stand at my door, and I complain
Of the foul weather, hail and rain,
A pear-tree broken by the storm.　（127-136）
愛想の良い不正規兵、
どっしりとした体格のフォールスタッフ風の男が
内戦の冗談を飛ばしながらやってくる。
まるで撃たれて死ぬことが
この世で最もすばらしい遊びであるかのように。
褐色の軍服を着た中尉と
半分だけ軍服を着た彼の部下たちが、
戸口に立つ。私は
悪天候のことや、霰や雨が降ること、
嵐で梨の木が折れたことについて愚痴をこぼす。

イェイツが最初に会ったのは、反自由国政府の兵士である。政府に対し反乱を起こした立場であるにもかかわらず、彼は愛想よく内戦についての冗談を飛ばしている。次に会ったのは、政府側の兵士たちである。こちらに対してはイェイツの方から、天候や木についての平凡な話をしている。どちらの兵士にも、内戦中であるという緊迫感や荒々しさが一切ない。これは、あまりにも戦争が長く続きすぎて、もはや日常の一部と化してしまったということの表れではないだろうか。アイルランドの為にという大義や愛が兵士たちの中から薄れ、戦闘が当たり前のことになってしまった。そういった内戦の虚しさや歪さが感じられる。

第六部では、内戦の様子が初めて語られる。第二連でイェイツは、“somewhere / A man is killed, or a house burned, / Yet no clear fact to be discerned”「どこかで人が殺され、家が焼かれる。しかしはっきりとした事実は何もわからない」（148-150）と述べている。しかし第三連では“Last night they trundled down the road / That dead young soldier in his blood:”「昨夜彼らは、血まみれの若い兵士の死体を手押し車に乗せて運んでいった」（154-155）という具体的な描写をしている。詳しい戦況を知ることができないにもかかわ

らず、家の周りに突如、生々しい姿で犠牲者が現れる。明確な理由と背景がわからない死が身近にある。そのような内戦への恐怖や不安が、この描写からは感じられる。

またイェイツは、第四連でこのように述べている。

> We had fed the heart on fantasies,
> The heart's grown brutal from the fare;
> More substance in our enmities
> Than in our love; （157-160）
> 私たちは幻想で心を養ってきた。
> その食物によって心は野蛮になった。
> 私たちの愛の中よりも、私たちの敵意の中に
> 実質があるのだ。

イェイツたちの心を養い、そして野蛮にした幻想とは、アイルランド独立のことを言っているのだと考えられる。イースター蜂起以降、アイルランドの人々は独立を熱望し、戦いに身を投じるようになった。独立という一つの大きな目的が、彼らの心を培う餌となったのである。「幻想によって心が野蛮になった」とは、独立という餌を長い間求めすぎたせいで、人々の心が争いをも厭わなくなり、日々繰り返される戦闘や犠牲も当たり前のことと感じるほど野蛮に変わってしまったということではないだろうか。

またイェイツは「愛の中より敵意の中に実質がある」と述べている。一連の独立運動から推測すると、愛とはアイルランドや国民への愛、敵意とは英国や内戦における反対派への、憎しみや敵愾心であると考えられる。この内戦は、アイルランドの全島独立派と分離独立派で意見が対立したため起こったものであり、そのどちらも根本にはアイルランドへの愛があったと考えられる。しかしイェイツは戦乱の中で、その愛よりも敵意のほうに真実味を感じ、敵意の中に実質があると考えたのである。ここからは、「愛」という空虚になった名目のもと戦いだけを繰り返す民衆に対する、イェイツの絶望感のようなものが感じられる。

第七部では、熱狂して争う人々の様子が書かれている。民衆は“Vengeance upon the murderers”「人殺しに復讐しろ」（170）、“Vengeance for Jacques Molay”

「ジャック・モレーの仇を討て」（171）という叫び声をあげている。イェイツはこの言葉について、“A cry for vengeance because of the murder of the Grand Master of the Templars seems to me fit symbol for those who labour from hatred, and so for sterility in various kinds .”（Jeffares 582）「聖堂騎士団の長（ジャック・モレー）を殺した者へ復讐しろという叫びは、憎しみから行動する人々や、あらゆる種類の不毛な行いに相応しい象徴に思える」と説明している。これは叫んで争うアイルランドの民衆が憎しみを唯一の動機とし、不毛な行為をしていると言っているのではないだろうか。また争う兵士たちの目指す先にあるものが“nothing”「無」（174,175）と表現されており、戦闘の虚しさが強調されている。さらにこの争い自体が“senseless tumult”「愚かな騒動」（176）だと述べられている。これら第二連の記述からは、イェイツがいかに内戦を虚しく愚かなことだと考えていたかが分かる。

第七部の最後で、イェイツは踵を返し、塔の中に入って扉を閉める。アイルランドに背を向け、塔に閉じこもったのである。イェイツが文化の復興に情熱を注いだアイルランドは、変わり果ててしまった。今は大義を失った戦闘のための戦闘が繰り返され、民衆は憎しみや敵意を露わに不毛な争いに参加している。このような状況にイェイツは落胆し、内戦が続くアイルランドから距離を置きたいと考えた。その結果が、このような自己とアイルランドとの断絶なのである。

「内戦時代の瞑想」の冒頭から第四部まで内戦については全く触れられず、第五部から第七部では内戦が身近でない、意義を感じられないものとして書かれている。イェイツの手記に見られたイェイツと内戦との隔たりは、この詩にも強く表れていた。その原因は、イェイツがアイルランドに幻滅し、アイルランドから離れたことにあったのである。

このようなアイルランドの変化を嘆く心境の中で、イェイツは自室にある刀に理想を抱いた。第三部でイェイツは、佐藤という日本人から贈られたその刀についてこのように述べている。

In Sato’s house,
Curved like new moon, moon-luminous,
It lay five hundred years.
Yet if no change appears

No moon; only an aching heart
Conceives a changeless work of art. （79-84）
佐藤の家に、
新月のような曲線を描き、月のような光を放ち、
500 年もの間置かれていた。
しかし変化がなければ
月はない。疼く心だけが
不変の芸術作品を創り出すのだ。

不変の芸術作品である刀の輝きが、月に例えられている。しかし月は自然のものであり、満ち欠けを繰り返し、不変ではない。人の中の疼く心だけが、変化する自然の美しさをも包含することで逆説的に不変である作品を生み出すことができる。イェイツはこのように刀と、刀を鍛えた人物の心について説明している。さらにイェイツは、伝統の持つ不変さについても述べている。

when and where ‘twas forged
A marvellous accomplishment,
In painting or in pottery, went
From father unto son
And through the centuries ran
And seemed unchanging like the sword.
Soul’s beauty being most adored,
Men and their business took
The soul’s unchanging look; （86-94）
これが鍛造された時代と場所では
素晴らしい技能は
絵画においても陶芸においても
父から息子へと
何世紀にもわたって伝わり、
この刀のように不変に思えた。
魂の美が最も崇められるとき、

人とその仕事は
魂の不変の様相を帯びた。

素晴らしい技能は伝統として何世代にもわたって受け継がれ、この刀のように不変なものである。そしてそれを生み出す人々の魂もまた、その技能や作品に宿る魂と共に、美しく不変なものである。イェイツはこのように考えていた。アイルランドの急激な変化に辟易していたイェイツは、自室にあった刀やそれを鍛造した刀鍛冶の姿に精神的な価値を感じ、芸術家としての理想と慰めを見出したのである。

結論

1916 年のイースター蜂起は、アイルランドを英国からの政治的独立へ駆り立てるきっかけとなった。しかし政治的独立に固執していなかったイェイツにとって、急進派の人々がとった武装蜂起という手段は、冷静さを欠いた愚かなものに感じられた。アイルランドの民衆は彼らを称え、団結して英国からの独立を目指し始めたが、イェイツは蜂起が暴力であることを冷静に理解し、イースター蜂起の正当性を疑問視していたことが「1916 年復活祭」から分かった。

対英独立戦争、内戦と戦乱が続く中で、アイルランドの伝統や豊かさが失われてしまったことをイェイツは嘆いていた。無意味な戦闘を繰り返す民衆にも幻滅し、アイルランドから距離を置いた。それは「内戦時代の瞑想」と内戦時の手記にも表れている。アイルランドの急激な変化に辟易していたイェイツは、部屋に置いてある刀に精神的な価値を見出した。伝統として受け継がれる刀と、その刀のような不変の芸術作品を生み出す刀鍛冶の姿は、芸術家としてのイェイツにとって理想だったのだ。

参考文献

Easter Rising 1916. Web. 10 November, 2013. <http://www.easter1916.net/>

Jeffares, A. Norman ed. *Yeats's Poems*. rev. ed. London: Macmillan, 1991.

小野修『アイルランド紛争—民族対立の血と精神』世界差別問題叢書 10、明石書店、1991 年。

高松雄一（編・訳）『対訳 イェイツ詩集』岩波文庫、2009 年。

波多野裕造『物語 アイルランドの歴史—欧州連合に賭ける“妖精の国”』中公新書、2004 年。

ミカエル・ライリー、ジェイミー・バイロン、クリストファー・カルピン『イギリスの歴史—帝国の衝撃 イギリス中学校歴史教科書』前川一郎（訳）、世界の教科書シリーズ 34、明石書店、2012 年。

21 世紀のゾンビ映画
―変遷、現状、そして展望―

荻谷　まどか

序論

吸血鬼や狼男、ミイラ、フランケンシュタインの怪物、透明人間など、ホラー映画にはこれまでに様々なモンスターが登場してきた。そんな中、ゾンビは唯一ホラー映画という枠を飛び出し、独自のジャンルを確立する事に成功した。そしてゾンビ映画は実に多種多様なものが作られており、また時代と共にゾンビの特徴は変化していっている。そのためゾンビの定義は曖昧であり、作品によっては作中の怪物がゾンビであるのか、ゾンビではないのか、見る側の受け取り方で変わってくる場合さえある。本論文では、作中や映画の宣伝等で怪物がゾンビであると明言されている場合はもちろん、生ける死者である、人の肉を食べる、感染・増殖をするなど、一般に広く知られているであろうゾンビの特徴がみられる怪物は全てゾンビと定義する。

本論文では 20 世紀に初のゾンビ映画が公開されてから現在に至るまでに、どのようにゾンビがその地位を確立していったのか、またアメリカ社会においてゾンビ映画がどのような役割を果たしているのを分析していく。そしてそれらを通じて、今後のゾンビ映画及びゾンビの展望を探る。

1 章では 20 世紀のゾンビ映画とゾンビの位置付けの変化を時代ごとに見ていく。さらにゾンビ映画と社会背景の関連性を分析する事でゾンビ映画の持つ可能性を探っていく。

2 章では 21 世紀の社会背景について同時多発テロとリーマンショックを中心に分析し、この二つの出来事に直面する事で起こったアメリカ国民の既存の価値観に対する意識の変化を分析する。

3 章では 21 世紀のゾンビ映画を 20 世紀のゾンビ映画と比較して行く。そして 21 世紀にゾンビ映画がどういった変化を遂げたのかを、2 章で分析した国民の心境と照らし合わせながら探る。また 20 世紀のゾンビブームと 21 世紀のゾンビブームの比較により、ゾンビの位置付けのさらなる変化も明らかにする。そしてそれらの事を踏まえ、今後のゾンビ映画やゾンビの可能性について探っていく。

第 1 章　20 世紀のゾンビ映画

第 1 章では 1～3 節に分けて、20 世紀におけるゾンビ映画の変化や、ゾンビ映画と社会背景の関係について考察していく。1 節では『ホワイト・ゾンビ（*White Zombie*）』（1932）を中心に、30 年代～50 年代のゾンビ映画を当時のゾンビの位置付けと共に分析していく。2 節では『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド（*Night of The Living Dead*）』（1968）を用い、60 年代にはゾンビ映画におけるゾンビの位置付けがどう変化したのかについて、またゾンビ映画と当時のアメリカ社会との関連性について見ていく。3 節ではゾンビブームが到来した 70 年代～80 年代を『死霊のはらわた（The Evil Dead）』（1981）を中心に分析し、当時の時代背景がゾンビ映画にどのように反映されているのかを考察していく。

1.1　ホラー映画の中のゾンビ

1930 年代は、20 年代後半に登場したトーキー映画（音声つきの映画）の成功により数々の映画が作り出され、ハリウッド黄金期と呼ばれた。そして 1931 年に公開された『魔人ドラキュラ（*Dracula*）』、『フランケンシュタイン（*Frankenstein*）』のヒットを皮切りに、「ホラー映画」というジャンルが確立され多くの作品が作られるようになった。そんな中、1932 年に『ホワイト・ゾンビ』の中で初めて「ゾンビ」が登場する。『ホワイト・ゾンビ』ではゾンビの設定は、「ブードゥー教の呪術で操られる不気味な死体」であった。あらすじは以下の通りである。

> 結婚式を挙げるためにニール（Neil）とマデリーン（Madeleine）はハイチのポーモン（Beaumont）邸を訪れるが、ポーモンは実はマデリーンを愛しており、彼女をニールから奪うためブードゥー呪術でゾンビを操る怪人（Murder Legendre）と、彼女をゾンビにするという計画を企む。ポーマンはマデリーンをゾンビにする事に成功するが、結局マデリーンに好意をもった怪人に毒を盛られてしまう。

この作品では、恐怖の源はゾンビというよりも、ゾンビを操る怪人や、歪んだ愛、またゾンビにされてしまうというところにある。ゾンビ自体は人を

襲うという事もなく、ただ命令に従ってゆっくりと迫ってくるだけで、主人に労働をさせられるだけの奴隷のような扱いであった。ゾンビ自体が意志を持つ事はなく、怪人によって好き勝手に操られるだけのゾンビは、ある意味でマデリーンやニール、ポーマンと同じ、怪人の被害者のようにさえ見える。ゾンビはいわば他の被害者達と同じように、怪人の恐怖や不気味さを際立たせるための引き立て役として存在していたと考えられる。つまりこの頃にはゾンビはまだ恐怖の主役ではなく、単なる「脇役」だったのではないだろうか。

『ホワイト・ゾンビ』以降に作られた *Ouanga*（1935）や *Revolt of The Zombies*（1936）においても、ゾンビは呪術などで操られており、やはり恐怖の対象はそんなゾンビを利用する人間であった。そして 40 年代や 50 年代にはゾンビは呪術に限らず科学者や軍人、宇宙人などによって操られるようになる。第二次世界大戦以降には、米ソの冷戦構造で重要な役割を果たした宇宙開発競争・核開発競争に伴う恐怖が反映された SF ホラーというものが流行していた。そしてそんなホラー映画の流行に合わせるようにゾンビを操る者は変わったものの、ゾンビが脇役であるという事は変わらず、ゾンビはホラー映画の中の一作品に出てくる一怪物という位置付けであった。

1.2　ゾンビ映画の確立

『ホワイト・ゾンビ』以降、常にゾンビが脇役的な怪物に過ぎなかった原因としては、前述のようにゾンビは常に誰かに操られたり誰かの手によって蘇らされたりしないと存在できない、「自立していない存在」だったためだと考えられる。しかしジョージ・A・ロメロ（George Andrew Romero）監督の『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』（1968）で、ゾンビ映画に大きな変化が訪れる。この作品でのゾンビの設定は、「人の肉を好んで食べる」「頭部を破壊しないと倒せない」「噛まれた人間はゾンビになる」というものであった。映画のあらすじは以下の通りである。

> バーバラ（Barbra）と兄のジョニー（Johnny）が父の墓参りの途中ゾンビに襲われ、ジョニーは殺されバーバラは近くの民家に逃げ込んだ。そこには黒人青年のベン（Ben）と白人のハリー（Harry）、その妻子と若いカップルが既に立てこもっていた。テレビを通して蘇った死者

達が人間を襲い食殺しているという事実を知り、ゾンビの群れに囲まれてしまった民家からの脱出を試みる。

この映画の最大の特徴は、ゾンビが誰に操られるわけでもなく突如動きだし、肉を求めて人に襲いかかる「自立した怪物」になったというところにある。そしてその事でゾンビは脇役ではなくなり、ゾンビが主役の「ゾンビ映画」というジャンルと、現代まで受け継がれる「自ら人を襲う自立したゾンビ」である「モダン・ゾンビ」が同時に確立されたのだ。それに加えて、この作品では単純に「ゾンビ対人間」という構図以外にも、「人間（黒人）対人間（白人）」という構図が加えられ、人間同士の争いが引き起こす恐怖が描かれている。それは黒人のベンと白人のハリーが家の中で常に争い、その結果ゾンビの侵入を許してしまう事、最後のシーンでベンがろくに確認されずにゾンビと見なされ、自警団の白人男性に撃ち殺されてしまう事などから伺う事ができる。

この作品は公民権運動が激化するなかで公開された。有賀夏紀『アメリカの 20 世紀（下） 1945 年～2000 年』によれば、黒人側は当時非暴力でいたにも拘らず、警察や白人に暴力的に押さえ込まれるような事も多くあったとされている。つまり当時白人達は着々と力をつけてきた黒人達に、同じアメリカ国民であるにも拘らず恐怖心を抱いており、それが過剰な押さえ込みや暴行などに繋がっていたと考えられる。そしてこの『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』の構図からは、（白人から見たら）当時のアメリカ国民にとって恐れるべきものは、家の外のゾンビではなく同じ家の中（アメリカ国内）にいる黒人である、もしくは黒人もゾンビも「敵」として大差のない存在なのかもしれないという、当時白人が抱いていたであろう黒人に対する恐怖心を体現しているという事が伺える。

1.3　ゾンビブームとゾンビの可能性

『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』以降絶え間なくモダン・ゾンビ映画は作られた。そして 1978 年の『ゾンビ（*Dawn of the Dead*）』がヒットした事で、80 年代にはさらにゾンビ映画が量産されゾンビ映画ブームとなる。

例えば『死霊のはらわた（*The Evil Dead*）』（1981）は 80 年代の社会背景を表す代表的なゾンビ映画だと言える。この映画では悪霊が人間に取り憑

きゾンビに変え、ゾンビになった人間は周囲の仲間に襲いかかる。この作品内でのゾンビはオカルト要素とモダン・ゾンビの特徴を合わせ持っていると言える。映画のあらすじは以下の通りである。

> 五人の若者が休暇を森で過ごそうと山小屋に訪れ、そのうちの一人が夜地下室でテープ・レコーダーと古文書を見つけ、それを再生してしまう。しかしそのテープには死者復活の呪文が録音されており、呪文で呼び起こされた死霊が若者達に憑依しゾンビに変えてしまう。

映画の特徴としては、とにかく残酷描写が目立つという事が挙げられる。作品内では大量の血や過激な人体破壊が頻繁に描かれており、「暴力」と「死」というイメージがとても強い。この背景としては、当時のベトナム戦争の傷跡が影響していると考えられる。ベトナム戦争が終わってからしばらく時間はたっているものの、この頃にはベトナム戦争や帰還兵を扱った戦争映画[1]なども多く作られていた。ベトナム戦争自体本土での戦いはなく、アメリカ国民はメディアでしか戦争を知らなかった。それが兵士が帰還した事でその傷ついた姿を目の当たりにし、また兵士達が次第に戦場の様子を実際に語ったこと、それが映像化された事[2]により、初めて「戦争のリアルなイメージ」が本土に持ち込まれたと言えるだろう。さらに帰還兵の扱いに対する問題なども表面化しており、ベトナム戦争の傷跡はこの頃にもまだ強くの残っていたと考えられる。そのような時代に蔓延していた「暴力性」や「死」のイメージが、この『死霊のはらわた』にも強く反映されていると言える。このようにゾンビはその時代のトラウマや恐怖、不安などを映し出す鏡のような役割を果たし得るのではないだろうか。

以上のように、30 年代～50 年代まではゾンビ映画はホラー映画の中の一作品でしかなく、ゾンビというキャラクターもメイン舞台に立つ事はなかった。それが 60 年代にモダン・ゾンビが確立されると、ゾンビ映画は単なるホラー映画からその可能性を広げ、一ジャンルとして認められるようになった。その結果、80 年代にはゾンビブームが訪れた。そして 1～3 節を通して、特にモダン・ゾンビが確立されてからというもの、ゾンビ映画は時代における社会や国民の脅威を反映するようになったという事を考察した。

第 2 章 21 世紀の社会背景

21 世紀のアメリカでは政治や経済、生活、気候変動など、様々な面で実に多くの出来事が起こっている。その中でも特に大きな出来事である 2001 年の同時多発テロと 2008 年のリーマンショックを中心に分析し、同時に当時のアメリカ国民の生活や心境の変化も探っていく。

2.1 同時多発テロ

2001 年 9 月 11 日、ニューヨーク市の金融街の象徴的な建物である世界貿易センタービルのツインタワーに二機、ワシントン D.C.に所在する国防総省本庁に一機の旅客機が衝突するという、21 世紀はもちろんアメリカ史上でも一際ショッキングな事件が起こった。テロ直後メディアではコマーシャルもほとんど流さずに、テロに関する報道ばかりを繰り返し流した。そしてテロの九日後には、ブッシュ大統領（President Bush）が上下両院合同本会議での演説で“we'll meet violence with patient justice, assured of the rightness of our cause and confident of the victories to come.”「我々は自身の大義の正当性を確信し、やがて来るであろう勝利を信じ、忍耐強い正義を持って暴力に立ち向かっていく。」（CNN.com Transcript of President Bush’s address）と述べ、正義の下での団結を呼びかけ国民の愛国心を鼓舞した。その甲斐あってかテロへの報復に対する国民の支持は厚く、同年 10 月には正義のアメリカは、悪のテロ首謀者が潜伏しているであろうアフガニスタンへの空爆を開始した。CNN の 2006 年のインタビュー調査[3]によれば、2003 年には国民の支持率 70％前後でイラク戦争に突入したものの、翌年 2004 年にはイラク戦争の支持率は 50％をきった。また 2004 年 4 月 23 から 27 日に行われた CBS とニューヨーク・タイムズ（The New York Times）の共同調査によれば“As a result of the United States' military action against Iraq, do you think the threat of terrorism against the United States has increased, decreased, or stayed about the same?”「イラクへの軍事攻撃により米国でテロの脅威は増したと思うか、減ったと思うか、それとも変わらないか？」（The New York Times/CBS News Poll, 27）という問いに対し、「増えた」と答えたアメリカ国民は 41％に上った（減ったは 18%）。つまり当初は愛国心の高まりから戦争の支持をしていた国民も、いざ攻撃が終わると、この正義の名の下に行った攻撃がさら

なる報復のテロの引き金になるのではないかという不安を感じたという事が伺える。

イラクへの攻撃について冷静に考えてみた時に、もしもアメリカ国内にテロの首謀者がいたら、同じように周辺住民の事を顧みない攻撃を行っただろうかという疑問が残る。アメリカによる攻撃の被害を受けた側から見たら、アメリカこそ平和を乱す最大の悪に見える事だろう。今回のイラク・アフガニスタンへの攻撃は、アメリカにとって都合の良い正義を振りかざし、他民族をないがしろにするような行為に思われても不思議ではない。そしてこのテロをきっかけに、このような横暴な行動で今まで自分達がどれだけの恨みを買っているのかを国民が想像し、またいつどこで誰が報復のテロを起こすのかわからないという不安感を抱き始めるのも自然のことである。

愛国心の執拗な鼓舞に関しても、多民族国家であるアメリカではどこに新たなテロリストが潜んでいるかわからないという不安感が特に大きく、そういった混乱をおさえるために団結を目指し行われたのではないだろうかと考えられる。しかし愛国心の高まりも落ち着き、時間と共に冷静さを取り戻した後に、国民はこの正義の矛盾や違和感に気がつき始めたのではないだろうか。

その一つの例としては、テロ後 2011 年のリビア介入に対する支持率の低さが挙げられる。2011 年 3 月 21 日に行われたギャラップ（Gallup）の世論調査 [4] によれば、リビアへの軍事介入は国民の 47%が支持していた。しかし前述のイラク戦争の支持率はもちろん、1993 年のソマリア介入での支持率 65%、1998 年のアフガン・スーダン攻撃の支持率 66%（同調査）などと比べれば、その数字は低いという事がわかる。また 2013 年のシリアへの軍事介入に関しても、同年 8 月 19 日から 23 日に実施されたロイター（Reuters）とイプソス（Ipsos）の世論調査 [5] によれば、国民の支持率はたった 9%と歴史上最も低く、反対は 60%と高い。つまりアメリカ国民の二元論的な正義に対する意識の変化が、こういった支持率の低さの要因の一つになっていると考える事ができるのではないだろうか [6]。これらの事から同時多発テロ、イラク戦争以降アメリカ国民の心には、他人への不信感どころか、今まで自分達達が抱いていた価値観に対する不信感までもが芽生えていたと私は考えた。

2.2 リーマンショック

2005 年から 2006 年頃にピークを迎えていた住宅バブルがはじけた事を受け、2008 年 9 月 15 日、大手投資銀行グループのリーマンブラザーズは破綻した。そしてリーマンショックと呼ばれる 100 年に一度あるかないかの金融危機は、国内はもちろん世界中に拡大していった。

リーマンブラザーズが住宅バブルの崩壊とともに破綻した要因として、サブプライムローンというものがある。これは低所得者用のローンであり、信用や返済能力の低い人も一定の条件を満たしていれば契約でき、最初は低い利子から始まり徐々に利子が高くなるのが特徴のローンであった。当時の住宅バブルでは、住宅は買っておけば価格は上がり必ず得をする事ができるという風潮が強くあり、仮に返済が滞ってしまっても価格の上がった住宅を売却したり、その上昇した価格を担保に追加融資を受けたりという事が可能であった。そのためこのローンを利用する低所得者は多く、また貸手からしても返済される可能性の低いローンでもそれを証券化して転売する事で手元にリスクは残らなかった。住宅価格が上がり続けうまくまわっていた時には、サブプライムローンは低所得でもローンを組み、憧れのマイホームを持つ事ができるというある種の夢の支えになり、不動産業者やローンの貸手、住宅ローンを証券化する投資銀行も多くの儲けを出していた。つまり関わっていた人間全てが得をしているような状況だったのだ。そのためとても楽観的に、希望をもってこの最悪なローンを利用する人が少なくなかったのではないだろうか。

しかし住宅の価格が永遠に上がり続けるという事はなく、住宅バブルははじけ住宅価格は低下、ローンの返済はどんどん滞った。マイホームの夢は無残に崩れ落ち、リーマンブラザーズの破綻で企業も個人も多大な被害を受け、多くの国民が盲目的に信じてきた資本に裏切られる形になってしまった。リーマンショックで低所得者がマイホームの夢を失ってしまったという事、強いドルで世界からどんどん物を安く買えるという消費ブームから一転、失業率の上昇や景気後退でアメリカ国民はそれまで抱いていた夢や自信を喪失したと言える。

1 節で見てきたように、同時多発テロでは国民の間に他人に対する不安感はもちろん、今まで自分が信じてきた正義に対する不信感も芽生え始めていた。さらに 2 節で考察したように、リーマンショックにより今までの上向き

だった生活がひっくり返り、アメリカ国民は自信喪失に陥ったと言える。このような未曾有の体験により今まで信じてきたものがことごとく崩れ去り、アメリカ国民は自分が抱いていた価値観などに対しても疑問を持つようになった。その結果、自分と今一度向き合う必要があると考える人も少なくなかったと考えられる。

第 3 章　21 世紀のゾンビ映画

3 章では 1 節で『ゾンビランド（*Zombieland*）』（2009）の特徴を、2 節では『サバイバル・オブ・ザ・デッド（*Survival of the Dead*）』（2009）の特徴を分析し、20 世紀のゾンビ映画と比較していく。そして 3 節ではこの 2 作品の共通点や相違点を探っていくと同時に、20 世紀と 21 世紀のゾンビブームの比較も行う。そして 4 節では 1～3 節を踏まえ、今後のゾンビ映画及びゾンビの展望を探っていく。

3.1 『ゾンビランド』

80 年代にブームを迎えたゾンビ映画だが、90 年代にはその勢いは落ち着きを取り戻していた。しかし 2000 年代になると映画はもちろん、ゲームやゲームを原作にしたゾンビ映画などが次々と作られゾンビブームが再燃、80 年代のゾンビブーム以上の盛り上がりを見せるようになった。

まず最初に『ゾンビランド』を見ていく。この作品に登場するゾンビはモダン・ゾンビの特徴を引き継ぎ、さらに 2000 年代に入るまであまり見られる事がなかった「走る」という特徴が見られる。あらすじは以下の通りである。

> ゾンビだらけになったアメリカで、引きこもりで人間不信の大学生コロンバス（Columbus）は生き残るために自ら作った「32 のルール」に従い行動する。途中ゾンビ狩りに執念を燃やす男タラハシー（Tallahassee）と、コロンバスと同じく人を信頼しない美人姉妹のウィチタ（Wichita）とリトルロック（Little Rock）に出会い、ゾンビがいないと言われている遊園地へ向かう。

主人公のコロンバスはルール 9「家族・友人でも容赦しない」、ルール 20「人を見たらゾンビと思え」に従い、他人は誰であっても信用していない。さらに主人公だけではなく、他の登場人物達もコロンバスと同じように一切人間を信頼しておらず、全員が本名ではなく地名で呼び合っている。[7]その事に加え、ウィチタとリトルロックは二度もコロンバスとタラハシーを裏切り銃や車を奪って逃走している。ゾンビの感染が世界中に広まる中、数少ない生存者同士が協力し合うのは自然な事であり、事実 20 世紀のゾンビ映画では多くの場合人々は協力しあって危機を乗り越えようとしている。しかしこの『ゾンビランド』では自分以外は信頼しないという「他人不信」が強調されており、ルール 20 からもわかるように、「ゾンビも人間も同じく信用ならない敵」とみなしているのだ。さらにこの『ゾンビランド』では今まではのろのろ歩きで不気味さを醸し出していたゾンビが、人間さながらにアクティブに動くという事で、ゾンビの形象が人間に近いという事がわかる。これらの事からこの『ゾンビランド』においては、ゾンビと自分以外の人間との間に差がほとんどないという事を読み取る事ができる。

3.2 『サバイバル・オブ・ザ・デッド』

『サバイバル・オブ・ザ・デッド』では、ゾンビはモダン・ゾンビの特徴を引き継ぎ、さらに他のゾンビ映画のゾンビには見られなかった「生前の人間の習慣を覚えている」という特徴を持っている。そのため馬に乗ったり、ポストに手紙を配達するような素振りを繰り返すゾンビの姿も見られた。あらすじは以下の通りである。

> 突如として死者が蘇り人々を襲い、世界は地獄と化した。そんな中、元州兵のサージ（Sarge）は強盗を繰り返しながら、安全な場所を探し求めていた。ある時、デラウェア沖に安全な島があるという情報が舞い込み、サージは情報の真偽を疑いつつも仲間達とともにその島へ向かう。しかしそこで彼らを待ち受けていたのは、対立し争う二つの家とゾンビであった。一方の家、オフリン（O'Flynn）家はゾンビを手懐けようとするのに対し、もう一方の家、マルドゥーン（Muldoon）家はゾンビを壊滅させようとしていた。サージ達はその二つの家の対立に巻き込まれていく。

『サバイバル・オブ・ザ・デッド』では、人間が遊びのようにゾンビを殺したり、ゾンビを支配しようとするという特徴的な描写がある。さらに作品内では、ゾンビよりも人間の方がより多く人間を殺している。最後には人間の裏切りで解き放たれたゾンビが自分達を支配していた人間達を食い殺すのだが、散々好き勝手に行動してきた人間達が食べられるシーンは爽快でさえあった。20 世紀のゾンビ映画ではゾンビは最大の脅威として描かれる事が多かったが、『サバイバル・オブ・ザ・デッド』では、ゾンビは虐殺されたり支配されたりと、銃器を持ちゾンビ退治の知識を持った人間の前では弱い存在であるという印象が強い。ゾンビももちろん脅威ではあるのだが、それと同じくらい、もしくはそれ以上に人間の凶悪さが際立っていた。

争いあう家に関してだが、両家は確かにお互いに正論を述べており、どちらが間違っていてどちらが正しいのか、はっきりとは言い難い状態であった。危険なゾンビを駆除するか、元人間でさらに生前の習慣を覚えているゾンビを飼育し、労働力として使い共存をするのか、どちらも人間が生き延びる方法として選ぶ事ができると言えるだろう。ただし前者の場合には人間の安全はその時は確保できるかもしれないが、膨大な数のゾンビに対して戦いは長引き、また限られた場所で限られた生活を強いられる事で、人類は徐々に衰退していくだろう。一方、後者を選べば危険なゾンビを身近に置くという事でリスクが非常に高いが、成功すればこの先も安定して人類は生活する事ができるようになるだろう。サージ達は最初に出会った、ゾンビは壊滅させるべきと考える一家に味方をしたが、映画の最後では“I was on O'Flynn side from the beginning. So I just saw Muldoon as the enemy. But I always wondered.”「最初からオフリン側にいたからマルドゥーンは敵だった。だがいつも疑問だった。」というセリフに加え、“What if Muldoon was right? I guess we'll never know.”「もしもマルドゥーンが正しかったとしたら？答えはわからない。」とも述べており、そこから本当に自分達は正しかったのかはわからないという葛藤が伺える。そこにさらにゾンビと人間の関係も加わり、不毛な争いや殺し合いをする人間よりも、差別もなければ互いに争う事もない平等なゾンビの方が良い存在なのではないかという考え方もできる。このような『サバイバル・オブ・ザ・デッド』における争う両家、人間とゾンビの関係は、正義の相対性を体現しているのではないだろうか。つまり一体何が正義なの

か？そして何が悪なのか？と問われているような内容になっているのだ。

3.3 二作品の比較と二回のゾンビブーム比較

『ゾンビランド』では四人の登場人物達がそれぞれの利益のために一時的に協力する事はあっても、常に警戒しあい、裏切りもあった。一方、『サバイバル・オブ・ザ・デッド』では基本的には仲間同士は協力して行動している。しかしその『サバイバル・オブ・ザ・デッド』に関しても、何が正義なのかわからない分、誰がいつどんなきっかけで裏切りを起こすのかわからない。自分自身の決断さえも確信をもって信じられるものではなく、ゾンビよりも人間の方が凶悪で脅威の対象として描かれている。直接的ではなくても、この作品においても他人や自分自身に対する不信感が滲み出ていると考えられる。つまり二つの作品は一見共通点はないように見えるが、「人間不信」という点で共通しており、またそのような描写は 2 章で見てきたような国民の心境とも重ね見る事ができると言えるだろう。ゾンビの形象に関しても、どちらの作品のゾンビも今までのゾンビ映画以上に人間に近い特徴を持っている。この事で、今まで恐れるべき脅威しとして描かれてきたゾンビと人間の差が曖昧になりつつあるという事が強調され、ゾンビと人間が重なって見えるような効果が出ていると言える。

次に 20 世紀と 21 世紀のゾンビブームの比較を行う。今まで見てきたように、20 世紀のゾンビ映画と 21 世紀のゾンビ映画には、様々な相違点がある。しかし 20 世紀のゾンビブームと 21 世紀のゾンビブームにはある共通点が見られる。その共通点とは、どちらのブームも、アメリカ国内で国民の価値観が大きく揺らいだ時に起きているという事である。

まずは 80 年代頃に起きた一回目のゾンビブームについて分析していく。国内で公開されたゾンビ映画は前 10 年（70 年代）には 20 本程だったが、80 年代には 80 本を越える数のゾンビ映画が公開されている [8]。70 年代に国内で公開された長編映画総数はおよそ 1335 本、80 年代には 1812 本 [9] である。映画全体の増加率が約 1.4 倍程なのに対しゾンビ映画の増加率は四倍という事から、ゾンビ映画の伸びが著しいという事がわかる。つまり本数の増加はもちろん、ゾンビ映画のシェア自体が拡大したという事が言える。

このゾンビブームが起こった 80 年代には、1 章 3 節で述べたように泥沼化してしまったベトナム戦争がようやく終わったものの、そのトラウマが強

く残っていた。特にこのベトナム戦争では初めて戦争の様子がテレビで中継され、その中にはアメリカ兵による、ベトナムの一般人に対する残虐行為なども含まれていた。そのため戦争の悲惨さをメディアを通して知った国民の間では、徐々に反戦の声が高まって行った。結果的に戦争には敗戦し、ベトナム戦争は経済を悪化させる原因にもなってしまった。そんな中、アメリカの正義とは一体なんだったのかと疑問に思う国民も出てきたのだ。これは 2 章で見たような同時多発テロ後の状況と似ており、80 年代はまさにそれまでの正義に対する価値観がゆらいだ時代であった。

しかしこの時にはまだ正義の崩壊までには至っていなかったように思う。というのも、特に 70 年代後半から 80 年代にかけて繰り返し作られた戦争映画の多くは、苦しむアメリカ兵の姿や葛藤を悲劇的に描く事で、ベトナム戦争の被害者としてのアメリカを描いたものが多かったのだ[10]。悲惨な戦争の被害者としてのアメリカの立場を強調する事で、アメリカの正義は正当化され、どうにか保たれていたのではないだろうか。さらに 80 年代後半になるとそういった戦争映画の多くはそれまでのような悲劇的なラストではなく、希望を感じる事ができるようなラストを迎えるようになる[11]。90 年代には景気も回復し、暗い戦争の影も徐々に薄れトラウマは回復して行った。それにあわせるようにして一回目のゾンビブームは終わったのである。

二回目のゾンビブームは 2000 年代から現在まで続いている。2000 年から 2009 年までに公開されたゾンビ映画の本数は 200 本以上であるのに対し、前 10 年間（90 年代）のゾンビ映画数は 57 本程である。90 年代の総映画数は 2838 本で、80 年代と比べ映画の総数は増えているがゾンビ映画は減っており、ブームが落ち着いたという事が伺える。そして 2000 年代には総映画数は 5181 本程に増え、90 年代と比べるとその増加率は約 1.8 倍である。それに対しゾンビ映画の増加率は約 3.5 倍という事で、90 年代には比較的落ち着きを取り戻していたが、2000 年代にはゾンビ映画の総数と増加率が再び伸びているという事がわかる。

2000 年から現代までのゾンビ映画は本数だけではなく、興行収入成績においても変化が見られ、そこから 2000 年代と 80 年代のゾンビブームの相違点が伺える。80 年代には確かにゾンビ映画の本数が増え、以前に比べれば注目されるようになった。しかしこの頃にはまだ一部の人の間でしかゾンビ映画は見られておらず、ゾンビ映画はマニアックなジャンルであったと言え

る。その例として、80 年代に興行収入チャート十位内に入った作品を以下の表に示す。

表 1. 80 年代における興行収入チャート Top10 入りゾンビ映画

映画名 （公開年）	順位	チャート
『ナイト・オブ・ザ・コメット（*Night of the Comet*）』（1984）	7 位 （全 18 作品）	1984 年 PG-13 指定映画興行収入（Yearly PG-13 Rated 1984）
『死霊のえじき（*Day of the Dead*）』（1985）	8 位 （全 65 作品）	1985 年（600 以下の劇場で公開された映画限定）興行収入（Yearly Limited 1985）
『死霊のはらわた 2（*Evil Dead2*）』（1987）	6 位 （全 118 作品）	1987 年（600 以下の劇場で公開された映画限定）興行収入（Yearly Limited 1987）
『ペット・セメタリー（*Pet Sematary*）』（1989）	10 位 （全 123 作品）	1989 年 R 指定映画興行収入（Yearly R Rated 1989）

（Box Office Mojo より作成）

このように一定の条件で限定されたチャートによっては 10 位内にランクインする作品もあったが、興行収入成績としては好成績とは言えず、大衆に人気があるとは言い難い状況であった。次に 2000 年から現在に至るまでのゾンビ映画でも、同じようチャートの 10 位内に入った作品を見ていく。

表 2. 2000 年から 2013 年における興行収入チャート Top10 入りゾンビ映画

映画名 （公開年）	順位	チャート
『ドーン・オブ・ザ・デッド（*Dawn of the Dead*）』 （2004）	9 位 （全 179 作品）	2004 年 R 指定映画興行収入 （Yearly R Rated 2004）
『アイ・アム・レジェンド（*I Am Legend*）』 （2007）	4 位 （全 631 作品）	2007 年オープニング興行収入（Yearly Opening Weekends 2007）
	6 位 （全 631 作品）	2007 年興行収入 （Yearly 2007）
『ゾンビランド』 （2007）	10 位 （全 153 作品）	2009 年 R 指定興行収入 （Yearly R Rated 2009）
『モンスター・ホテル（*Hotel Transylvania*）』 （2012）	1 位 （全 200 作品以上）	総合 9 月オープニング興行収入（Opening Weekends – September）
	7 位 （全 200 作品以上）	総合秋オープニング興行収入（Opening Weekends – Fall）
『ウォーム・ボディーズ（*Warm Bodies*）』 （2013）	7 位 （全 69 作品）	Super bowl オープニング（フットボール優勝決定戦に合わせ公開された映画）興行収入（Super bowl Opening Weekends）
『ワールド・ウォーZ（*World War Z*）』 （2013）	6 位 （全 200 作品以上）	総合 6 月オープニング興行収入（Opening Weekends – June）

（Box Office Mojo より作成）

この表 2 から特に好成績のいくつかの作品に着目すると、『ワールド・ウォーZ』は人気シリーズの『X-Men:ファースト・ジェネレーション（*X-Men:*

First Class）』や『テッド（*Ted*）』を抑え、総合 6 月オープニング興行収入において 6 位になっている。『モンスター・ホテル』は『ラッシュアワー（*Rush Hour*）』などの有名作品を抑え総合 9 月オープニング興行収入 1 位、『アイ・アム・レジェンド』は 2007 年度オープニングの興行収入 4 位に加え、年間興行収入も 6 位という事で、大衆の認知度・人気も高いと言える。

これらの事から、2000 年代にはゾンビ映画が多くの人の間で見られるようになったという事がわかる。20 世紀のゾンビブームは一部の人の支持しか得る事ができていなかったのに対し、21 世紀のゾンビブームはより多くの国民の間で共有されているのだ。本数の増加だけではなく、ゾンビ映画を見る層の拡大という点から、21 世紀のゾンビブームは 20 世紀よりも規模が大きいと言えるだろう。

2 章で見てきたように、21 世紀は同時多発テロにより、アメリカ国民は他人に対する不信感や正義に対する疑問を強め、またリーマンショックで自信や夢が崩壊した事で、自分の価値観と向き合う必要が出てきた時期である。二回目のゾンビブームの規模が一回目よりも大きいという事には、同時多発テロやリーマンショックによる国民の不安の大きさ、環境や意識の変化の大きさ、またそれらの出来事が国民に与えた影響の深さが関係しているのではないだろうか。

それに加えて 21 世紀にゾンビ映画がより多くの人に見られるようになった背景には、様々な技術向上が関係していると考えられる。例としては、特殊メイク技術が発達し、より完成度の高いゾンビメイクやよりリアルな残酷描写が可能になった事、そして CG の発達によりゾンビとの交戦などをより派手に演出できるようになった事などが挙げられる。音響に関しても、20 世紀のゾンビ映画は多くがモノラルであったのに対し、21 世紀には 5.1ch サラウンドという、前後左右から異なる音が聴こえ、低音域の深みや質量の増した音響形式が主流となった。前述のように、21 世紀には走るゾンビが現れ、ゾンビは様々な角度から勢い良く襲ってくるようになった。アクティブになったゾンビの動きと、体全体で迫力を感じる事ができる音響との相乗効果により、映画館でゾンビ映画を見て得られる体験の満足感はとても大きいものになったと言えるだろう。その結果、映画の内容はもちろん、刺激的な感覚を味わうため映画館でゾンビ映画を見たいという人が増えたという事も考えられる。

3.4 ゾンビ映画の今後

3 章 3 節で述べたように、21 世紀には多くの人達がゾンビ映画を見るようになった。今までのゾンビ映画は比較的低予算の物が多かったのに対し、2013 年の『ワールド・ウォーZ』は製作費 200 億円という大作である。そしてこの『ワールド・ウォーZ』はゾンビにはつきものと言っても過言ではなかった残酷描写がほとんどなく、R 指定にもなっていない。同じく 2013 年公開の『ワォーム・ボディーズ』もゾンビ映画にしては比較的残酷描写は控えめで恋愛要素が強く、多くの人に受け入れられやすい仕上がりになっていると言える。まだ一部の層にしかゾンビ映画が見られていなかった 80 年代にも、友情・恋愛もののゾンビ映画は作られていた。しかしこの頃にはそうした作品にもゾンビ映画特有のグロテスクさは残っており、決して誰もが見やすいというものではなかった。表 1 に示した作品では『ナイト・オブ・ザ・コメット』以外は全て R 指定作品であるのに対し、表 2 の作品では R 指定作品は『ドーン・オブ・ザ・デッド』と『ゾンビランド』だけである。またそういった R 指定のゾンビ映画における人気は、R 指定作品内のみにとどまっているという事がわかる。これらの事から、2000 年以降のゾンビ作品に見られる残酷描写の減少は、R 指定要素を取り除きより多くの人が映画を見る事ができるようにと、大衆を意識した結果だと考える事ができる。

そもそもゾンビ映画の特有の魅力というのは、その低俗さにあると言えるだろう。というのも、普段の生活においては低俗なものはひた隠しにされる傾向にある。ゾンビ映画はプロットも何もないような、ただグロテスクだったり、ただ下品だったりするだけの、一般的に言う駄作も多いのだが、そういった醜く汚いゾンビ映画に普段の生活では遠ざけられているものをこっそり求めるという楽しみ方ができるのだ。そしてゾンビ映画の残酷描写では刺激的な非日常を味わう事ができるのに加え、グロテスクで緊張感のあるシーンにも拘らず役者の顔や行動が変だったり、作り物の人体が気になったり、意図せず笑いがこみ上げてしまう事もしばしばある。同じ残酷描写でも、胸の奥にこびりつくような嫌な恐怖を味わう事もできれば、どこか馬鹿馬鹿しさを感じ笑い飛ばす事ができる。良質な作品はもちろん、何度最悪な作品を見てしまったとしても、懲りずにまた次の作品を見たいと思ってしまうような魅力がゾンビ映画にはあるのだ。

前述の通り、2000 年以降、特に近年には残酷描写を抑え、R 指定のつか

ないゾンビ映画が比較的多く作られるようになった。そして CG やメイク、撮影技術の向上はもちろん、多額の製作費の投入により、完成度の高いゾンビが派手なアクションを行う事が可能になった。映画館でそういったゾンビ映画を見れば、大画面と 5.1ch サラウンドの音響で縦横無尽に突如襲いかかってくるゾンビの臨場感を体験する事ができ、迫力の面で言えばとても満足度は高い。だがそこに本当の恐怖や魅力があるのかは疑問である。もちろんそういった迫力を体感できるという事は魅力の一つにはなり得るが、それだけでは見るのがゾンビ映画である必要性はほとんどないと言える。とは言え、そこにさえ力を入れればある程度観客を満足させる事ができてしまうのも事実である。残酷描写や下品な描写を極力抑え、迫力のあるシーンを各所に入れておけば、多くの人にそれなりに見た気になれるような作品を届ける事ができるだろう。しかし勢いに任せて走り回り登場人物達と格闘するだけのゾンビは、観客を喜ばせるためにパフォーマンスを行う操り人形のようにさえ見えてきてしまう。これでは以前の奴隷だった時のゾンビと大差はないのではないだろうか。ゾンビ映画の魅力は、低俗さや残酷さなど、隠されたものを見る事ができるというところにあった。しかし近年のゾンビ映画ではその低俗さや残酷さなどを隠すような傾向が見られるようになったのだ。

近年では低予算でも完成度の高いゾンビ映画を撮る事ができるようになってきている。事実、イギリスでは 2008 年に『コリン　Love of the Dead（*Colin*）』というわずか＄70（約￡45）で製作されたゾンビ映画がヒットし、2009 年には CNN.com でも取り上げられた。[12] この映画でも残酷描写は控えめで、内容としてはゾンビになってしまった青年とその恋人との切ないラブストーリーを描き、多くの人に受け入れられる仕上がりだと言える。作り手にとってゾンビ映画は低予算で作れるという事が以前から魅力であり、『死霊のはらわた』も後に『スパイダーマン（*Spider Man*）』シリーズを撮るサム・ライミ（Sam Raimi）監督のデビュー作として撮られた。アメリカでも若手監督達が第二の『コリン　Love of the Dead』を目指し、低予算で多くの人に受け入れられるような、残酷描写の少ないゾンビ映画を製作する事が増えるかもしれない。そうすれば赤字を避けるために大衆を意識せざるを得ない大作はもちろん、低予算作品でもゾンビ映画特有の魅力は失われて行ってしまう恐れがある。

ホラーやスプラッター以外でも、コメディ、アクション、恋愛もの、友情

もの、家族愛ものなど、どんなゾンビ映画もゾンビの幅広い可能性の一つとして決して悪いものではない。今までも時代に合わせてゾンビ映画は変化を遂げてきているし、これから新たなアプローチでゾンビ映画が描かれ、ゾンビ映画の可能性がさらに広がるのではないかという期待を抱く事もできる。しかしその反面、これから大衆向けの作品ばかりが増えれば、ゾンビはどんなシチュエーションにも組み込む事ができる、ただの便利な商売の道具として扱われる可能性が大いにあると考えられる。物語の中でも、前述の通り 21 世紀のゾンビは人間に虐殺されたり、飼われたり、弱く哀れな一面が目立ってきている。そして今後ゾンビは商業的に利用され、物語の中でも外でも、再び労働する哀れな奴隷に戻ってしまうのではないだろうか。

この章では、『ゾンビランド』と『サバイバル・オブ・ザ・デッド』には共通して他人や自分に対する不信感が強く表されていると分析した。そして 20 世紀と 21 世紀に起きたゾンビブームは、共に社会に大きな変化が起き、国民のそれまでの考え方や価値観が揺らいだ時に起きていると考察した。また 21 世紀のブームの方が 20 世紀よりも規模が大きいという事から、21 世紀に起こった同時多発テロやリーマンショックなどの変化が国民に与えた影響の深さなどが伺えると考えた。同時に 21 世紀のゾンビ映画がより多くの人に見られるようになった要因の一つとして、ゾンビ映画を映画館で見る事により得る満足感が大きくなった事も関係していると分析した。その一方で、今後ゾンビ映画の大衆化が進めば、ゾンビの魅力が薄れてしまう危険があるという事についても言及した。

結論

1 章では 20 世紀のゾンビ映画及びゾンビの位置付けの変遷について分析して行った。1～3 節を通し、ゾンビが労働する奴隷から自立した怪物であるモダン・ゾンビになりゾンビ映画というジャンルを確立した事、そしてその事でゾンビが人々に認められるようになりゾンビブームが起こった事を考察した。またゾンビ映画と社会背景の関連性も同時に探り、ゾンビは社会の不安を反映する鏡のような役割を果たし得るという事も明らかにした。

2 章では 21 世紀の社会背景について、同時多発テロとリーマンショックに焦点をあてて分析した。同時多発テロにより、今まで自分達が信じてきた

正義に不信感を持つ国民が増えたという事、リーマンショックにより今までの上向きの生活が一変し、国民が自信喪失に陥ったという事に言及した。そしてこれらの出来事により、それまでの価値観に対する疑問を抱いた国民も少なくないのではないかと考えた

3 章では『ゾンビランド』と『サバイバル・オブ・ザ・デッド』を用い、21 世紀のゾンビ映画を 20 世紀のゾンビ映画と比較し、また 21 世紀のゾンビ映画及びゾンビの傾向を探った。その結果 21 世紀にはゾンビがアクティブに走ったり、人間だった頃の習慣を覚えているといった特徴を持っている事がわかった。そして 21 世紀の二作品は人間不信という点で共通しているという事も明らかにした。次に 20 世紀のゾンビブームと 21 世紀のゾンビブームを比較し、どちらも国民の価値観が揺らいだ時に起こっているという事、21 世紀の方がその規模が大きく、より多くの人がゾンビ映画を見るようになったという事を分析し、21 世紀におけるゾンビの位置付けの変化を明らかにした。一方で大衆向けのゾンビ映画が多く作られるようになれば、ゾンビの本質的な魅力が失われてしまう危険性があるという事についても言及した。

ゾンビは奴隷から自立した怪物になり、その地位を確立した。そしてゾンビの自立により確立されたゾンビ映画は、時代の不安や脅威を反映するようになり、またベトナム戦争や同時多発テロ、リーマンショックなど大きな出来事が起こった時、その不安やストレスと呼応するように数を増やしていった。このように 1 章や 3 章のゾンビブームの考察を通して、ゾンビ映画は「アメリカ社会の表面上の不安」を反映するという事を明らかにしたが、2 章と 3 章の二作品の考察から、ゾンビは「国民の心の中にある敵や脅威」を映し出す役割をも果たしていると考えた。というのも、2000 年代には同時多発テロやイラク戦争などがあり、また愛国心の鼓舞が行われた事で、一見社会的な敵意はテロリストやイラク軍など外に向けられていたように見える。しかし 3 章で見てきた『ゾンビランド』や『サバイバル・オブ・ザ・デッド』からは、他者全般、そして時に自分自身がゾンビのように脅威であるという事が読み取れる。これは 2 章で見てきたように、アメリカ国民の心の中に芽生えた、またいつどこで誰がテロを起こすかわからないという不安感や、今まで信じてきた正義や価値観に対する疑問が反映された結果だと言えるだろう。

ゾンビ映画は普段の生活では隠されてしまいがちな、汚さや醜さなどを体現してきた。大衆に受け入れられる事がなくても、何十年にもわたって多くのゾンビ映画が作り出されてきたのは、そういった隠されたものを見たいという欲求がいつの時代にも存在していたからだと考えられる。「見たい」と思った人が見るゾンビ映画だからこそ、光の当たらない部分も隠さずに描き出す事ができ、表面上だけではなく一部の国民の心の中に芽生え始めたものまで映し出す事ができたのではないだろうか。

しかし今ゾンビ映画は多額の予算を投入した大作はもちろん、低予算の作品でも大衆向けのクオリティ、大衆向けのストーリーで映画を撮りヒットさせる事ができるようになり、大衆化の波に押されつつある。これから大衆向けの作品が主流になってしまえば、汚さや醜さを見たくない人にも映画を「見せる」ために、そういったものを隠すようになるだろう。大衆が見たいと思っているもの、または誰かが大衆に見せたいと思っているものを意図的にゾンビに映し出すようになってしまえば、もうその鏡で社会の暗い部分や、国民の心の中にあるものなど、アメリカの本質的な部分を映し出す事はできなくなってしまうと考えられる。

一方で、人間の隠されたものを見たいという欲求はこの先も完全に消える事はないだろう。そしてゾンビは映画だけではなく、小説や漫画、テレビ、テレビゲーム、オンラインゲームなど、既に様々な媒体に感染している。仮に今後ゾンビ映画においてゾンビが奴隷化されてしまったとしても、隠されたものが見たいという欲求がなくならない限り、それを映し出すゾンビは何度倒されても再びどこかで起き上がってくる事だろう。

注

[1] 『プラトーン（*Platoon*）』（1986）など。

[2] 『ウィンター・ソルジャー　ベトナム帰還兵の告白（*Winter Soldier*）』（1972）など。

[3] *CNN Poll: Opposition to Iraq war at all-time high*: 7.

<http://i.a.cnn.net/cnn/2006/images/08/21/rel20b.pdf>

[4] *Americans Approve of Military Action Against Libya, 47% to 37%* 22 *March, 2011*.

<http://www.gallup.com/poll/146738/americans-approve-military-action-against-libya.asx>

[5] *Ipsos Poll Conducted for Reuters, Syrian Intervention 9.03.13*.

<http://www.ipsos-na.com/download/pr.aspx?id=12997>

[6] テロにより正義に対する考え方が変化したと述べたが、これは全国民に当てはまるというわけではない。確かにイラク戦争の支持率は徐々に低下したが、2004 年時点でもなお約半数が支持しているという事実は無視できない。またリビアにおける軍事介入の支持率を見ると、前例に比べれば支持率は低いと言えど、やはり已然過半数が支持している状態である。このように既存の正義をまだ信じている、信じたいと思っている国民も多いということは否定できない。

[7] 主人公達の呼び名（地名）はそれぞれインディアンと関係している。コロンブスは、アメリカインディアン協会（Society of American Indians）が設立された地であり、タラハシーはセミノール戦争の戦地である。ウィチタはアメリカ南部で最も人口の多いインディアン部族である、ウィチタ族（Wichita）に由来している。そしてリトルロックはインディアン戦争のアパッチ作戦で名を挙げたアーサー・マッカーサー・ジュニア（Arthur　MacArthur, Jr.）の赴任地である。これらの事から、主人公達はインディアンを、ゾンビは白人を体現していると考えられる。白人の行った同化政策はまさにゾンビの感染と重ね見る事ができるだろう。

[8] ゾンビ映画の公開数は伊東美和『ゾンビ映画大辞典』及び『ゾンビ映画大マガジン』より算出。

[9] 公開映画総数は Box Office Mojo 及び IMDb より算出。ただし公開映画総数は統計や調査ごとにそれぞれ数値が前後しており、また同じ調査でも数年後には数値が微調整される事も多い。よって正確な数値を把握する事は難しい。しかし映画の増加・減少率、傾向においてはどの調査も概ね一致している。そのため今回は必要な期間分全てのデータを入手する事ができた、Box Office Mojo 及び IMDb のデータを参考値として利用する。

[10] 『ディア・ハンター（*The Deer Hunter*）』（1978）など。

[11] 『ジャックナイフ（*Jacknife*）』（1989）など。

[12] *$70 zombie movie hits the big screen*.
<http://edition.cnn.com/2009/SHOWBIZ/Movies/07/28/70.dollar.movie.distribution/>

参考文献・資料

Americans Approve of Military Action Against Libya, 47% to 37% 22 March, 2011. Web. 4 October, 2013.
< http://www.gallup.com/poll/146738/americans-approve-military-action-against-libya.aspx>

Box Office Mojo. Web. 10 October, 2013.
<http://www.boxofficemojo.com>

CNN.com Transcript of President Bush's address. Web. 20 November, 2013.
<http://edition.cnn.com/2001/US/09/20/gen.bush.transcript/>

CNN Poll: Opposition to Iraq war at all-time high: 7. Web. 4 October, 2013.
<http://i.a.cnn.net/cnn/2006/images/08/21/rel20b.pdf>

IMDb. Web. 10 October, 2013.
<http://www.imdb.com>

Ipsos Poll Conducted for Reuters, Syrian Intervention 9.03.13. Web.4 October, 2013.
<http://www.ipsos-na.com/download/pr.aspx?id=12997>

The New York The New York Times/CBS News Poll 23-27 April, 2004：27. Web.4 October, 2013.
<http://www.nytimes.com/packages/khtml/2004/04/28/politics/20040429_POLL_RESULTS.html>

$70 zombie movie hits the big screen. Web. 12 November, 2013.
<http://edition.cnn.com/2009/SHOWBIZ/Movies/07/28/70.dollar.movie.distribution/>

有賀夏紀『アメリカの 20 世紀（下）1945 年～2000 年』中公新書、2002 年。

伊東美和（編）『ゾンビ映画大辞典』洋泉社、2003 年。

伊東美和（編）『ゾンビ映画大マガジン』洋泉社、2011 年。

参考映画

Colin. Dir. Marc Price. Kaleidoscope Entertainment, 2008.　[『コリン Love of the Dead スペシャル・エディション』、Happinet(SB)(D)、2011、DVD]。

Night of the Living Dead. Dir. George A. Romero. The Walter Reade Organization, 1968.　[『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』株式会社デックス エンタテインメント、2006、DVD]。

Ouanga. Dir. George Terwilliger. Real Life Dramas, 1935. Film.

Revolt of the Zombies. Dir. Victor Halperin. Academy Pictures Distributing Corporation, 1936. Film.

Survival of the Dead. Dir. George A. Romero. E1 Entertainment, Magnet Releasing, 2009.　[『サバイバル・オブ・ザ・デッド』Happinet(SB)(D)、2010、DVD]。

The Evil Dead. Dir. Sam Rimi. New Line Cinema, 1981. [『死霊のはらわた』J.V.D. 、2000、DVD]。

Warm Bodies. Dir. Jonathan Levine. Summit Entertainment LP, Lionsgate Films, 2013. Film.

White Zombie. Dir. Victor Hugo Halperin. United Artists Corporation, 1932.　[『恐怖城 ホワイト・ゾンビ』有限会社フォワード、2009、DVD]。

World War Z. Dir. Marc Forster. Paramount Pictures, 2013. Film.

Zombieland. Dir. Ruben Fleischer. Columbia Pictures, 2009. [『ゾンビランド』Happinet(SB)(D)、2011、DVD]。

トニ・モリスン『スーラ』のスーラと薔薇のあざ

片桐　小雪

序論

この論文では、トニ・モリスン（Toni Morrison）著『スーラ』（*Sula*）を読み、この作品においてトニ・モリスンが主人公スーラ（Sula）に持たせた役割とその意味について論じていきたい。

私は、『スーラ』という作品を読み進めていく中で、主人公のスーラはもちろんのこと、彼女の目の上に生まれつき存在する薔薇の形をしたあざ（the birthmark）が、物語の冒頭から終末にかけて、一本の軸として存在しているように感じた。そして、スーラを特徴づけるこのあざが、この物語の重要な鍵となっていると考えたので、「あざ」をテーマに選んだ。

スーラのあざは、見る人によってそのイメージを多様に変えていく。第 1 章では、このあざのイメージの変化を追い、イメージの意味とそのイメージのもたらすスーラに対する印象や見方について考察していく。また、『スーラ』は、オハイオ州メダリオン（Meddallion）に存在する「ボトム」（the Bottom）という黒人の共同体を舞台に物語が進行していくのだが、第 2 章では、スーラが生まれた地であり、死を迎える地でもある黒人共同体ボトムにおける、スーラの存在価値と生き方について考察していく。第 3 章では、他者から見たスーラではなく、スーラ自身がどのように生きたのかについて考察し、論じていきたいと思う

第 1 章　あざのイメージ

この章では、スーラのあざの形に注目し、そこから映し出される意味を考えていきたい。最初にスーラのあざについて触れられているのは、以下の文である。

> Sula was a heavy brown with large quiet eyes, one of which featured birthmark that spread from the middle of the lid toward the eyebrow, shaped something like a stemmed rose. It gave her otherwise plain face a broken excitement a blue-blade threat like the keloid scar of the razored

man who sometimes played checkers with her grandmother. The birthmark was to grow darker as the years passed, but now it was the same shade as her gold-flecked eyes, which, to the end, were as steady and clean as rain.（52-53）

スーラは濃い褐色の肌で、大きく穏やかな目をしていた。片方の目はまぶたの中央から眉毛に向かって広がる、茎のついた薔薇のような形をしたあざがあった。それは、それがなければ平凡な顔に、刺激と、時々祖母とチェッカーをする、かみそりで切られた男のケロイドの傷跡のように、青い刃の脅威を与えた。そのあざは、歳を重ねるごとに濃くなったが、今はまだ金色の斑点のある彼女の眼と同じ色をしていた。彼女の眼は、終わりまで雨のように変わらず、きれいであった。

トニ・モリスンは、スーラという少女について説明する際に、彼女のあざについて深く言及している。あざによってスーラは平凡な存在とは異なる異質な存在として特徴付けられていること、あざは、年々濃くなっていることを記している。ここから、スーラの身体的特徴において、あざは、非常に重要な意味を持っていることが窺える。生まれつきこの醜いあざを持つことで、他者よりも劣っていることを印付けられているのである。

スーラのあざは、見る人によってそのイメージは“a stem and rose”（74）「薔薇」、“a copperhead”（103）「蛇」、“Hanna’s ashes marking”（114）「遺灰」、“a tadpole”（156）「おたまじゃくし」と様々に変化する。ここでまず、スーラの母親であるハナ（Hannah）から見たスーラとあざについて見ていきたいと思う。ハナは、“The birthmark over her eye was getting darker and looked more and more like a stem and rose”（74）「彼女の目の上にあるあざはより濃くなり、より一層茎のついた薔薇のように見えてきていた」というように、薔薇の形をしていると受け取った。これは、この文の前に述べられている“Sula was acting up, fretting the deweys and meddling the newly married couple. Because she was thirteen, everybody supposed her nature was coming down, but it was hard to put up with her sulking and irritation”（74）「スーラはいたずらをし、デューイをいらいらさせ、新婚夫婦におせっかいを焼いていた。彼女は 13 歳であったので、皆は彼女の気性も落ち着いてくると考えていたが、彼女が拗ねたりいらだたせたりすることを我慢することは難しかった」といった描

写から窺えるように、スーラの気性の荒さや刺々しさを茎のついた薔薇とつなげている。また、歳を重ねて落ち着くであろうと思われた気性が落ち着かず、困らせてばかりいる様子からそのあざも黒味を増していっているようにハナには見えたのだろう。また、10 年ぶりにボトムに帰ってきたスーラを見て、彼女の親友のネル（Nel）は、“The rose mark over Sula’s eye gave her glance a suggestion of startled pleasure. It darker than Nel remembered”（96）「スーラの目の上にある薔薇のマークは彼女のまなざしに驚きの喜びを与えていた。それはネルが記憶していたよりも黒味がかった」と感じている。ネルの夫ジュード（Jude）とスーラが関係を持ち、ネルがスーラを憎しみ出してから 3 年後、“For the first time in three years she would be looking at the stemmed rose that hung over the eye of her enemy”（138）「三年経って初めて彼女は、彼女の敵の目の上にぶら下がる茎のついた薔薇を見るつもりだった」と考え、続いて、“She would be facing the black rose that Jude had kissed…”（138）「彼女はジュードがキスをした黒い薔薇に向き合う」と述べられている。ハナと同様にネルもスーラのあざを薔薇と受け取り、表現しているのである。また、その薔薇は、だんだんと黒味を増している様子が描かれている。黒人であるスーラは濃い褐色の肌を持ち、本来あざの色味はあまり目立たないはずである。しかし、徐々に黒味を増し存在感を出してくるこのあざには、スーラの邪悪さが表現されているのであると考える。スーラがより悪の存在になっていくにしたがってこのあざも黒味を増しているのである。ハナとネルにとってスーラは歳を重ねることに邪悪さを増していく刺々しい薔薇なのである。

次にスーラのあざのイメージを受け取ったのはネルの夫ジュードである。彼があざから受け取ったイメージとその意味を見ていきたい。最初スーラを見て、“…this slight woman, not exactly plain, but not fine either, with a copperhead over her eye”（103）「正確にはブスではないが、美しくも無い、目の上にアメリカマムシを持つほっそりとした女」と表現した。そしてその直後、スーラと会話をし、“…her wide smile took some of the sting from that rattlesnake over her eye”（103）「彼女の大きな笑顔は彼女の目の上にあるガラガラヘビからある程度毒牙を取り払った」と表現した。わずかなコミュニケーションを通してジュードはスーラへの印象を大きく変えた。この時点からスーラに魅了されてきているように見受けられる。あざの表現は、アメリカマムシからガラガラヘビへと変化しているが、どちらも毒蛇のことを示し

ている。ジュードは、スーラのあざから「蛇」をイメージとして受け取っている。キリスト教において蛇は、イヴを誘惑し、そそのかした悪魔であり、蛇によってイヴはエデンの園を追放されてしまう。スーラのあざに蛇を見たジュードは、この後にスーラに誘惑され、スーラと関係を持ち、ボトムを去ることとなる。ジュードは、“The two of them together would make one Jude”（83）「彼ら二人で一緒に一人のジュードを作り上げる」と考え、自らの幸せ、欲望のために結婚した。しかし、スーラをきっかけに彼は、その欲望を満たすことの出来た幸せな家庭を去らなければならなくなった。ジュードにとってスーラは、エデンの園から追放されるきっかけとなったイヴにとっての蛇であり、悪魔なのである。

次に、ボトムの人々が最終的に下したスーラのあざに関する解釈を見ていきたい。スーラが祖母であるエヴァ（Eva）を追いやり、ネルからジュードを寝取った後、ボトムの人々はスーラを忌み嫌い、スーラを“a roach”（112）「ゴキブリ」、“a bitch.”（112）「あばずれ」、“Devil”（117）「悪魔」、“a witch”（150）「魔女」などとして扱い、蔑んだ。その中で、スーラをきっかけに不幸が起こったとされる事件を期に、“That incident, and Teapot’s Mamma, cleared up for everybody the meaning of the birthmark over her eye; it was not a stemmed rose, or a snake, it was Hanna’s ashes marking her from the beginning”（114）「その事件とティーポットの母親は彼女の目の上にあるあざの意味を皆に明らかにした。それは茎のついた薔薇でも蛇でもなく、最初からハナの遺灰が印付けたものであった」と、捉えるようになった。ここでボトムの人々は、スーラのあざは死者の灰が印付けた忌まわしい印であると決定付けた。彼らにとってスーラは、忌み嫌うべき、恐ろしい存在なのである。

ここまでの考察では、『スーラ』に登場する人物、すなわちボトムの人々は、スーラのあざについて邪悪な印象を持ち、そのあざはスーラに刻まれた「悪」の印であると意味づけていたことが窺える。しかし、シャドラック（Shadrack）は違った。彼はスーラを見て、“She had a tadpole over her eye (that was how he knew she was a friend—she had the mark of the fish he loved)”（156）「彼女の目の上にはおたまじゃくしがいる（そういうわけで彼は彼女が友達であると認識した—彼女は彼の愛する魚の印を持っていた）」と述べている。シャドラックはスーラのあざを、「おたまじゃくし」、「愛する魚の印」として受け取った。このことから、彼がスーラに対して最初から好意的な印象を抱

いたことが窺える。そして後にスーラの残したベルトに、“His visitor, his company, his guest, his social life, his woman, his daughter, his friend—they all hug there on a nail near his bed”（157）「彼の訪問者、仲間、客、社会生活、女性、娘、友人—それらすべてが彼のベッドの近くにある釘に止められていた」という思いを乗せていることから、彼がスーラに対して最後まで好意的で大切な感情を持っていたことが窺える。さらに、シャドラックはスーラと初めて会い、その顔を見たとき、 “She had wanted something—from him. Not fish, not work, but something only he could give”（156）「彼女は彼に何かを求めていた。魚でも仕事でもなく、しかし彼だけが与えることの出来る何かを」と、感じた。ここで彼はスーラに他のボトムの住民とは違う特別性を感じ取っている。そしてこのスーラの要求に対して、彼は以下のような行動を取る。

> …when he looked at her face he had seen also the skull beneath, and thinking she saw it too—knew it was there and was afraid—he tried to think of something to say to comfort her, something to stop the hurt from spilling out of her eyes. So he had said “always”, so she had not have to be afraid of the change—the falling away of skin, the drip and slide of blood, and the exposure of bone underneath. He had said “always” to convince her, assure her, of permanency. （157）
> 彼が彼女の顔を見たとき、彼はその下の頭蓋骨をも見て、彼女もそれを見ているのだと考えた。—頭蓋骨がそこにあり、それを恐れているのだと—彼は彼女を慰める言葉であり、彼女の目から零れ落ちる痛みを止める言葉を考えようとした。そして彼は「いつも」といった。彼女が変化を恐れる必要の無いように。—皮膚が剥げ落ち、血が滴り流れ、下にある骨がさらされるという変化を。彼は彼女に永続性を納得させ、保証するために「いつも」と言った。

シャドラックはスーラから死へ向かう「変化」に対する恐れを見て取ったのである。そして、変わらぬ永続性を提示することで彼女を救おうとしたのである。しかし後にスーラが死んだ際、 “he had been wrong”（157）「彼は間違っていた」、“No ‘always’ at all”（158）「『いつも』など決して存在しない」と気付き、悲しみ、彼は死を受け入れることとなる。

また、シャドラックがスーラのあざに好意的な印象を抱いていると述べたが、具体的に彼はスーラのあざに何を感じたのだろうか。シャドラックはスーラのあざにおたまじゃくしを見た。おたまじゃくしという生き物は、成長の過程で蛙へと「変化」を遂げる生き物である。手足もなく、水中でしか生きることの出来ない不自由なおたまじゃくしは変化を遂げ、自由に跳び回ることの出来る蛙へと成長するのである。彼はあざのおたまじゃくしに、スーラが他のボトムの住民とは異なる生き方を選び、一般的な生き方から変化を起こすこと、スーラが他の女性たちとは一線を画す新しい女性であることを感じ取ったのではないだろうか。おたまじゃくしから蛙への変化を通して自由に限りのある黒人女性という存在から自由な新しい女性として飛躍する姿をスーラに見ているのではないだろうか。シャドラック以外のボトムの人々はスーラの新しさを受け入れることが出来ず、邪悪で異質な存在として扱った。しかし、シャドラックだけはスーラ自身とその新しい女性としての生き方を認め、むしろそこに希望を見出して励まし、後押ししたのである。

第 2 章　ボトムにおけるスーラ

この章では、スーラが生まれ、死を迎えた地であるボトムという黒人共同体に注目し、黒人共同体のあり方とスーラの果たした役割について考察していく。

まず、ボトムがどのような場所であったかということを見ていきたい。ボトムは、白人によって与えられた地に住まう黒人たちの居住区である。ボトムは、“It wasn’t a town anyway: just a neighborhood…”（4）「町ではなく、ただの近隣社会であった」。町などの正式な組織ではなく、ただの近隣社会であったためそこには明記された法や定めは無いが、暗黙の内に成り立っているルールが存在していた。また、このボトムの様子について以下のように描写されている。

> …if a valley man happened to business up in those hills—collecting rent or insurance payments—he might see a dark woman in a flowered dress doing a bit of cakewalk, a bit of black bottom, a bit of “messing” around to the lively notes of a mouth organ. Her bare feet would raise the saffron dust that

> floated down on the coveralls and bunion-split shoes of the man breathing music in and out of his harmonica. The black people watching her would laugh and rub their knees, and it would be easy for the valley man to hear the laughter and not notice the adult pain….（4）
> 谷間の白人が家賃や保険金の集金のためにたまたまこの丘に訪れると、花柄の服を着た黒人の女がケーキウォークやブラックボトムをちょっとだけ踊ったりハーモニカの音に合わせたりしているのを見たかもしれない。彼女の裸足がサフラン色の埃を上げ、それがハーモニカを吹く男のカバーオールや裂けた靴に積もっていた。彼女を見ている黒人たちは笑い、ひざをこすり合わせる。そして、谷間の白人にとってその笑いを聞くことは容易であるが、大人の痛みに気付くことはない。

黒人たちは白人には伝わることの無い大人の痛みを黒人のみで共有し、抱えながら、暮らしていることが窺える。また、エヴァの夫が家を去り、エヴァが一人で子どもを育てなければならなくなったとき、近隣に住まう家族たちが援助や手助けをしたこと、エヴァ自身も後に近隣の子どもを養子として受け入れたことなどから、このボトムでは、住民同士が密接な関係にあり、互いに精通し、支えあいながら暮らしていることがわかる。

以上では、ボトムが近隣社会という小さなコミュニティであり、その狭い親密性がもたらした良い作用を挙げた。しかし、この親密性は反対に負の作用を働くこともある。このボトムという黒人共同体において、人々は皆役割を持って暮らしている。妻であったり、親であったり、とその役割はさまざまであるが、他の共同体と一線を画す特徴として、彼らは、「悪」という存在にもその役割と価値を持たせ、排除することなく共同体の生活の一部に取り込んでしまうのである。ボトムにおいて、この悪という役割を担わされた人物はシャドラックとスーラである。ボトムの住民は彼らのことを“Two devils”（117）「二匹の悪魔」に仕立て上げた。シャドラックが行進を始めたとき、“His eyes were so wild, his hair so long and matted, his voice was so full of authority and thunder that he caused panic on the first…”（15）「彼の目は凶暴で、髪は長くもつれ、声は権威と雷のような響きを持っていたので、人々は最初恐怖を感じた」。しかし、その恐怖や不安を抱きながらも、“Once the people

understood the boundaries and nature of his madness, they could fit him, so to speak, into the scheme of things”（15）「人々は、ひとたび彼の狂気の限界と性質がわかると、いわば物事の枠にはめることが出来た」そして、“…they had absorbed it into their thoughts, into their language, into their lives”（15）「彼らはそれを彼らの思想、言葉、生活の中に吸収してしまった」、共同体の生活の一部分にしてしまったのである。

また、10 年ぶりに派手な格好をしてボトムに戻ってきたスーラもボトムの住民に「悪」として迎え入れられることとなる。第 1 章でも触れたが、ボトムの人々はスーラの悪い噂を聞き、彼女を「ゴキブリ」や「あばずれ」などと呼び、蔑んだ。しかし、“…it was the men who gave her to the fatal label, who fingerprinted her for all the time”（112）「彼女に決定的なレッテルを貼り、いつまでも残る特徴を付けたのは男たちであった」。彼らは、“Sula slept with white men”（112）「スーラは白人の男と寝た」という、黒人女性にとって“guilty of the unforgivable thing—the thing for which there was no understanding, no excuse, no compassion”（112）「許されざる、理解する余地も弁明する余地も同情する余地も無い罪」であり、 “the dirt that could not ever be washed away”（112）「二度と洗い流すことの出来ない汚れ」であるとされる行為を噂だてた。この行為は、“There was nothing lower she could do, nothing filthier”（113）「彼女が出来ることでこれ以上に卑しく汚らわしい行為は何もない」と言われているように、スーラを悪に仕立て上げるのに最も効果的な噂であったといえる。また、この男たちの行動について、以下のように描かれている。

> The fact that their own skin color was proof that it had happened in their own families was no different to their bile. Nor was the willingness black men to lie in the beds of white women a consideration that might lead them toward tolerance. They insisted that all unions between white men and black women be rape; for a black woman to be willing was literally unthinkable. In that way, they regarded integration with precisely the same venom that white people did.（113）
>
> 彼ら自身の肌の色が、自身の家系で白人と交わったことがある証明であるという事実は彼らのかんしゃくと何の違いも無い。また、黒人の

> 男たちが白人の女のベッドに寝たいという考えも彼らを寛容にすることはなかった。そういう風にして、彼らは統合を、白人が行ったそれとまったく同じ憎きものと見なした。

ボトムの男たちはスーラを憎むことに重きを置いていたのではないだろうか。そして、この噂によって“all minds were closed to her”（113）「すべての心は彼女に対して閉ざされた」のである。このときからスーラは完全に悪のレッテルを貼られ、悪魔として生きることになる。ボトムの人々はスーラをこれほどまでに蔑み、ののしりながらも自分たちの共同体から取り除こうとはしなかった。以下の文にその様子が描かれている。

> There conviction of Sula’s evil changed them in accountable yet mysterious ways. Once the source of their personal misfortune was identified, they had leave to protect and love one another. They began to cherish their husband and wives, protect their children, repair their homes and in general band together against the devil in their midst. In their world, aberrations were as much a part of nature as grace. It was not for them to expel or annihilate it. （118）
> スーラの邪悪さへの有罪判決はもっともだが不思議な方法で彼らを変えた。ひとたび彼らの個人的な不幸の源が認められると、彼らはお互いを保護し合い、愛し合うことを許された。彼らは自分の夫や妻を大事にし始め、子どもたちを守り、家を修復し、彼らの真ん中にいる悪魔に対抗してたいてい団結し始めた。彼らの世界では、異常は恩寵と同じほど自然の一部であった。彼らはそれを追放したり根絶したりすることはなかった。

ボトムの人々はスーラにボトムに存在する悪や不幸を彼女に背負わせることで、自分たちの罪や責任をもすべて彼女に転嫁する対象であるスケープゴートという役割を彼女に与えたのである。スケープゴートとは、『広辞苑』によると、「(聖書に見える「贖罪の山羊」の意)民衆の不平や憎悪を他にそらすための身代り。社会統治や責任転嫁の政治技術で、多くは社会的弱者や政治的小集団が排除や抑圧の対象に選ばれる」というものである。ボトムの住

民たちは、ボトムにおける憎悪や負の要素をスーラに押し付け、スーラを悪魔に仕立て上げ、忌み嫌い、彼女に対して心を閉ざした。そしてスーラに対抗するため、他の住民はそれぞれの役割を全うし始めた。彼らにとってスーラは蔑む存在であるにもかかわらず、排除することなく受け入れた。そして皮肉にも、その悪魔たるスーラによって、スーラから身を守るためにボトムの人々はむしろ世間的に正しいとされる行動を取り始めた。スーラのおかげでボトムは秩序を保つこととなったのである。スーラはこのボトムという共同体にとってスケープゴートであり、必要悪なのである。このボトムにおけるスーラの必要性は、この後、スーラの死によって明るみに出ることとなる。ボトムでは、“Hard on the heels of the general relief that Sula’s death brought a restless irritability took hold”（153）「スーラの死という安堵の後すぐに落ち着かないイライラが生まれた」、そして “Without her mockery, affection for others sank into flaccid disrepair”（153）「彼女の嘲笑がなくなり、他者への愛情はたるんで荒廃した」。スーラの悪意から団結して自分たちの地位や役割を守ってきたボトムの人々から“The tension was gone and so was the reason for the effort they had made”（153）「緊張は去り、彼らが今までしてきた努力をする必要もなくなった」。スーラにすべての悪を押し付けることで秩序を保ってきたボトムは、スーラの死によって一つに集約されていた悪が分散された。人々に忌み嫌われ、蔑まれてきたスーラはボトムにおいて必要不可欠な存在であり、スーラと秩序を失ったボトムはそのまま崩壊へと向かってしまう。スーラを失った後、ボトムが崩壊していなければ彼らは代わりとなる新たなスケープゴートを生み出していただろう。彼らの社会において、悪の排除は社会の崩壊を招いてしまうのである。

第 3 章　スーラ・ピースという女性

第 1 章、第 2 章とボトムの人間から見たスーラについて論じてきた。そこで、この章では、スーラの生き方についてスーラ自身を軸に論じていきたい。

まず、スーラの家庭環境から見ていく。まず、スーラの生まれ育ったピース家について以下のように記されている。

its owner, who kept on adding things: more stairways—there were three sets

> to the second floor—more rooms, doors and stoops. There were rooms that had three doors, others that opened out on the porch only and were inaccessible from any other part of the house; others that you could get to only by going through somebody's bed room."（30）
> 家の主は物を付け加え続けた。もっと階段を—2 階に上がる階段は 3 セットあった—もっと部屋を、ドアを、玄関を。ドアが 3 つある部屋もあった。玄関にだけ開き、他の家のどこからも入ることの出来ない部屋もあった。誰かの寝室を通り抜けなければ入ることの出来ない部屋もあった。

この巨大でいびつな家には、この家の主であるスーラの祖母エヴァの性格や生き方がそのまま反映されているように見える。規則や常識を設けず、自由な設計がなされている。そして、この家に住まうピース家（the Peace）の女性もまた、常識にとらわれない生活を送る新しい女性たちであった。彼女たちを新しい女性たらしめる最たる特徴は、"those Peace women loved all men. It was manlove that Eva bequeathed to her daughters"（41）「ピース家の女たちはすべての男を愛した。エヴァが娘たちに残したのは男たちへの愛だった」とあるように、エヴァから引き継がれた、"The Peace women simply loved maleness, for its own sake"（41）「ピース家の女たちは単純に男らしさが好きで、その男らしさを愛した」という点である。ピース家の女性たちは常識にとらわれることなく、自由に男性と愛し合っていた。そして、そういった女性たちを見て育ったスーラもまた、その影響を受け、何のためらいも無く多くの男性と関係を持つ女性へと成長した。

そのような自由な環境で育ったスーラであったが、スーラは自身を自由であると感じてはいなかった。ネルと同様、12 歳の時点で、"each had discovered years before that they were neither white nor male, and that all freedom and triumph was forbidden to them, they had set about creating something else to be"（41）「それぞれ何年も前から、自分が白人でも男でもなく、すべての自由と勝利は禁じられていると発見していた。そのため彼女たちは自分たちがなる他の何かを創り出そうとしていた」。この時からスーラは、自分が黒人女性であるという事実と、それに付随するしがらみを理解し、新しい生き方を探し始めているのである。

そしてさらにスーラに人生の転機となる出来事が起こる。ある日偶然にハナの“I love Sula. I just don’t like her”（57）「私はスーラを愛しているが、好きではない」という発言を聞き、“there was no other that you could count on…”（118-119）「当てに出来る他人は存在しない」と、後に誤ってチキン（Chicken）を死なせてしまったという出来事から“there was no self to count on either”（119）「当てになる自分も存在しない」と悟り、他人も自分も当てにすることが出来なくなってしまった。そのため、“She had no center, no speck around which to grow”（119）「彼女には中心がなく、成長するための核となる部分もなかった」と述べられている。そしてこういった経験を通して成長したスーラはエヴァに、一般的な女性の生き方である結婚して子どもを持ち、落ち着くように言われた際に“I don’t want to make somebody else. I want to make myself”（92）「私は他の誰かを作りたくはない。私自身を作りたい」と答える。幼い頃から黒人女性であることのしがらみを感じ、経験を通して学んだ孤独は、女性として一般的で幸せとされる生き方の否定と新しい生き方、そして自己形成へと繋がっていった。

また、スーラは新しい生き方や自己の探求の中で、性行為を道具として使っている。つまり、“She went to bed with men as frequently as she could. It was the only place where she could find what she was looking for: misery and the ability to feel deep sorrow”（122）「彼女は出来る限り頻繁に男と寝た。それは彼女が探し求めていた、深い哀しみを感じることの出来る唯一の場所であった」のである。そして、“…there was utmost irony and outrage in lying under someone, in a position of surrender, feeling her own abiding strength and limitless power”（123）「自分の永遠の強さと無限の力を感じながら、誰かの下に横たわり、降伏の体勢をとることには、最大の皮肉と憤怒があった」とあるように、スーラは性行為に哀しみや皮肉、憤怒など負の感情を求めていることがわかる。その性行為の後にある孤独の中で“…in which she met herself, welcomed herself, and joined herself in matchless harmony”（123）「彼女は彼女自身に会い、彼女自身を受け入れ、比べようが無いほど自分自身と調和する」と記述されている。スーラは、この性行為による苦しみから自己を見出しているのである。

そしてスーラはエイジャックス（Ajax）という男に出会い、大きく変化を遂げる。スーラはエイジャックスとの会話に喜びを感じた。エイジャックス

との会話について次のように述べられている—“…her real pleasure was the fact that he talked to her. They had genuine conversations. He did not speak down to her or at her, nor content himself with puerile questions about her life or monologues of his own activities”（127-128）「彼女の真の喜びは、彼が彼女と話しをしたことだった。彼らは本物の会話をした。彼は彼女を見下した話し方をしたり、揶揄したりするようなことも無く、彼女の生活についての幼稚な質問をしたり、自分の行動についての独り言で満足したりもしなかった」のである。エイジャックスはスーラを黒人女性としてではなく、一人の人間として、対等な立場として扱ったのである。さらにエイジャックスは性行為の中でも同様の態度を示し、“He liked for her to mount him”（129）「彼は彼女が上に乗ることを好んだ」。そして“She looked down, down from what seemed an awful height at the head of the man”（129-130）「彼女は恐ろしく高みであると思われるところから男の頭を見下ろした」と、感じている。今まで男性の下で降伏の体勢をとることで苦痛を味わってきたスーラは、エイジャックスとの行為の間では、女性が男性の上に乗り、高みから見下ろすという、従来のそれから逆転した自由で新しい関係を見つけることができた。このとき、新しい女性としての生き方を見出すことができたといえるだろう。しかし、スーラはここで今までスーラが感じることの無かった、持つ所有欲にとらわれてしまう。スーラは、以前退屈に感じた他の女性たちの一般的な生き方に自分を当てはめてしまう。身づくろいや家事をしてエイジャックスの帰りを待つ。スーラが求めていた男女の差を越えた対等なエイジャックスとの関係に、スーラは自ら「自由を禁じられた黒人女性」へなってしまうのである。そしてこのスーラの様子を見たエイジャックスはスーラの元を離れてしまう。

ここまでスーラの生き方を主に他者の視点から見てきたが、スーラは自身の人生についてどのように捉えているのか、人生の終焉のスーラの台詞から考察したい。病床に伏したスーラは死の間際にネルに対して“They ain’t worth more than me. And besides, I never loved no man because he was worth it. Worth doesn’t nothing to do with it”（143-144）「男に私以上の価値なんて無い。加えて、価値があるからといって男を愛したことも一度も無い。価値なんてそれとは何も関係ない」、関係があるのは、“My mind did. That’s all”（143）「私の心、それだけ」と述べる。そして、以下のように言う。

> After all the old women have lain with the teen-agers; when all young girls have slept with their old drunken uncles; after all the black men fuck all the white ones; when all the white women kiss all the black ones; when the guards have raped all the jailbirds and after all the whores make love to their grannies; after all the faggots get their mothers' trim; when Lindbergh sleeps with Bessie Smist and Norma Shearer makes it with Stepin Fretchit; after all the dogs have fucked all the cats and every weathervane on every barn flies off roof to mount hogs…then there'll be a little love left over for me. And I know just what it will feel like.（145-146）
> すべての老女が十代の少年と寝た後で、すべての若い少女が年取った自分の酔っ払いのおじさんと寝た後で、すべての黒人の男が白人の男と性交した後で、すべての白人の女が黒人の女にキスした後で、看守がすべての囚人を強姦した後で、すべての娼婦が自分のおばあちゃんと愛し合った後で、すべての同性愛の男が自分の母の晴れ着を着た後で、リンドバーグがベッシー・スミスと寝た後で、ノーマ・シアラがステピン・フェチトと愛し合った後で、すべての犬がすべての猫と交尾した後で、すべての納屋の上のすべての風見鶏が屋根から飛び降りて豚の上に乗った後で、、、それから私のためにほんの少し愛が残されるわ。そしてそれをどのように感じるか知っているわ。

この言葉には、現在は不自由で不平等な、スーラという新しい女性を受け入れられない世の中が時を経て変化し、すべてが自由になったとき、スーラの生き方も受け入れられる。スーラがこの世の中では受けることの出来なかった「愛」を受けることの出来る世界が必ず訪れるというスーラの願いと、この世の中では認められなかった、自分の生きてきた道が正しかったのだという想いが込められているのではないだろうか。

結論

ここまで、スーラのあざ、ボトムの人間から見たスーラ、そしてスーラ視点でのスーラ自身について論じてきた。スーラのあざは、見る人によってそ

のイメージを変え、スーラ自身がどのように見られていたのかを表していた。シャドラックを除くボトムの人々にとって、彼女は悪であり、あざは悪の印であった。同じく悪魔として扱われたシャドラックと同様にスーラは悪魔であり、スケープゴートたる役割を果たしていた。では、著者であるトニ・モリスンはスーラのあざをどのように捉え、どのような意味を込め、スーラをどのような女性として描きたかったのだろうか。最初にスーラのあざについて説明をされている地の文からわかるように、トニ・モリスンは、スーラのあざをハナやネルと同様に「薔薇」と表現している。『スーラ』では、物語が始まる前に、“*Nobody knew my rose of world but me…. I had too much glory like that in nobody's heart.* —The Rose Tattoo”「私以外に誰も、この世にある私の薔薇を知らなかった…私は、誰の胸にも無いようなあまりに多くの栄光を持っていた」というエピグラフが記されている。この一節は、テネシー・ウィリアムズ（Tennessee Williams）の戯曲集である *The theatre of Tennessee Williams Vol. 2* に収録されている戯曲 *The Rose Tattoo* において書かれている—“Nobody knew my rose of the world but me … I had too much glory. They don't want glory like *that* in nobody's heart.” （345）という一節からの引用である。この戯曲における薔薇は、セラフィナ（Serafina）の亡き夫ロザリオ（Rosario）の胸に彫られた真紅の薔薇の刺青を指している。このエピグラフに用いられた一節は、セラフィナがその薔薇の刺青に自分だけの栄光を映し出している箇所である。薔薇を栄光の印として読み取ることができる。そこで、このエピグラフにおける「薔薇の刺青」とスーラの目の上の「薔薇のあざ」はリンクしており、トニ・モリスンはセラフィナの台詞であるこの一節にスーラを反映しているのではないだろうかと考える。そのようにこの一節をスーラに当てはめて読み直してみると、セラフィナの身体に刻まれた薔薇の刺青は、スーラの身体に刻まれた薔薇のあざへと繋がる。そして、この一節における薔薇はセラフィナの栄光の印であり、スーラの栄光の印へと繋がるのではないだろうか。つまり、スーラは、ボトムの住民にも誰にも知られることの無い、スーラ自身のみが知っている栄光の薔薇を持っていたということを意味し、このエピグラフの薔薇は、スーラの目の上に存在する身体的特徴の薔薇とスーラだけが知っている身体の中にある栄光という二つの薔薇を示しているのである。トニ・モリスンもハナやネルと同様にスーラのあざに薔薇を見たが、その薔薇は彼女たちの持つ邪悪なイメージとは異なり、輝かしい意味を

持つ薔薇であり、トニ・モリスンはスーラに薔薇を印付けることで、スーラを栄光ある女性として描いたといえるのではないだろうか。新しい女性としての生き方を選び、他者からは理解されずに嫌われ続けたスーラに栄光を与え、スーラが死の間際に発した台詞と同様に、トニ・モリスンにとって、そして女性にとってスーラを希望として描いたように思われる。

参考文献

Morrison, Toni. *Sula*. New York: Vintage, 2004. Print.

Williams, Tennessee. *The Theatre of Tennessee Williams Vol. 2. The Rose Tattoo*. New York: New Directions, 1971-1992. Print.

新村出編『広辞苑』第六版、岩波書店、2008 年。

442 部隊におけるハワイ日系人のアイデンティティー

宮本　諒子

序論

日系アメリカ人の歴史の中で、一番の転機となったのは第二次世界大戦である。もともと存在した日系人への差別や偏見に加え、日米開戦によってアメリカ政府から敵性外国人とみなされた日系人の未来は閉ざされたかのように思えた。しかし、アメリカへの忠誠と愛国心を示した日系二世のみで構成された陸軍部隊の活躍によって戦後日系人の立場はかつてないほど好転したのである。この日系二世部隊の一つであり、アメリカ陸軍の歴史に残る活躍をしたのが第 442 連隊戦闘団（The 442nd Regimental Combat Team、以下 442 部隊）である。そして、442 部隊の構成人数の三分の二を占め、精神的にも部隊を牽引していたのが当時まだアメリカの準州であったハワイ生まれの日系二世であった。しかし、彼らの存在はいつでも認知されているわけではない。例えば、日系アメリカ人を扱った日本のメディアで最も記憶に新しい、橋田壽賀子脚本のドラマ『99 年の愛～Japanese Americans～』において、ハワイの日系アメリカ人の描写は皆無であった。本作品の山場のひとつである、442 部隊の活躍においても、本土（ハワイを除くアメリカ合衆国の大陸部）の日系人による「強制収容所からアメリカ軍隊への志願」というドラマチックな一面のみが強調されており、ハワイの日系人に関しては、キャンプにて本土兵に加わったという短いナレーションのみであった。そこで、本論文では 442 部隊結成に大きく貢献したハワイの日系人の活躍を明らかにするとともに、442 部隊内に発生したハワイ生まれと本土生まれの緊張関係に注目し、ハワイ生まれの日系人のアイデンティティーを考察する。

第 1 章 442 部隊結成までの道

日系アメリカ人の歴史は独立王国であったハワイ王国への移民からはじまる。1898 年にハワイ王国がアメリカ合衆国に併合されたことによって、当時ハワイに出稼ぎに来ていた日本人移民達の支配者はアメリカに代わった。つまり、日系人の歴史とはハワイ王国時代からハワイで生活していた日

本人移民と、アメリカ本土に渡った日本人移民の歴史なのである。

1.1 戦前までの日系アメリカ人社会

日本人が初めにハワイへ渡ったのは 1868 年であり、本格的な移民派遣が始まったのは 1885 年からである。1800 年代前半のハワイ王国は捕鯨に代わり砂糖きびプランテーションを新たな産業基盤にする動きがあったが、かつて欧米人が文明と共に持ち込んだ疫病によりネイティブハワイアン人口が減少したため深刻な労働力不足に陥っていた。一方 1800 年代の日本は不況や凶作により求職者が溢れていた。こうして、ハワイ王国と日本は互いの利害が一致し、1885 年に日本政府とハワイ政府間に官約移民制度が発足した。この官約移民制度は 1885 年から 1894 年まで 10 年間続き、2 万 9000 人もの日本人が日本での苦しい生活から抜け出すため海を渡ったのであった。しかし、ハワイでの生活に期待していた日本人を待ち受けていたのは過酷な労働であった。

「ハワイハワイと／夢見てきたが／流す涙はキビのなか／ハワイハワイと／きてみりゃ地獄／ボーシが閻魔で／ルナは鬼」（高木眞理子『日系アメリカ人の日本観－多文化共生社会のハワイから』167）これは、ホレホレ節と呼ばれる日本の契約労働者の間に自然に生まれた歌の一節である。絶え間なく照りつける太陽と、ルナ（Luna）と呼ばれる砂糖きびプランテーションの監視役に叱責されながら毎日九時間以上働いたという当時のプランテーション労働の厳しさを知ることができる。ハワイへ来た日本人移民たちは故郷の家族へ仕送りをしながら、やがては自分も帰国するつもりでいた。しかし厳しい労働環境の中で帰国に十分な資金を貯めることが困難であるとわかると、やがてハワイに定住を決意して日本人移民のコミュニティを発展させていくのであった。

帰国資金を早く稼ぐため、ハワイへ渡った者たちの中には賃金水準の高いアメリカへと転航する者もいた。アメリカへの日本人移民が最も盛んになったのはハワイ王国が 1898 年にアメリカに併合され、翌々年に準州となった後の 1900 年代前半である。ハワイにアメリカの諸法が適用され、契約移民達は半奴隷のような労働環境から開放されたことがアメリカへ転航の主な原因であり、1902 年 1 月から 1908 年 12 月にかけてアメリカ本土に移住した日本人はハワイからの転航者を含め 3 万 5278 人に達した。『アメリカに生

きた日本人移民—日系一世の光と影』の著者である村山裕三によると、初期の日本人移民は英語を全く話すことが出来なかったため、労働請負人が紹介する鉄道、製材所、農場などでの単純肉体労働に従事したと指摘する（57）。中には、季節労働者と呼ばれ、各地を転々とする労働者も目立った。そしてやはり帰国資金の工面が困難だとわかると、ハワイ同様目標を故郷へ錦を飾ることから定住へと切り替えるのであった。独身男性が中心だった日本人移民はハワイ、あるいはアメリカ本土に定住を決意すると、故郷から妻を呼び寄せたり、写真花嫁制度を利用したりして家庭を持った。そして、日本国籍とアメリカ国籍両方を持つ日系二世の子どもたちが増えるに伴い日本人コミュニティは発展し、寺院や日本語学校が開かれていった。当時、頼母子と呼ばれる共済組織を利用して独立し店を出す者もおり、やがて日系商店が並ぶ日本人町が形成していった。つまり日本人移民達は移民先に小さな日本社会を作っていったのである。

一見するとハワイとアメリカ本土の日本人移民は同じような歴史を辿っているように推測される。しかし、ハワイとアメリカ本土ではそれぞれに占める日系人人口（日本人移民の一世、アメリカ国籍を持つ二世）の割合が大きく異なった。ハワイは 1900 年の時点で日系人は数的に多数派として目立った存在であり、1940 年には約ハワイの総人口の 37.3 パーセントを占めるハワイ最大のエスニックグループであった。一方、1940 年のアメリカ本土における日本人の人口はハワイとほぼ同じで約 14 万人であったかが、アメリカ本土全体の 1%にも満たなかった。日系人人口が最も密集する西海岸であっても日系人人口は 2%以下であった。このハワイと本土の日系人人口の差は日系人に対する異なる差別意識を生んだ。民俗学者である日系三世のロナルド・タカキ（Ronald Takaki）は著書である『もうひとつのアメリカンドリーム—アジア系アメリカ人の挑戦—』(*Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans*)の中で「ハワイにおけるそこでの差別は人種的なものからというよりも階級的上下関係から発生したといっていい。それに対してカルフォルニアでのアジア人は少数派に属し、その差別も人種そのものに向けられた」（165）と指摘する。また、アメリカ本土の日本人移民は 1900 年代初期に急激な人口流入をしたため、かつてアメリカ人の仕事を奪ったとして排斥された中国人移民を彷彿させた。そして中国人と同じアジア系であることから、差別感情をそのまま引き継ぐこととなったのである。タカキは

ある日系二世の回想を紹介している。1910 年にハワイからカルフォルニアに転航してきた二世の伊藤一男（Kazuo Ito）は、頭を刈ってもらおうと床屋に入り、どこの国の人間かと聞かれたので日本人と答えたとたんに犬か猫のように店から追い出されたという経験をもち、「ハワイと違ってカルフォルニアではピリピリとした空気に包まれた」と語っている（165）。

ハワイと本土の日系人を取り巻く外的環境の違いはそれぞれの考え方や日系人としてのアイデンティティーに影響を与えた。そして、ハワイと本土の日系人がお互いの異なる価値観に気づき自らの民族性を知覚することに戦争が果たした役割は大きい。その一つの例がハワイ、アメリカ本土それぞれから志願した日系二世によって構成されたアメリカ陸軍部隊、第 442 連隊戦闘団である。442 部隊として共に生活することとなったハワイと本土の日系二世たちは自分自身と異なる文化や価値観を持つ日系人と共に生活することにより、ハワイ生まれの二世はハワイの日系人の特質を、アメリカ本土生まれの二世はアメリカ本土の日系人の特質を自覚するのであった。

1.2　442 部隊の結成背景

日系二世部隊として知られる 442 部隊は真珠湾攻撃によって日米が開戦した約 2 年後の 1943 年 1 月に結成された。開戦以来、敵国日本に起源を持つ日系アメリカ人たちは、同じ様に敵国に起源をもつイタリアや系ドイツ系アメリカ人へはない不当な扱いを受けた。442 部隊の日系二世兵士達は不利な状況を受け入れ、アメリカへの忠誠心を戦場での活躍によって証明した。彼らは死傷率 314％という甚大な犠牲と引き換えに、名誉勲章（Medal of Honor）をはじめアメリカ陸軍史上最も多くの勲章を授与された最強の部隊として後世に語り継がれる存在となった。終戦後、唯一大統領から直接出迎えられた 442 部隊は、トルーマン大統領から“you fought not only the enemy, but you fought prejudice—and you won”「君たちは敵と戦っただけでなく、偏見と戦いそして勝ったのだ。」（*Discover Nikkei*）と称えられた。彼らの活躍はアメリカにおける日系人の地位向上だけでなく、「アメリカ自身が病む人種差別解消への大きな一歩であったということは、その後のさまざまな人種差別的な法律の撤廃などで明らかである」（荒了寛『ハワイ日経米兵—私たちは何と戦ったのか？—』、以下『ハワイ日系米兵』346）。合衆国憲法がうたう、“the welfare of all the people all the time”「全市民への福祉を約束する」

国の実現に大きく貢献した 442 部隊にハワイの日系人が果たした役割はおそらく他の誰よりも大きいだろう。

1.2.1 ハワイ二世の国への協力

1941 年 12 月 7 日の日本軍による真珠湾攻撃後、日系人男子は徴兵不可外国人へと分類され徴兵資格を失った。ハワイ大学の予備将校訓連部隊（Reserve Officers' Training Corps, 以下 ROTC）に所属していた日系二世達はハワイの重要地点の警備を行っていたが、これも解散となった。『戦争と移民の社会史—ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』の著者である日系アメリカ人研究を行う島田法子によると、軍隊への入隊もハワイの警備も禁止されたハワイの日系二世達は、それらの差別措置に抗議するのではなくアメリカへの忠誠を示し愛国心を証明できる方法を模索したという（83）。ROTC に所属していた日系二世達はハワイの防衛司令部司令官であり、軍政知事である、デロス・C・エモンズ（Delos Carleton Emmons）将軍あてに、「どのような奉仕のためにもわれわれを提供します」という旨の嘆願書を 1 月 30 日に送った（83）。そして二世の嘆願が認められ、1942 年 2 月 25 日に労働奉仕を行うトリプルヴィー（Varsity Victory Volunteers、以下 VVV）が誕生した。169 名で結成された VVV は翌年の 1 月末までの約一年間、倉庫や有刺鉄線の建設、掲示板や棚を作り、岩の採掘などありとあらゆる仕事をやり遂げた。

1942 年 2 月 1 日、戦前にアメリカ軍隊に採用され正規兵として軍に従事していたハワイの日系人に対し陸軍省は退役を要求してきたが、エモンズ将軍はこれを拒否した。エモンズは彼の二年間のハワイ生活において日系二世達のアメリカに対する忠誠心を信頼していたのである。ROTC の二世が彼に請願書を送ったのが、陸軍省から要求を受ける直前であったことも幸運であっただろう。さらに、エモンズはハワイの日系人兵士のみで構成した部隊を編成させ、アメリカ本土への移動を陸軍省に勧告した。1942 年 6 月 5 日、行先も知らされていない 1432 名のハワイの日系人兵士達は誰にも見送られずハワイを発ち、アメリカ本土のウィスコンシン州のキャンプマッコイ（Camp McCoy）に到着した。彼らはそこで第 100 歩兵大隊（The 100th Infantry battalion 以下、100 大隊）として再編され半年間の基礎訓練を受けた（85）。100 大隊は知能、実技試験共にどこの部隊よりも優秀な成績をおさめたこと

で高く評価され、陸軍省は更に大規模な日系二世部隊結成を計画する。ハワイの日系二世が行動で示してきたアメリカへの忠誠心がようやく認められようとしていたのである。陸軍省は 1943 年 1 月、アメリカ本土の強制収容所で生活をする二世3000名とハワイで暮らす二世1500名の志願兵募集を決定した。

1.2.3　442 部隊への志願

ハワイでは真珠湾攻撃直後から積極的な軍事協力を行う日系人の姿が目立ったことから容易に想像できるように、日系人の志願兵募集が発表されると大いに盛り上がった。この時を待ち望んでいたとばかりに募集人数 1500 人を大幅に超える一万人近い二世が徴兵局に殺到したのである。当時のハワイで徴兵資格のある 17 歳から 35 歳までの日系人男子人口は約 25000 人であったことから、5 人に 2 人の二世男子が志願したこととなる。442 部隊における活躍により名誉勲章を授与されたダニエル・イノウエ（Daniel Inouye）は以下のように志願当時を振り返る。

> 大学の講堂に陸軍大佐が来て、二世に志願資格があると発表しました。その途端、学生は雄叫びを上げると、一団となって徴兵局へ走りだしました。私も全速力で駆けましたよ。局までの 5 キロを、数珠つなぎになって押し合いへし合いしながらね。（柳田由紀子『二世兵士 激戦の記録―日系アメリカ人の第二次大戦―』67）

ハワイ二世の予想外の反応によって陸軍省はハワイでの志願兵枠を拡大し、最終的に 2686 名を採用した。ハワイの各地では千人針への協力を求める女性の姿も目立ち、社会全体で二世兵士を応援する雰囲気ができ上がっていた。そしてハワイの志願兵達はオアフ島イオラニ宮殿で盛大な結成式を挙げ、アメリカ本土へ出発したのであった。

一方アメリカ本土ではハワイと志願兵募集時の様子が全く異なった。1 万人の日系二世が徴兵局に殺到したハワイとは対照的に、アメリカ本土における志願兵募集は募集人数3000名を下回る1182名の応募しか得られなかった。志願資格のある本土二世男子はハワイ二世とほぼ変わらない 23600 人であったが、このように志願者数に大きな差を生んだのは間違いなく強制収容所

が原因である。日米開戦後 1942 年 2 月 19 日、ルーズベルト大統領が大統領行政命令 9066 号に署名したことで、アメリカ本土の日系人の強制立ち退き・強制収容が決定した。そして、日系人が強制収容所の生活を強いられてから約一年が過ぎた 1943 年 2 月から 3 月にかけて「忠誠登録」と呼ばれる思想調査が 17 歳以上の男女全員に対して行われた。忠誠登録の目的は不安因子の把握、今後に再開される日系人徴兵のためのスクリーニング、そして 442 部隊への志願兵募集であった。忠誠登録は生年月日、職歴、外国能力などの 28 の質問から成ったが、問題は 27 番と 28 番の質問であった。

> Question #27
> Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty, wherever ordered?
> Question #28
> Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully defend the United States from any and all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of allegiance to the Japanese Emperor or any other foreign government, power, or organization?
> 問 27　あなたは命令されればどこであろうとすすんで、米陸軍兵士として戦闘任務につきますか？
> 問 28　あなたは、アメリカ合衆国に無条件で忠誠を誓い、外国または国内勢力のいかなる攻撃からもアメリカ合衆国を忠実に守り、日本の天皇や他の外国政府、勢力、組織への忠誠や服従を拒否しますか？

忠誠登録前に事前に発表されたこれらの質問は日系人を混乱させた。「鉄格子の内側に囲い込んでおいて、隠れキリシタンを試す踏絵のような質問がつけつけられた」（今田英一『コロラド日本人物語日系アメリカ人と戦争　六〇年後の真実』174）のである。また、忠誠登録は日系人同士の間に既に存在していた対立関係を一気に表面化させる結果を招いた。収容所内が日本の正義と日本の勝利を信じる忠日派とアメリカの勝利と民主主義の正義を信じる忠米派にはっきりと分断される中での志願は「一種後ろめたさの拭えない行為」（柳田 68）と感じた本土生まれは少なくないだろう。また、アメリ

カへの忠誠心があったとしても財産没収、強制収容所という現実が「もし自分が戦死したら、財産も土地も失った両親はどうなるのか」（柳田 68）という不安を生み、志願を躊躇させたのも事実である。大なり小なりの葛藤の末、志願を決意した本土二世の思いはハワイの二世同様、アメリカへの愛国心と忠誠心を示すことがアメリカ社会において認められる唯一の方法であると考えたためである。442 部隊の退役軍人であるケン・アクネ（Ken Akune）は収容所から志願した一人であり、志願した際のエピソードを以下のように回想している。

> 志願したと伝えると、「お前はオレたちよりも偉いわけじゃない。現にこうして収容されているじゃないか。そんなことをすれば、日本の家族はどう感じるんだ」と非難されました。でも私は言ったんです。「今ここにいるのは、これまで何もしてこなかったからだ。今がチャンスなんだ。ここで志願して自分たちを証明しないと日系人の将来はないし、それは僕たちのせいになる。生きて帰って来れないかもしれないが、それでも価値があるんだ」と。（Light house「日系部隊の活躍」2005）

現在ではアクネのように強制収容所からの志願は勇気のある行動であったと大多数から称えられるが、志願当時は忠日派の勢力も強くトラブルを避けるためにひっそりと強制収容所を後にしたと語る本土生まれの志願兵は多い。本土生まれの門出は郷土の誉と称えられ盛大に見送られたハワイ生まれとは正反対であった。

第 2 章 442 部隊内の緊張

2.1　「コトンク」と「ブダヘッド」

「アメリカへの愛国心と忠誠心を戦場で証明する」という共通の動機を持つハワイと本土の志願兵たちには 1943 年の 4 月中旬から 5 月中旬にかけてミシシッピ州のキャンプシェルビー（Camp Shelby）にて合流し、442 部隊が結成された。彼らはそこから約 1 年間の厳しい軍事訓練の日々を送ることとなる。442 部隊の訓練成績においては 100 大隊同様極めて優秀であったが、

部隊結成当初からハワイ生まれと本土生まれの間に生じた軋轢は「部隊の戦闘能力にもかかわる」ほど重大な問題として上官達も頭を抱えていたという（荒了寛『ハワイ日系米兵』57）。

ハワイで日系人全体を指すニックネームとして誕生したブダヘッド（Buddahead、仏の頭）を自称していたハワイ生まれは、同じ日系人である本土生まれをブダヘッドではなく頭が空っぽであるという意を込めてコトンク（Kotonk）と呼んだ。そしてコトンクという呼称が頭にきた本土生まれたちはハワイ生まれのブダヘッドを豚の頭、ピッグヘッドと呼んで対抗し、最終的には殴り合いの喧嘩に発展していくのであった。ブダヘッドとコトンクの軋轢は集団形成に必要な価値観や思考の統一が困難であるために生じたのだが、同じ先祖をもつ日系人同士だからこそ期待していた価値観や思考の共有ができないことが余計にお互いを苛立たせたとも推測できる。ここでは、参考にした文献のほとんどにおいてハワイ生まれと本土生まれの対立の主原因としてあげられる「言葉の違い」について考察する。

「言葉の違い」がハワイ生まれと本土生れに軋轢を生んだ要因は、「言葉の違い」が社会階級を表しているとお互いが理解していたためだと考えられる。ハワイでは、支配者階級である白人のみが正しいとされる標準英語を話し、日系人を含むその他の民俗はピジン（Pidgin）と呼ばれる共通の母語を持たない者同士の意思疎通のため多言語が混ざり合って発展を遂げた言語を話していた。第一次世界大戦後にアメリカナイゼーション（Americanization）が活発になって以来、教育現場を中心にピジンから標準英語への矯正が行われたが小さな日本ともいえる日本人居住区で生活するハワイ生まれが標準英語を習得することは不可能であった。それに対して白人人口の多い地域で生まれ育った本土の生まれにとっては標準英語を話すことは普通であると同時に、最低限の教養という認識があった。従って本土生まれがハワイ生まれを「無教養な奴」と見下したと推測できる。更にこの言葉による階級意識は 442 部隊において意識以上の意味を持つこととなる。軍隊においてコミュニケーションは生死に直結するほど重要であり、できるだけ迅速かつ正確なコミュニケーションが要求される。そのため白人将校達は部隊の全員が理解できる標準語を話す本土生まれを下士官級に登用したのだった。命令をする本土生まれと命令に従うハワイ生まれという上下の関係ができたことはハワイ生まれにとって屈辱であり、対立は益々激しくなっ

ていった。しかし、本土生まれの中には 442 部隊の多数派であるハワイ生まれに馴染む必要があると考える者もいた。

2.2　ハワイ生まれの文化

『ハワイ日系米兵』の中に登場するアーネスト・ウノ（Ernest Uno）はユタ州ソルトレークに生まれ、「育った地域には白人が多く…遊び友達にも同級生にも、日本人は一人もおらず、日本人というものがまったくわからなかった」(123)というハワイ生まれの二世には全く想像のつかない環境で生まれ育った。ある意味ハワイ生まれと最も遠い存在である彼は 442 部隊の多数派であるハワイ生まれに馴染もうとする姿勢が彼の手記から伺える。

> サバイバルということは、戦争で生き残るだけの意味ではなく、自分の行動や態度などすべてを変えて生きのびることも意味していた。…陸軍でやっていこうと思うのであれば、それまでの自分を変えなければいけない。キャンプ・シェルビーの私の最初の報告書の中で、私の話す英語はハワイの人たちとたいへん違うということを書いた。彼らの方言をとにかく覚えなければならないと感じたからだ。最初、自分の話し方を変えて彼らの言葉で話そうとしたところ、よほどおかしかったのだろう、みんなが笑っていた。しかしもっと重要なことは、話し方よりも彼らの文化に適応することだった。一歩離れたよそよそしい傲慢な態度で、白人のようによくしゃべると思われているコトンクが、ハワイ出身者の彼らに馴染むように努力してから、しだいにそう思うようになった。（荒 130）

ウノの経験から、ハワイ生まれは本土生まれを全面的に拒絶するのではなく、本土生まれが心を開く努力をすれば迎え入れる素地を有していたといえる。この手記の中で最も注目すべき箇所は、ハワイ生まれと本土生まれの軋轢の原因である「言葉の違い」は最重要課題ではないという指摘である。ウノは自らハワイ生まれ達に近づく努力をしたからこそ、言葉を形成した背景である文化の存在に気がつき、「言葉よりも文化の方が重要である」という考えに至ったのだろう。言葉は文化を表す一例に過ぎないのであるから、ハワイ生まれと本土生まれの対立はもっと本質的な違いから生まれているという

ことを、ウノの手記から読み取るとすれば、ウノが意味する「ハワイ生まれの文化」とは何かを明確にする必要がある。ウノは手記に「ハワイ出身の彼らには互いに同胞意識があり、私はその中に入っていけないものを感じた」（荒 131）とも記載していることから、ウノが意味するハワイ生まれの文化とは、時には疎外感さえも生み出すほどの「同胞意識の強さ」ではないかと考えられる。442 部隊に所属していた二世の証言からはこの「同胞意識の強さ」があらゆる側面で発揮されていることがわかる。リタ・ゴールドマン（Rita Goldman）が編著したマウイ島の日系人歴史を綴った *EVERY GRAIN OF RICE : Portraits of Maui's Japanese Community* 中でスグル・タカハシ（Suguru Takahashi）は喧嘩の場面におけるハワイ出身者と本土出身者の違いを語っている。

> “Any time you pick a fight with the Hawai‘i boys, it comes to a gang fight.” He said. “The mainland Japanese boys, they real American, you know. If you gonna fight them, it’s man-to-man, one-to-one, and then if they knock you down, they gonna punch you. If anybody picks a fight with a Hawai‘i boy, the rest of them jump in. It’s how we grew up.” (143) ハワイの男たちと喧嘩になる時はいつだってギャングファイトになった。本土の二世達は本当にアメリカ人だった。もしそいつらと喧嘩になったら、男同士の一騎打ちだ。倒されたらパンチをくらうさ。もしハワイの男と喧嘩になったら残りの仲間みんな飛びかかってくるさ。そうやって私達は育ったのだ。

この証言からは男同士の一対一の争いであるべき喧嘩にも割り込んでしまうほど、彼らの仲間への思い、すなわち同胞意識が強力であることがわかる。仲間のために戦うという意味では、442 部隊の強さにも関係しているだろう。しかし、人の喧嘩に割り込んでいくのは、ある意味、粗野で土着的な印象を受けるのも事実である。次に紹介するハワイ出身のジェシー・ヒラタ（Jessie Hirata）の体験は、ハワイ生まれの持つ土着性と、それと対照的な本土生まれの性質が象徴的に表れている。

> クリスマスには多くの者がプレゼントを受け取る…前線ではチョコ

> レートの詰め合わせなどを受け取るものはわずかである。しかし我々はそういうものをハワイ流に皆で分けあった。すると新入りのコトンクが近づいてきて、「一つ買取りたい」と言い出したりする。そういうとき、みんなは驚いた顔をして「これは売り物ではなくて、分かち合うものだ」と説明して、その男に一つ与えた。（荒 195）

「モノは買うもの」と考える本土生まれは都会的思考が強く、物質主義と通じるものがあり、対するハワイ生まれの「モノは分け合うもの」という考えはある田舎的、土着的思考が強く、同胞意識と密接に関係していることがいえる。このような思考の違いは 442 部隊で頻繁に見ることができた。小隊のリーダーを務めたイワオ・ヨコオジ（Iwao Yokooji）は以下のように記憶している。

> その日の訓練が終了すると、ほかの隊員がシャワーか食事をしている間、隊の何人かが PX に駆け込んで急いで買い物をする。本土の二世は自分の買い物しかしないが、ハワイの二世は、自分のものだけでなく隊全体のためにビールやつまみを必ず買ってきた。（荒 92）

他にもヨコオオジは毎朝の宿舎掃除の際、「本土の二世は、自分のベッドのまわりだけをほうきで掃除するが、ハワイの二世は、自分のまわりだけでなく宿舎全体を率先して掃除した」（荒 92）と手記に記述している。ハワイ生まれの文化が同胞意識から生まれる土着的、田舎的文化だとすれば、本土生まれに見られる合理的、排他的、物質的行動文化は、アメリカ社会への同化によって生まれたと考えられる。それらの思考は西欧から持ち込まれ、社会の工業的発展と共に広く社会に浸透していった。本土生まれの話す英語が標準英語であることも、彼らのアメリカ社会への同化がハワイ生まれよりも明らかに先行していることがわかる。次章では、ハワイと本土の日系人文化とアメリカ社会への同化の関係性を同化理論の枠組みに当てはめて考察する。

第 3 章　同化理論と日系人のアメリカナイゼーション

3.1 アメリカ本土の日系人におけるアメリカナイゼーション

『アメリカンライフにおける同化理論の諸相―人種･宗教および出身国の役割―』（*Assimilation in America Life : the role of race, religion, and national origins*）の著者である M・M・ゴードン（Gordon Milton M）は、アメリカの歴史的経験を通じて、「同化の哲学」もしくは「同化の目標体系」は「アングロ・コンフォーミティ」、「メルティングポッド」「文化的多元主義」と呼ばれる３つのイデオロギーを中心に展開していると指摘する（82）。しかし、当時の日系人達が求められた「アメリカナイズ」（Americanize）が意味する同化とは、メルティングポッドや文化的多元主義ではなく、アメリカ社会のコア集団である、アングロ・サクソン系集団への同化、「アングロ・コンフォーミティ」にほかならない。ゴードンによると、「アングロ・コンフォーミティ」とは、「英国の制度（独立戦争によって修正されたものだが）、英語､英国思考の文化パターンをアメリカにおける支配的かつ標準的なものとして維持することが望ましいという仮定を中心にすえて」（84）おり、アメリカの歴史的経験においてもっとも普及した同化のイデオロギーであった。アングロ・コンフォーミティによる同化は移民の母国の文化との決別を意味し、否定的な意味合いを持って使用されることが多いが、アメリカ社会のコア集団がアングロ・サクソンである限り、アングロ・コンフォーミティ的同化がアメリカで生きていくためには必要不可欠であった。

同化理論の創始者である、ロバート・パーク（Robert Park）は同化に影響を与える要因に、「移民の文化とコア文化の類似度」や、「マジョリティの偏見」､「ホスト集団の第一次的関係に包合されている程度」､「可視性、隔離性」（本多千恵「日系アメリカ人の適応に関する一考察 ―「成功物語」再考」、1991）等をあげているが､本土の日系人のアメリカナイズを進行させたのは、「マジョリティの偏見」が強力であったためと考えられる。本土の日系人は移民当初から白人たちから差別感情を抱かれる存在であった。それは、1900 年代前半における短期的かつ急激な日本人移民の流入が原因である。日本人は白人達に「仕事を取られるのではないか」という恐怖を与え、かつて白人が中国人移民に対して抱いた排斥感情を呼び覚ました。そして日本人はアジア人であるという理由で中国人労働者に向けられていた差別感情をそのま

ま引き継ぐこととなったのである。本土の日系人のアメリカナイズには多少拍車がかかっていたが、どの移民グループも経験するアメリカナイゼーションの過程を進んでいたことに間違いはないだろう。しかし、日米開戦と強制収容所によって彼らは完全にアメリカ社会から精神的、身体的に完全に隔離されたことによりアメリカナイズの機会は断ち切られたのである。先にも述べたが、少数派である移民グループがアメリカ本土で生きていくにはアメリカナイズは必須である。彼らが再びアメリカナイズするために残された唯一の手段、それがアメリカ軍への志願なのであった。困難な状況においてもアメリカナイズを諦めなかった本土の日系人たちは戦後更に、急速なアメリカナイズを遂げた。1952 年には日系一世の帰化が可能となり、日系社会全体の急速なアメリカナイゼーションと政治的、経済的成功は目覚ましく、1960 年代には「モデルマイノリティ」と形容され、賞賛される存在となったのだった。

3.2 ハワイの日系人におけるアメリカナイゼーション

ハワイにおいて、日系人のアメリカナイズが本土のように順調に進行せず、日本の価値観を保持できた要因としては、アメリカナイゼーションを進めるコア集団である白人（以下、ハワイで白人を意味するハオレ : Haole を使用）人口がハワイ総人口に四分の一であったことがあげられる。ハワイ生まれの二世はアメリカ公立学校に通い、アメリカナイズの機会を得たとしても生活の中心はハオレのいない日本人居住区であったため、標準英語が習得できないのと同じ様にアメリカナイズは進行しなかったのであった。ハオレたちの支配体制にもアメリカナイゼーションを妨げる要因があった。戦前のハワイ社会はハオレが政治経済を独占統治する少数寡頭支配体制にあり、自分たちの地位を保持したいと願うハオレは非白人のアメリカナイズを望んでも、「あまりにも民主主義化して『自由』『平等』を訴え…ハワイ社会に反旗をひるがえすようにはなってほしくなかった。」（高木『日系アメリカ人の日本観』76）というのが本音であった。あくまでも日系人はプランテーション労働者の地位にとどまらせることを理想としていたため、教育現場や就職の場面であらゆる差別措置がとられた。つまりハワイにおける日系人へのアメリカナイゼーションは限定的であったため、日系人はハオレとは異なるにアメリカ像、民主主義の理想持つこととなった。歴史家であるアイリーン・タム

ラ（Eileen Tamura）は、*Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity* において、1939 年にハワイの日系人向け新聞が取り上げた事件を論じ、ハオレと日系人のアメリカナイゼーションの認識の違いを考察した。事件の概要は、公立学校、日本語学校共に成績優秀であった二世女性であるタツエ・フジタ（Tatsue Fujita）が親日家を理由に反民主主義者とみなされ、所属していたハワイ大学から教員免許取得を拒否されたというものである。当時のハワイ大学教育学校の責任者であるディーン・ベンジャミン・ウィスト（Dean Benzamine Wist）はフジタへの調査の結果、“the girl was one-half devoted to American culture and institutions and one-half to Japanese culture and customs.” 「彼女は半分をアメリカ文化や制度に捧げ、半分は日本文化、慣習に捧げている」（45）ため教員には不適正な人物であるとし、教員免許取得を認めなかった。これに対しフジタは自分が日本への興味は否定しないが、最も大切であるのは自国、つまりアメリカの伝統文化や価値観であると主張した。彼女は自分の目標は、“to glean the best in both Oriental and Occidental cultures” 「東洋と西洋の良い部分を拾い集めることであった」(46) と明言している。以下の文章はフジタがウィストに宛てた抗議文の一部を抜粋したものである。

> “According to my understanding of democracy, every individual is entitled to his opinion”, she told Wist. “Undeniably if the opinions held by an individual are subversive to the welfare of democracy, they should be discouraged. But my so called pro-Japanese propensities are purely of a cultural nature and free from any political prejudice. There is a difference between nationalistic interest of a political nature,” … If a public school teacher must refrain from showing interest in foreign culture, that would indeed be undemocratic.” (46)
>
> 私の理解するところの民主主義とは、誰しもが個人の意見を持つ権利を与えられています。当然、民主主義の繁栄を妨げるような意見は否定されるべきですが、私の所謂親日的考えは純粋に文化的性質であり、政治的偏見とは全く関係がありません。ある国に対する興味と政治的思想は別物です。…もし、公立学校の教師が外国文化への興味関心を表すべきでないとされるならば、それこそが反民主主義ではないでし

ょうか。

この事件を分析しタムラは、アメリカナイゼーションには移民の母国アイデンティティーの消失が必須であると考えるハオレに対して“Nisei wanted to keep the best of their Japanese culture while acculturating into American society.”「二世達は日本的価値の良い部分を保持しつつ、アメリカ社会への同化を望んでいた。」（48-49）と指摘している。つまり、ハワイ生まれの二世はアメリカナイゼーションの圧力を受けながらもアングロ・コンフォーミティ的価値観のみの受容を否定し、自分の中に存在する日本的な部分を肯定的に捉えていたといえる。442 部隊の二世たちの行動を振り返ると、アメリカナイズが着実に進行した本土生まれが異質な他者へ関心が薄く個人主義的行動が目立ったが、それは本土生まれが受容してきた文化そのものが「英国の制度、英語、英国思考の文化パターンをアメリカにおける支配的かつ標準的なもの」（ゴードン 84）とする単一価値観であり、尚且つその単一文化のみを受容してきたからだと推測される。従って、単一価値観の受容に抵抗してきたハワイ生まれが自分以外の他者を自分のことのように思いやることも納得できる。「ハワイの日系兵は、アメリカで基礎訓練をやっていたときも、互いに助け合い、『自分だけでなくみんな一緒だ』という気持ちが強かったようだ」（荒 36）というヒデト・コウノ（Hideto Kouno）の証言が端的に表すように、ハワイ生まれの個よりも全体を優先する性質は「和を以て尊と為す」、つまり他者との協生や調和を重んじる日本の伝統的価値観とも一致する。本土生まれと対照的に、ハワイ生まれは単一価値観を否定し、日米両方の優れた文化を保持しようと努めていた。そして、そのうちの一つである日本文化そのものが価値観の多様性を前提とした協生や調和を尊重して成り立っていたため、ハワイの日系人のアメリカナイゼーションはハオレ達が本来意図した型にははまらずに進行していったのであった。

結論

同じ日系アメリカ人であっても異なる環境で育ち、異なるアメリカナイゼーションを経験した本土生まれとハワイ生まれが対立することは自然であった。この対立を終着させたのが「言葉の違い」ともうひとつ対立の主原因

としてあげられる「強制収容所体験」であった。442 部隊内の対立に頭を悩ませていた白人将校達は強制収容所を知らないハワイ生まれたちに収容所を見学させようと思いつき、本土生まれと度々トラブルを起こすハワイ生まれをアーカンソー州にあるローアーの強制収容所に連れて行った。ハワイ生まれたちは本土の日系人が有刺鉄線で囲まれた粗末なバラック小屋に住んでいること、収容所を監視する警備員の銃口が収容所内に向けられていることなど全てに衝撃を受けた。二世兵士達の証言をまとめたドロシー・マツオ（Dorothy Matsuo）の『若者たちの戦場』（Boyhood to War History and Anecdotes of the 442nd Regimental Combat Team）のなかで、ダニエル・イノウエはコトンク達がこのような環境から志願してきたことに驚きと尊敬の念を抱き、「おれならどうしただろう？志願しただろうか」（177）と何度も自問したという。ハワイ生まれたちはキャンプに戻ってから収容所で目にしたこと、本土生まれたちがどのような環境から志願してきたかを知ったハワイ生まれたちは本土生まれに尊敬の念を抱くようになった。そしてようやく本土生まれとハワイ生まれが「一つの組織」（178）となったのだった。そしてその「一つの組織」を牽引したのは、442 部隊の合言葉になった“Go For Broke”の精神、ハワイ生まれの文化なのであった。

ハワイ生まれの日系人達は本土の日系人が辿ったアメリカナイゼーションを辿らなかったが、それは決して非アメリカを意味するのではなく、むしろ期待以上の忠誠をアメリカに示した。ハワイ社会で育まれた同胞意識の強さは収容所から志願してきた複雑な心境を抱える本土生まれを支え、442 部隊という歴史に名を残した集団形成に大きく貢献したことは間違いない。ハワイ生まれが積極的に行ったアメリカへの協力にはもちろん故郷であるハワイが攻撃を受けた事に因るところがおおきいが、日米開戦によって更に絶望的となった日系人の未来を切り開くために行われたのであった。戦争によってアメリカ人の資質を試された日系人はアメリカのために多くの犠牲を払い愛国心を証明した。そして、アングロ・コンフォーミティ的単一価値観の受容に抵抗し、日本的価値観を大切にしながらもアメリカの民主主義を信じて戦ったハワイ生まれの姿は、戦後に体系化された文化多元主義とよばれる同化理論の先駆けであったともいえるだろう。

参考文献・資料

Goldman, Rita. *EVERY GRAIN OF RICE: Portraits of Maui's Japanese Community*. Walsworth Pub Co, 2002.

Tamura, Eileen. *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity*. University of Illinois Press, 1994.

荒了寛『ハワイ日系米兵—私たちは何と戦ったのか？—』平凡社、1995 年。

今田英一『コロラド日本人物語日系アメリカ人と戦争—六〇年後の真実—』星雲社、2005 年。

ゴードン・ミルトン・M『アメリカンライフにおける同化理論の諸相—人種・宗教および出身国の役割—』倉田和四生・山本剛郎訳編、晃洋書房、2000 年。[Gordon, Milton M. *Assimilation in American Life*. Oxford University Press, 1964]

島田法子『戦争と移民の社会史—ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争—』現代史料出版、2004 年。

高木眞理子『日系アメリカ人の日本観—多文化社会ハワイから—』淡交社、1992 年。

タカキ・ロナルド『もうひとつのアメリカンドリーム—アジア系アメリカ人の挑戦—』阿部紀子・石松久幸訳、岩波書店、1996 年。[Takaki, Ronald. *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans.* Boston: Little, Brown and Company,1989]

橋田壽賀子脚本『99 年の愛～Japanese Americans～』TBS、2010 年 11 月 3～7 日放送。

本多千恵「日系アメリカ人の適応に関する一考察 —「成功物語」再考—」、『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 31』、頁 10、1991 年。

マツオ・ドロシー『若者たちの戦場—アメリカ日系二世第 442 部隊の生と死—』　ほるぷ出版、1994 年。[Matsuo, Dorothy. *Boyhood to War History and Anecdotes of the 442nd Regimental Combat Team*. Mutual Pub Co, 1992]

村山裕三『アメリカに生きた日本人移民—日系一世の光と影』東洋経済新報社、 1989 年。

柳田由紀子『二世兵士 激戦の記録—日系アメリカ人の第二次大戦—』新潮

新書、 2012 年。

Discover Nikkei, “Go For Broke: Japanese American Soldiers Fighting on Two Fronts”, 2013.
http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2013/11/27/go-for-broke-1/

Light House,「日系部隊の活躍」2005 年。
http://www.us-lighthouse.com/specialla/e-587.html

エドガー・アラン・ポーの「黒猫」について
―天邪鬼の精神の表すもの―

森安　小織

序論

エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）の短編小説「黒猫」（“The Black Cat”）は「アッシャー家の崩壊」（“The Fall of the House of Usher”）と並んで、現代まで読み継がれている怪奇小説のうちの一つである。この小説で主人公は愛猫を「してはいけない」とわかっているからというだけの理由で殺してしまう。この精神をポーは“perverseness”「天邪鬼」の精神と呼び、短編小説のタイトルにするほど着目している（“The Imp of the Perverse”）。この一連の事件はその天邪鬼の精神によって幕を上げ、その結果として悲惨な結末を迎える。本論文ではこの主人公に罪を犯すようそそのかした天邪鬼という悪の精神について論じていきたい。まず第 1 章では主人公の心に巣食う悪の精神について、主人公の元々の性格も考慮しながら論じる。第 2 章では自己の優越性と悪の追及の関係について、第 3 章ではその狂気の中に理性の潜む可能性について論じることとする。

第 1 章　悪の精神

この物語は語り手の罪の告白で始まり、最後まで彼の独白だけによって事件の顛末が語られていく。よって読者は彼に語られる事実だけを頼りにこの小説を読み解いていかなければならない。しかし彼は冒頭で“I will not attempt to expound them”「私は事件について詳しく説明するつもりはない」（156）と言っており、これから説明される事件について、何か語られていないことがあるということを仄めかしている。また、“some intellect more calm, more logical, and far less excitable than my own, which will perceive, in the circumstances I detail with awe, nothing more than an ordinary succession of very natural causes and effects”「私よりも冷静で論理的で、なおかつ興奮を抑えられる知性のある人間ならば、私が畏怖の念を込めて詳述する状況にもごく自然な原因と結果の平凡な継続を見抜くことができるだろう」（157）という

挑戦じみた言葉から、彼の身の回りで起こった不可思議な現象の記録について、おそらく意図的に何らかの脚色が加えられているが、よく読み取っていけば彼の心の動きとその結果として起こった事実が浮かび上がってくると考えることができる。

ここで語り手は自身について “mad am I not” 「精神に異常をきたしておらず」(156)、 “very surely do I not dream” 「決して夢を見ているわけでもない」(156) と言っているのだが、事件については “phantasm” 「幻想」(156) といった言葉で説明している。夢を見ていないということは、彼は現実にいて現実の世界であの事件を起こしたということになるが、事件を幻想というのならばそれは現実とはまた違ったところで起こっていて、実際には経験していないということになる。このことから、この事件は一見すると彼の中で夢とも現実とも区別のつかない次元で起こったことだと考えられる。しかし彼は先述したとおりこの事件について全てを語ってはいない。そのため、あのような矛盾したことを言うことでこの話の怪奇性や不可思議さを引き立て、隠していることから目をそらさせようとしていると私は考える。また、狂っていない、夢も見ていない、と言った後に幻想という言葉を使うことによって彼が普通の精神状態ではないということを読者に印象付ける効果もある。つまり冒頭の自己弁明には読者をミスリードの方向に進めていく罠がちりばめられているのだ。

まずこの物語の主人公である語り手は自分の性格をこう述べている。 “From my infancy I was noted for the docility and humanity of my disposition” 「幼少のころから私はおとなしく慈悲心に満ち溢れた気質で知られていた」（157）自分で自分のことをおとなしく慈悲心に満ち溢れたとここまで自信を持って言うことができるだろうか。何らかの事件が起こった際に、犯人の知り合いが「彼は昔からおとなしくて優しい子で…」などと言っているのはよく見かけるが、残虐な殺人事件を起こした後に、その罪の記録において自分を肯定するようなことを書く者はいないだろう。この文章から語り手の自己愛の強さが伺える。この後に続く文章で、彼は人間と動物の関係について “There is something in the unselfish and self-sacrificing love of a brute, which goes directly to the heart of him who has had frequent occasion to test the paltry friendship and gossamer fidelity of mere Man”「動物の持つ寛大で自己犠牲的な愛情はこれまでたびたび人間のつまらない友情や軽薄な忠誠を経験してき

た人々の心に直接訴えかける何かがあるのだ」（157）と述べ、人間との友情に否定的な立場をとっている。この言葉の中には彼の強い偏執性を見て取ることができる。偏執性とは周りが自分を拒絶しているといった被害妄想をしたり、自己が特別な人間であるという誇大妄想をしたりと、対象に対して強い妄想を抱く性質である。

自己愛が強く、強い偏執性を持っているため、人間との対等な関係に満足できず、動物の忠誠心に溢れた振る舞いに心打たれたのだろう。口先だけで忠誠を誓い、自分の差し出した愛を拒むことができる人間よりも、言葉を使えず、愛を与えれば与えた分だけ忠誠を示す動物のほうを選んだのである。そうすれば心無い言葉に傷つくことも、怒りを覚えることもなくなる。彼は自分を守ろうとするあまり自分と自分以外の人間の間に壁を作ってしまっていたのである。そのような性格から、彼は子供のころから何匹ものペットを飼い、動物への愛情を深め、他人への不信感を育てながら生きてきた。

彼の飼ってきたたくさんの動物の中でも一番可愛がったのが題名にもなっている黒猫である。この小説を分析していくうえで、この動物がどのような役割をしているのかを考えることはとても重要だ。黒猫の名はプルートー（Pluto）といい、ローマ神話の冥界の王の名前として知られている。彼がプルートーについて説明している文にこのような部分がある。

> In speaking of her intelligence, my wife, who at heart was not a little tinctured with superstition, made frequent allusion to the ancient popular notion, which regarded all black cats as witches in disguise. Not that she was ever serious upon this point—and I mention the matter at all for no better reason than that it happens, just now, to be remembered.（158）
>
> 「かなり迷信深かった妻はその猫の賢さについて、黒猫はすべて魔女の変装であるといった古代の有名な考えをたびたび言及してきた。彼女は真剣にそう信じていたわけではない。そして私がこのことについて述べるのは、ちょうど今偶然覚えていたから、という理由である」

冒頭では詳細を述べないと言っていたのに猫についての妻の意見まで提示し、最後にこのことはあまり意味を持たない、といったようなことを書き加えている。私はこの妻のいう「猫は魔女の変装である」といった迷信を語

り手も信じており、それゆえにこの説明を加えたのだと考える。もちろん彼が言うように真剣にそう考えていたわけではないが、魔女という言葉のイメージや、黒猫＝不吉といった古くからの印象によって彼はその猫に対して不信感を抱いていたのである。その不信感は、迷信を聞いたときに彼の持つ偏執性によって生まれ、そこから彼の内部で黒猫という存在はどんどん恐ろしいものに変わっていった。

普通人間が妄想する際には何かの物象からくるイメージによってどんどん考えを膨らませていき、対象が移り変わり、最終的にはその原因となったものへの関心は薄れているものである。しかし語り手の妄想の形はそれとは異なる。一つの物象に対してあきずに瞑想し、それが彼の中で何度も繰り返されることでその物象への興味はさらに大きくなる。そしてそれにとらわれつづけ、ついにはその物象を脅威になし得てしまうのである。その性質のせいで、最初にほんの少し抱いてしまった不信感が彼の中で月日が経つにつれインクの染みのように広がっていき、そのイメージに憑りつかれ、後に残虐な行為を起こさせることにつながったのである。最後に一言付け加えたのは、そのような迷信を信じていて、ただの黒猫への異常な猜疑心を持っていることを肯定してしまうと自分が狂っていると認めてしまうことになるため、自分の思い込みを抑圧しようとしているためである。

大人しい性格だったはずの彼は、プルートーに出会ってから数年間のうちに酒乱という悪魔のせいで性格が悪化してしまう。 “what disease is like Alcohol!”「酒に敵う病気があろうか」（159）とは彼の悲痛の叫びである。彼は酒によって今まで隠されていた偏執性が表面化してしまい、妻やペットに暴力をふるうまでになってしまうのである。それでもまだプルートーにだけは手を出さないでいたのだが、ある日、例によって泥酔して帰宅した語り手は何となくプルートーが自分を避けているのではないか、と思い始める。その思い込みが彼の中で芽を出し、膨らんでいるちょうどその時に、運悪く黒猫は彼の手に噛みついてしまう。そして彼は怒り狂い、黒猫の片眼を抉り取ってしまうのだ。この文を書いているときの語り手の描写はこうである。“I blush, I burn, I shudder, while I pen the damnable atrocity”「私はこの忌々しい残虐な行為を執筆しながらも、顔は紅潮し、体は火照り、身震いを感じる」（160）。これは語り手が羞恥心からくる興奮に侵されていることを示している。忌々しい残虐な行為と言っておきながら、その光景を思い出して気持ち

が高ぶっているのである。このような恐ろしい場面を自ら思い出し執筆するところに彼の自分を痛めつけたいという欲求を持った側面が見て取れる。

片方の眼球を失った黒猫は、当然語り手のことを避け始める。すると彼の心には “perverseness”「天邪鬼」の精神が沸き起こってくる。それは “unfathomable longing of the soul to vex itself—to offer violence to its own nature—to do wrong for the wrong's sake only” 「魂が魂自身を苦しめ——自分自身の本質を痛めつけ——悪のためだけに悪を行うという理解しがたい切望」（161）である。してはならないとわかっているからこそ、良心を痛めつけながらも最悪な行為をしてしまう。その精神にそそのかされ、彼は愛していた黒猫を木に吊るし、殺してしまうのである。猫を吊るし終わった後には後悔の念に苛まれ、涙を流していた。涙を流しながらもあえてそのような残虐な行為を行う彼の姿に、自虐行為をどこか楽しんでいるという素振りが見て取れる。そしてその性癖こそが、彼を暴虐へと導いた「天邪鬼」なのである。彼はその精神について “perverseness is one of the primitive impulses of the human heart—one of the indivisible primary faculties, or sentiments, which give direction to the character of Man” 「天邪鬼の精神が人間の心の最も原始的な衝動のひとつであり—人間の心を左右する分割できない主要な能力、もしくは感情である」（161）と述べている。この性癖は人間が誰しも持ち合わせているようなものだと考えているのである。人間とは普通自分の幸福を求めて生きており、ほとんどの行動の動機は幸福でありたいという欲求のために起こるものである。ましてや語り手のように自己愛の強い人間ならばなおさらだろう。しかし天邪鬼の精神は幸福を求める衝動とは全く逆のもので、自分を痛めつけたいという自虐の精神である。この相反する二つの精神が語り手の心の中で葛藤を繰り広げていたのだ。

そしてついに彼はプルートーを殺害してしまう。彼はその犯行の動機を明らかに自分に陶酔しきった様子でこう言っている。

> ［I］hung it because I knew that it had loved me, and because I felt it had given me no reason of offence; — hung it because I knew that in so doing I was committing a sin — a deadly sin that would so jeopardize my immortal soul as to place it — if such a thing were possible — even beyond the reach of the infinite mercy of the Most Merciful and Most Terrible God.（162）

> 吊るしたのはその猫が私のことを愛していると知っていたから、そして私がそいつに攻撃する理由を与えなかったからだ。――吊るしたのは私が罪を犯しているのを知っていたから――そしてその罪は私の不朽の命を危うくする破壊的な罪であり――もしそんなことが可能ならば――最も慈悲深く、最も恐ろしい神の無限のご慈悲さえも届かないところに連れ去るような罪だった。

自分の犯した罪の懺悔にしてはとても大げさで芝居がかっている。「神の慈悲も届かぬような罪」という残虐非道なことを犯したにもかかわらず、自分の罪を人にひけらかすような口調である。ここで彼は、誰しもが恩恵を受けている慈悲深い神でも見放すような罪を犯した自分を人とは違う特別な存在だと思い込み、自分の恐ろしさに酔いしれているのだ。

「ポオとマゾヒズム――「黒猫」をめぐって――」の中で三上紀史はポオのマゾヒズムについてこう記している。

> 外界の刺激を受動的に受けるのではなくて、自分から刺激をつくりだそうという積極的な要求だった。それは自分が悲劇の中にいることを自覚することである。〔中略〕そして自分が特殊な人間であり、その特殊性のゆえに万人から優越していることを自分に証明していく努力を決意することである。それは自己愛の一つである。(42)

ポーのそういった性格がこの作品の語り手にも投影されていると仮定すると、語り手は自分のことを悲劇の主人公に自ら仕立て上げることで、自分が他人よりも優れた存在であるということを示そうとしていたのである。それ故に自ら愛猫を殺し、その一部始終を記すべくペンを走らせているのである。そのような性質があったからこそ、語り手は誰しもが持っているはずの天邪鬼の精神に普通の人間よりも強く悩まされたのである。

第 2 章　悪の追及と自己の優越性

ある物体に対して異常な興味を示し、その物体への強い思い込みにとらわれつづけるという偏執性のせいで黒猫プルートーが語り手の中で恐ろしい存在へと変貌していく。それでもその猫への愛情を思い出し何とか恐怖をこらえていたのだが、そこに天邪鬼の精神が湧き上がってきて、愛しているからこそ、してはいけないとわかっているからこそ猫を殺してしまう。ここからわかるように、天邪鬼の精神とは、言い換えれば悪への欲求なのである。これが彼の持つ悪の側面と、その結果である。そしてそれによって自分を絶望の淵においやり、自分は他人とは違う特殊な人間だと示すためにこの手記をしたためたのだ。ではなぜ語り手はそうまでして他人よりも自分のほうが優越していると思いたがっていたのだろうか。それには時代背景が深く関係している。

この作品が書かれた 19 世紀初頭、アメリカでは奴隷制反対運動が活発化していた。それは当時のアメリカで席巻していた民主主義の思想からなるものである。ポーはその民主主義を擁護する北部文学、そしてその根幹をなす超越主義を非難していた。

超越主義とは、個人の中には魂が宿っていて、その中には森羅万象が含まれており、しかも宇宙と自分をつなぐものであるゆえに、人間は本質的には全て単一である、という考え方である。つまり、全ての人の中には同一の理性があって、その理性に完全に支配されれば一人ひとりの判断というものは全て同じになる。よって、他の人とも全ての自然とも調和できるということである。

超越主義の創始者であるラルフ・ウォルド・エマソン（Ralph Waldo Emerson）は個人の魂の中には神がやどっているとし、あらゆる叡智、善、理性が内在していると説いた。そしてそこから個人の独立や自由を夢見たが、ポーは天邪鬼の精神について語ることによってそのようなものでは抑えられない悪の心があるということを示し、その楽観的な観念を皮肉った。人間は単一化された理性では説明できない闇の部分を持っているからして、全ての人間が理性にのみ従って生きていくことは不可能であると主張したのだ。そして、それと同様に安易に単一化を求める民主主義によって黒人差別を廃止させる考えに対しても、彼は批判的であった。

南部の色が濃い作家であったポーが黒人というものに偏見を持っていたということはさまざまな作品から読み取れるが、彼のその偏見とは恐怖に彩られたものであると考える。ここで、もう一度冒頭の部分を読み返していきたい。

第 1 章で “There is something in the unselfish and self-sacrificing love of a brute, which goes directly to the heart of him who has had frequent occasion to test the paltry friendship and gossamer fidelity of mere Man” 「動物の持つ寛大で自己犠牲的な愛情はこれまでたびたび人間のつまらない友情や軽薄な忠誠を経験してきた人々の心に直接訴えかける何かがあるのだ」（157）という記述から、彼が人間関係に対して否定的なのは偏執性のせいだと言及したが、その点においてもう少し詳しく考察する。

彼は人間との対等な関係よりも忠誠心の強い動物を好み、妻に選んだ人間も彼の暴力に耐え忍ぶ “uncomplaining” 「従順な」（170）女であった。ここから、彼は自分の周囲には自分に逆らわない辛抱強いものばかりおいていたことがわかる。プルートーが自分に見せた些細な反抗にさえ憤慨したあげく殺害してしまい、2 匹目の猫に至っては何をされたわけでもないにも関わらず、その存在に恐怖を呼び起こされてしまう。そのような彼の姿から、支配と被支配の関係にひどく臆病だったことが読み取れる。

二匹目の黒猫の体に絞首台の形が浮き上がってきたとき、彼はその猫のことを “a brute beast” 「猛獣」（169）、自分のことを “a man, fashioned in the image of the High God” 「全知全能の神のイメージで形作られた人間」（169）と言っている。猛獣とは獰猛で野蛮なけだもののことであり、人間のような理性などは持たない存在である。神にも近い自分が、そのような猛獣ごときにその支配関係をおびやかされることに憤慨し、恐怖しているのである。このことを当時の白人と黒人の関係と結び付けて考えることも可能ではないだろうか。

また、語り手がプルートーの眼をくりぬいたという事実についても考える必要がある。眼というものは言うまでもなく物体を見るものであるが、その眼を見る側からすれば、自分の姿が写し出されている鏡のようなものとなる。彼は、泥酔して “the fury of a demon” 「悪魔の憤怒」（159）にとりつかれた姿をその眼に写し出されることで、自分の獣性を目の当たりにしてしまった。彼のうちにひそむ狂気に触れてしまったのである。自分には理性があるから

こそ、それを持たない猛獣を支配できているというのに、その猛獣の眼に理性のない自分の姿を見出してしまった。そこから自分と猫の主従関係の危うさを感じ取ったのである。二匹目の猫についても、彼は “What added, no doubt, to my hatred of the beast, was the discovery, on the morning after I bought it home, that, like Pluto, it also had been deprived of one of its eyes” 「その野獣に対する憎悪が増大したのは、間違いなく、そいつを家に連れて帰った翌朝、そいつの片目がプルートーと同じように抉り取られていることに気付いたからである」(167)と延べ、眼への恐怖をあらわにしている。プルートーの眼は自分の悪を鏡のように写し出していたが、二匹目の猫のくりぬかれた眼窩には何が残っていたのであろうか。それは闇である。彼はなくなったはずの眼に、今度は自分自身の闇を見せつけられる。そしてまた罪の意識に苛まれ、自身の内の悪や野蛮性に悩まされるのである。

語り手は、人は誰しも理性では説明のできない悪の部分を持っていると主張している。自分の中にある猛獣と同じような野蛮な部分がいつか自分自身に打ち勝つかもしれないという不安から、自分が理性というものを持っているから有利であるという今の主従関係はいつ脅かされるかわからない、ということに恐怖を覚えるようになってしまう。そのため、自分の特殊性を示し、いつも自分が他人よりも優位にたっているということを感じていたかったのである。そしてそれは、白人が黒人を理性を持たない家畜と同じように扱っていた時代背景と結びつけることができる。ポーは南部の人間として奴隷制を正当化する一方で、自分よりも明らかに低い身分にある黒人に対して、いつかその支配／被支配の差が縮まり、転覆してしまうのではないかという恐怖に常に怯えていたのである。

第 3 章　狂気の中の理性

では、自分自身が野蛮な獣性に支配されてしまうとどうなるのであろうか。もちろんその愚かな存在の行き着く先は身の破滅しかありえないだろう。ここで留意しなければならないことは、獣性に支配されるということと、天邪鬼の精神から悪に走るということが全く別物だということである。

天邪鬼の精神とは、エマソンのいう単一化された理性によっては支配されない部分である。彼の論理に即して述べると、理性とは誰しもが持つもので

あり、その意味するところは全て同様である。従って、他の者を虐げるということは自分自身の理性をないがしろにするということになる。つまり、自分自身を痛めつけことになるとわかっていながら猫を虐げ、ついには殺人まで犯した語り手は合理的ではないということである。しかしこうは考えられないだろうか。語り手は狂気の沙汰としか思えないような残虐非道な行為を、自分自身の理性によって行っていた、ということである。

エマソンが主張する合理的な判断とは先ほどから言及している通り自分が自分であるためには暴力は振るってはならない、なぜなら、そうすることで自分自身の理性に反することになり、自分を虐げることになるから、というものである。一方ポーの属する南部の合理的な判断は、自分が自分自身であるためには暴力も必要である、というものであったと考える。黒人差別を擁護している一方で黒人の反乱を恐れているとすると、それに対してさらに理性的な判断に頼らずに暴力的に黒人を抑圧して自分の悪を正当化することによるしかないのである。ポーはそれを天邪鬼の精神と呼んでいる。天邪鬼は合理的ではない行為だが、それが自分の理性を否定することに繋がったとしても、南部の人間としてのアイデンティティを保つためにはそうすることが必要不可欠で、それは明らかに暴力を伴うことだが合理的である。これが私の考える暴力という狂気の中に潜む理性である。このことを念頭において、語り手の行動を分析していく。

語り手がプルートーを虐げ始めたのはプルートーが自分の手に噛み付いたとき、即ち些細ではあるが反逆の精神を見せたときである。そこで彼はプルートーの眼をくりぬいてしまう。これは第 2 章でも述べたとおり自分の悪の精神を目の当たりにしたことで、自分の地位が脅かされることに恐れをなしたせいである。これは彼の内なる獣性のなせる業であるとも考えられる。しかし、猫を殺したときはどうだっただろうか。眼をえぐったときには怒りに身を任せていたが、木に吊るしているときには涙を流し、後悔の念を感じながらその行為に及んでいる。このときの彼は獣性にとらわれているとは考えがたい。理性ではやってはいけないと理解しつつも、そうしないと自分を保てないという、暴力的な行為ではあるがその中にある南部的な合理性に従って動いているのである。

また、二匹目の黒猫の場合であるが、猫が自分になつき始めると、語り手はその猫に対して嫌悪感を抱き始める。忌み嫌うほどに執着してくる猫に

“absolute dread” 「絶対的な恐怖」を呼び起こされ、とうとう彼は怒り心頭に発してしまう。この恐怖も、支配関係が覆ることへの恐怖である。だんだんなついてくる黒猫を見て、自分と黒猫＝支配者と被支配者の間にあった差が埋まってきたと感じたのだ。そして猫を殺そうとしたが、それを妻に引き留められ、妻を殺してしまう。ここで、今まであまり語られることのなかった妻の存在について論じる必要が出てくる。

黒猫については理性を持たざるもの、語り手の獣性を写し出すものとして考えてきた。それに対して妻は、冒頭で “[I] was happy to find in my wife a disposition not uncongenial with my own” 「妻が私自身の気質と合うとわかって嬉しかった」（157-158）と説明されている。この頃の「私」の気質とは、動物好きで心優しいものである。また、語り手が妻や動物を罵ったり、暴力を振るったりするようになっても “uncomplaining” 「従順に／不平を言わずに」耐え忍び、最後まで黒猫をかばっている。そして語り手と妻の大きな違いは、語り手が二匹目の猫のくりぬかれた眼窩を見て嫌悪感を覚えるのに対し、妻のほうはえぐられているからこそ、その猫への愛しさが増しているということである。このことを語り手は、妻にはかつて自分も有していた “humanity of feeling” 「慈愛に満ちた心」（167）があるからだと述べている。これらのことから妻は語り手の理性を象徴していると捉えることができるだろう。ここでいう理性とはもちろん、世間一般でいう理性である。

理性の象徴である妻を殺してからの語り手は、黒猫を殺したときとはうって変わって非常に冷静である。彼は恐ろしい殺人を犯してすぐに妻の死体を壁に隠すことを思いつく。これは彼が自分の理性を埋め込み、抑圧するということである。そして理性を閉じ込めることにより、彼の狂気が姿を現してくる。それは全ての元凶であり、なおかつ獣性の象徴でもある黒猫を抑圧しようという考えである。それは暴力的な行為を伴うという意味では狂気ではあるが、彼にとっては合理的なことだった。彼は猫を殺そうとするのだが、猫はそんなときに限って姿をくらませている。しかしこのことは猫を嫌悪している語り手にとってこれは喜ばしいことであり、 “My happiness was supreme!” 「私の幸福感たるや、最上級であった」（173）とまで言っている。理性を抑圧したことで自分の欲求のままに生きられるようになり、獣性を写しだすものがいなくなったことで自分自身を脅かすものからも解放され、彼は “free-man” 「自由人」（173）となるのである。

事件から四日後、警察の一団が家宅捜索に入り込む。彼は “My heart beat calmly as that of one who slumbers in innocence”「心臓の鼓動も無邪気に眠っている人と同じように落ち着いていた」（174）と述べている通り、そのときも何も動揺することはなかった。その後警察がなんの証拠も得られずに帰っていくところを見て彼は歓喜の頂点に達する。そして酒に酔って理性を失ったときのように警察に向かって勝利宣言よろしくべらべらと内容のないことを語り始め、挙句の果てには自分が妻を隠した壁を杖で叩き始める。このことから彼の中でもう理性は失われて、天邪鬼の精神にとらわれていることが読み取れる。壁を杖で叩くという行為は自分の罪をひけらかし、特殊性を見せたいという欲求からきているものである。ここで彼は妻のことを “the wife of my bosom”「最愛の妻」（175）と言っているが、 “bosom” という語の元々の意味から私の胸の中にいる妻、と考えることは唐突であろうか。つまり妻を壁の中に押し込めたことが、理性を胸の中に押し込めたことの暗示であるということだ。

彼が壁を叩くとそこから何かの声が聞こえてくる。その声は “utterly anomalous and inhuman—a howl “「全く異質で非人間的な遠吠え」（175）とあるように、人間のものではない。正体は、その声に驚いた警察によって壁が壊され、初めてわかる。いなくなっていたはずの黒猫の鳴き声だったのである。彼は妻と一緒に黒猫までも埋め込んでしまっていたのだ。ここで猫は妻の死体の頭上にたたずんでいる。これは彼の中の理性と獣性の関係を具現化したものといえるだろう。彼は理性を壁の中に押し込み、その呪縛から解放されたはずだったのだが、理性はしぶとく語り手の前に舞い戻ってくる。しかし人間の理性とは脆弱なものであるため、今はもう天邪鬼の精神にとらわれて亡きものになっている。そして残るは獣性の象徴としての黒猫である。理性を表す妻の頭上で真っ赤な口を開け、勝利の咆哮のようにも聞こえる鳴き声をあげている。死んでしまって今はもう役目を果たさない理性とは対照的に、その眼球を光らせながら鎮座しているのである。ここでも猫の眼球は彼の心に潜む獣性を写し出しているととらえられるだろう。狂気の中の理性に従って他の者を抑圧してきたことで自分のアイデンティティを守ってきていたはずが、いなくなっていたはずの黒猫（獣性）が再びその存在を主張したことで自己の獣性に改めて気付かされる。そして理性が亡きものとなっている今、語り手はもはやなす術もなく獣性に征服されてしまうのである。

そこに待つのは身の破滅ただそれ一つであった。

結論

理性、獣性、そして天邪鬼の精神の葛藤に苦しめられた語り手はとうとう身の破滅に陥る。結局彼は自分の中の悪の精神を克服することはできなかったのである。そしてこのとき、超越主義の信じた「単一状態」は全く意味を成さないものとなっている。語り手の自己の中でさえ分裂しているのに、全てのものとの統一などはありえない。とどのつまり、ポーがこの小説を介して言わんとしたことはこの点に集約されるのではないか。

ポーは階級制度の残っていた南部の人間として奴隷制度を擁護していたと述べたが、ポー自身は一つの地域や組織には長く属さない人間であった。ボストンに生まれ、ロンドンの寄宿学校で学んだが五年ほどでリッチモンドに移り、そこから彼の基盤である南部の文化を取り入れる。しかしその時点でもう彼はイングランドで五年にわたって教育を受けた国際人であり、根っからの南部人になれたわけではなかった。その後も住まいを転々とするのだが、仕事についても同様で、陸軍に入隊してはすぐに辞めて陸軍士官の学校に入ったり、メッセンジャー誌の編集者になったかと思えば二年ほどで辞めたり、ある職については自らその職を捨てるという行動を繰り返していた。このことからポーのアイデンティティというものが不確実なものであったと推測する。アイデンティティとは自己統一性のことで、「これこそが本当の自分だ」という確固たる答えのことであるが、彼の本当の姿はどこにあったのであろうか。それは彼自身にもわかっていないと考える。それ故にこのような個人の分裂を描き、超越主義者の「自己統一性」への絶対的な信頼へ疑問を投げかけたのだろう。自己に没入することが精神の自由に繋がると信じたエマソンに対し、自己を手放しで信頼してしまうことによって起こりうる身の破滅を提示することで、楽観的な自己統一への批判を表したのだ。彼は自分のアイデンティティを保つために自分の合理性を信じて暴力を行使しているが、この小説の中でそれは自らを破滅へと導く行為につながることを暗示している。超越主義者が主張している理性によっては支配されない自身の部分が強大になっていき、その立場が危うくなると、自己の統一性はもはや保たれなくなってしまうのである。つまり、自己統一を求める中で、最

も異質なものは紛れもなく自分の中に存在しているということである。そのような姿を描くことによって、超越主義だけではなく当時のアメリカ民主主義の抱える矛盾までも言及したのである。

参考文献

Poe, Edgar Allan. “The Black Cat.” 1843. *The Black Cat and Other Stories.* Tokyo: Kodansha International, 2000. 155-77. Print.

三上紀史「ポオとマゾヒズム―『黒猫』をめぐって」『大東文化大学紀要　文学編』第 5 号、1967 年、39-60.

海外留学、英語運用能力が学習動機、学習方略に及ぼす影響

金子　優

第 1 章　はじめに

英語学習を行う上で学習の成功あるいは失敗を左右する要因は多くあるが、その中でも学習動機と学習方略は学習の成功と失敗を左右する大きな要因であると考えられる。また海外留学をすることは英語学習を行う上で大きな転機となりうるものである。本研究は海外留学経験の有無及び英語運用能力の高低によって動機づけとどのような違いが見られ、またそれらの間にはどのような関係があるのか明らかにするものである。

第 2 章　先行研究

2.1 動機づけの分類について

「動機づけ（motivation）とは、『行動の生起、維持、方向づけ過程』を意味する学術用語である」（安藤他　2013、p195）。

心理学的に見ると動機づけには外発的動機づけと内発的動機づけの二つがあり、それらはどちらも学習行動に限らず何か行動をする場合の動機づけである。『興味や関心に基づいて特定の科目を履修する場合のように、行動（この場合は学習）それ自体が目的となっている心理現象が内発的動機づけ』（安藤他 2013、 p195）であり、「卒業や進級するための手段として履修するといった場合のように、行動が何らかの目的の手段として位置づけられている心理現象は外発的動機づけと呼ばれている」（安藤他　2013、p195）。

また第二言語習得の見地から見ると動機づけには統合的動機づけと道具的動機づけの二つがあり、それらはどちらも目標言語を習得する際の動機づけである。統合的動機づけとは言語に興味がある、その言語が話されている国や地域の文化に興味が憧れから勉強をするなどの言語をはじめとする対象文化に接近あるいは同化したいから学習を行うといった動機づけである。そして外発的動機づけとは対象言語を習得することが仕事に役立ったりする、対象言語を習得

することで有用な資格が取得できるというようなある物事の習得が自分の目標の達成のために役に立つので学習を行うといった動機づけであるということを小池（1994）は述べている。

以上では学問領域による動機づけの分類方法の違いについて述べたが、この動機づけの区分は研究者が想定した区分方法で、研究者が想定していないすべての動機づけを捉えきれていないと言える。それに対応するために市川（1995）は動機づけの区分方法として二要因モデルと呼ばれる以下のようなモデルを提示している。

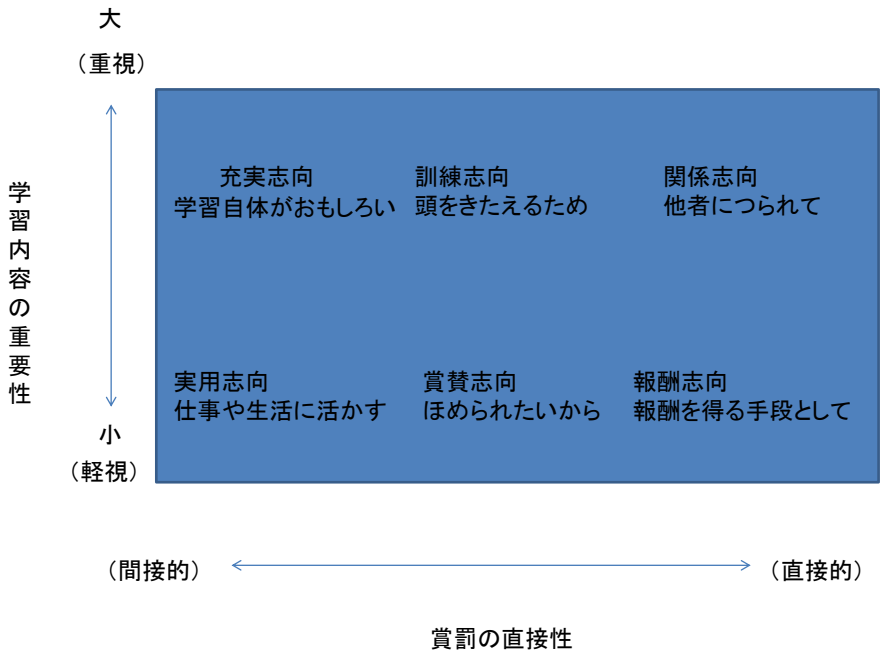


図 1　市川（1995）の二要因モデル（市川 1995: 21 に基づく）

このモデルは学習動機を知的好奇心や向上心のためから学習を行う「充実志向」、知力を鍛えるために学習をする「訓練志向」、仕事、生活に役立つ能力を得るために学習を行う「実用志向」、他の生徒や先生につられて学習をする「関係志向」、他者に褒められたいから学習を行う「賞賛志向」、成績に伴う報酬や学歴や出世を期待して学習を行う「報酬志向」の六つに分類し、さらにそれらを「賞罰の直接性」と「学習内容の重要性」という二つの観点と組み合わせたものである。

さらに堀野・市川（1997）は、学修内容を重視しているかどうかという観点から、充実、訓練、実用志向の三つを、内容を重視した「内容関与的動機」、賞賛、関係、報酬志向の三つを、学習内容を重視していない「内容分離動機」と名付け、新たな分類を行っている。

2.2 動機づけと学習方略、そして学習成績との関係について

堀野・市川（1997）は動機づけと語彙学習時における学習方略の関係について高校生を対象に調査を行い、内容関与的動機を持つ学習者は「語彙学習時の学習方略として一つの単語のいろいろな形を関連させて覚える」「同意語、反意語、類義語をピックアップしてまとめて覚える」といったように英単語を体制化して記憶する学習方略である体制化方略と「単語のスペルを頭の中に印刷の文字印刷ごと浮かぶようにイメージする」「単語をながめながらアルファベットの配列の雰囲気をつかむ」など語のイメージやニュアンスをつかむことで単語を記憶する学習方略であるイメージ化方略を用いて学習し、その結果としてテストで高い成績をおさめ、反対に内容分離的動機を持つ学習者は「手と頭が完璧に覚えるまで何度も書く」「英語から日本語、日本語から英語へと何度も書き換える」など繰り返しを重視する学習方略である反復方略をとりテストで高い成績をおさめることができなかったと報告している。そしてその関係性は以下のような図で表されている。

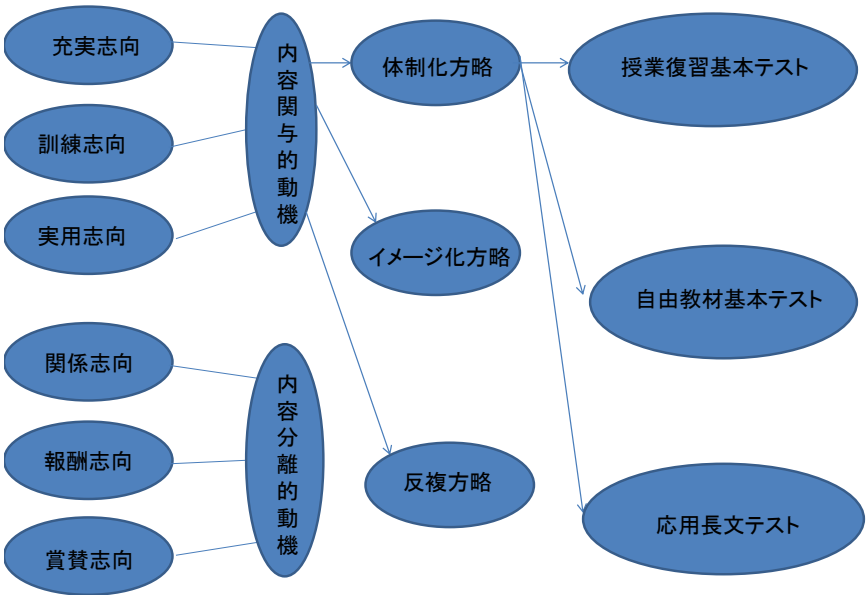


図 2　学習動機・学習方略・学習成績の因果モデル（堀野・市川 1997: 145 に基づく）

また動機づけと予習時、授業時における学習方略の関係について篠ヶ谷（2010）は内容関与的動機をもつ生徒は予習時の学習方略として分からない単語の意味を調べることなどを特徴とした学習方略である準備・下調べ方略、以前に習った教科書の内容を見返すなどを特徴とした学習方略である振り返り方略、意味のわからない単語をすぐに調べずに推測するなどを特徴とした学習方略である推測方略を使用しやすく、授業時の学習方略としては要点や疑問点を把握しながら授業を主体的に聞くことを特徴とした学習方略である要点・疑問把握方略をとりやすいことを明らかにしている。一方内容分離的動機を持つ生徒は予習時には分からないところを誰かに聞くなどを特徴とした学習方略である援助要請を授業時の学習方略として特に意味を考えず板書をそのまま写すなどを特徴とした学習方略である受動的方略を使用しやすいことを明らかにしている。

以上動機づけについて先行研究から分かっていることを上げてきたが、そこから二つの疑問が生まれてくる。一つめは動機づけの分類についてである。動機づけの分類については先に挙げてきたもの以外にも多くの分類が存在することからすべての動機づけを網羅した分類を作ることは難しいのではないかとい

うことである。また堀野・市川（1997）の動機づけの分類については学習内容に関連しているかそうでないかということによって動機づけを分類していること、またその動機づけの分類と学習方略及び学習成績との整合性がとれていることから、信頼できるものであると考えられるが、その分類は高校生にのみ適用できるもので、他の年代の学習者にも適用できるのかということについても疑問である。

二つめは日本人の動機づけに影響を与える要因についてである。日本のように日常的に英語が使われていない EFL（English as a Foreign Language）環境では、動機づけや英語運用能力に大きな影響を与えるのはやはり海外留学なのではないかということである。

このような疑問に対する答えとして以下では留学が及ぼす影響と堀野・市川（1997）の動機づけの分類の妥当性と海外留学が動機づけと英語運用能力に及ぼす影響についての先行研究を上げていく。

2.3 海外留学が動機づけおよび英語運用能力に及ぼす影響について

小林（1999）は平成 10 年にアメリカ（留学先はカリフォルニア大学バークレイ校、及びカリフォルニア大学サンディエゴ校、期間はそれぞれ 8 月 17 日から 9 月 11 日、8 月 3 日から 8 月 28 日）、カナダ（留学先はブリティッシュコロンビア大学、留学期間は 8 月 17 日から 9 月 4 日）、イギリス（留学先はロンドン大学、留学期間は 8 月 3 日から 8 月 21 日）の大学四校への英語研修プログラムに派遣された小樽商科大学商学部 2、3 年生 31 名の出国前と帰国後との英語力のデータと英語学習に対するモチベーションの変化を前者について ITPTOEFL の得点から、後者についてはポイントスケール式のアンケート法によって測定している。

その結果英語の運用力については、出国前に行った試験の全体の総合得点の平均である 459 点から帰国後の受験では 488 点と 29 点向上し、またセクション別の平均値の比較では、語彙・文法力の向上が最も大きく、続いてリスニングと長文読解力が向上した報告している。また英語学習に対するモチベーションについては、外国人に対する違和感が解消され、さらに将来滞在地での留学や居住を希望する者が多数を占め、統合的動機づけが高まったと報告している。

また中平（2007）はカナダでの短期留学プログラムに参加した 11 名を対象に L2 運用能力、L2 使用に対する自信、不安の変化を調べる調査を行い、その結果として、１）留学によって、第二言語使用について自信を持てるようになり、不安は減少した、２）コミュニケーションをとる相手が英語母語話者であろうと非英語母語話者であろうと対話をしようとする意思を持てるようになったと報告している。

2.4 堀野・市川（1997）の動機づけの分類の妥当性について

堀野・市川（1997）の動機づけの分類については、高校生を対象にした予備調査をもとにして作成したものであるので、その分類は高校生にのみ適用できるものである。したがって大学生などの他の年代の学習者にも適用できるのか疑問であったが、平山・平山（2001）では、堀野・市川（1997）で分類された動機づけを調べる調査と同じ調査を教育系の心理学の授業の受講者の大学生に対して行っている。そしてその結果として大学生に対しても堀野・市川（1997）の動機づけの分類は適用できることを明らかにしている。

2.5 考察及び先行研究で明らかにされていないこと

以上挙げてきた先行研究で三つのことが明らかになった。一つめは動機づけの分類についてである。動機づけには心理学的な分類や教育学的な分類など多くの分類があるものの、未だにすべての学習者の持つ動機づけを網羅した分類はないようである。二つめは留学が動機づけと英語運用能力にどのような影響を及ぼすのかという留学の即時的な効果である。三つめは動機づけ、学習方略、学習成績との関係についてである。その関係とは先にも述べたように、学習内容に関係した動機づけを持つ学習者は効率の良い学習方略を選択し、その結果高い成績を納めるということである。

しかし、先行研究では海外留学経験の有無、英語運用能力の高低という二つの条件の差によって動機づけと学習方略にどのような傾向が見られ、またその間にはどのような関係があるのかということが明らかにされていないと考えられる。

第 3 章　実験

3.1 実験の目的

本実験では留学経験ありの上級者、留学経験無しの上級者、留学経験無しの初級者の三群において動機づけと学習方略にはどのような傾向が見られ、またそれらの間にはどのような関係が見られるのか明らかにすることを目的としている。

3.2 被験者

被験者は一ヶ月以上の留学を経験した大学生 13 名と留学経験者と同程度の英語運用能力（TOEIC スコア換算で 640 点以上）を有する留学未経験の大学生 10 名及び留学未経験で低い英語運用能力（TOEIC スコア換算で 640 点未満）の大学生 13 名とする。

3.3 実験方法

実験方法について述べていく前に本実験での動機づけの分類方法を述べる。本実験の目的は留学経験ありの上級者、留学経験無しの上級者、留学経験無しの初級者の三群において動機づけと学習方略にはどのような傾向が見られ、また各群においてそれらの間にはどのような関係が見られるのか明らかにすることであるため、学習動機、学習方略の二つの関係が把握しやすい堀野・市川（1997）の分類を採用する。

実験には市川（2001）、堀野・市川（1997）、そして篠ヶ谷（2010）の予備調査の際に得られたデータを因子分析して得られた尺度項目を借用し、被験者に動機づけ、単語学習時の学習方略、予習時の学習方略、英語授業時の学習方略に関する質問項目について 1（全くあてはまらない）、2（あまりあてはまらない）、3（どちらともいえない）、4（まあまああてはまる）、5（非常にあてはまる）の 5 段階で評価を行ってもらう。それらの他にも年齢や性別、英語運用能力を示す TOEIC や TOEFL のスコアなどについても自由記述をしてもらう。

3.4 仮説

留学経験者における動機づけ、学習方略の間の関連については小林（1999）、中平（2007）が留学を経験すると即時的に動機づけの面においては統合的動機づけが高まる、英語を使用することに対して自信がつき、不安がなくなると報告している。

さらに堀野・市川（1997）、篠ヶ谷（2010）から内容関与的動機を持つ学習者は学習方略を選択する際に体制化方略などの効率の良い方略を選択しやすく、その結果学習成績つまり英語運用能力が向上することが分かっている。また反対に内容分離的動機を持つ学習者は学習方略を選択する際に単語学習、予習時、授業時のどの学習場面においても反復方略などの効率の悪い方略を選択しやすくなり、その結果学習成績つまり英語運用能力が向上しづらいということもわかっている。これは逆に考えると英語運用能力の高い者ほど動機づけにおいて内容関与的動機を持つ傾向が強くなり、その結果として効率の良い学習方略を選択し、反対に英語運用能力の低い者ほど動機づけにおいて内容分離的動機を持つ傾向が強くなり、その結果として効率の悪い学習方略を選択するということである。

また英語が生活に役立つものでもどうしても必要なものでもない高校生とは違い、就職の際に英語運用能力が高いほうが優遇されるなどの理由から、被験者である大学生にとって英語は生活に役立つものであることが推測される。

これらの先行研究と推測から以下では留学経験有りの上級者、留学経験無しの上級者、留学経験無しの初級者のそれぞれについて仮説を立てていく。
はじめに留学経験有りの上級者について仮説を述べていく。留学経験有りの上級者については以下の三つの仮説が立てられる。

1.　留学経験有りの上級者は他の集団に比べて充実志向、訓練志向、実用志向の傾向が強くなり、そのうち留学経験有りの上級者は留学経験により留学経験無しの上級者に比べ留学によって実用志向が高くなる。また 単語学習方略においては他の集団に比べて体制化方略、イメージ化方略を選択する傾向が強くなり、予習時の学習方略においては他の集団に比べて準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略を選択する傾向が強くなり、さらに授業時の学習方略においては

他の集団に比べてメモ方略、要点・疑問把握方略を選択する傾向が強くなる。

2.　留学経験有りの上級者では動機づけの充実志向、実用志向、訓練志向と単語学習方略の体制化方略、イメージ化方略、予習時の学習方略の準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略、授業時の学習方略のメモ方略、要点・疑問把握方略にはそれぞれ相関がある

3.　仮説 2 より留学経験有りの上級者を学習に駆り立てているのは動機づけの充実志向、実用志向、訓練志向である

次に留学経験無しの上級者について仮説を述べていく。留学経験無しの初級者について以下の三つの仮説が立てられる。

4.　留学経験無しの上級者は動機づけにおいて留学経験有りの上級者同様に充実志向、訓練志向、実用志向の傾向が強くなる。また単語学習方略においても留学経験有りの上級者同様に体制化方略、イメージ化方略を選択する傾向が強くなり、予習時の学習方略においても留学経験有りの上級者同様に準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略を選択する傾向が強くなり、さらに授業時の学習方略においても留学経験有りの上級者同様にメモ方略、要点・疑問把握方略を選択する傾向が強くなる。

5.　留学経験無しの上級者では動機づけの充実志向、実用志向、訓練志向と単語学習方略の体制化方略、イメージ化方略、予習時の学習方略の準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略、授業時の学習方略のメモ方略、要点・疑問把握方略にはそれぞれ相関がある

6.　仮説 5 より留学経験無しの上級者を学習に駆り立てているのは動機づけの充実志向、実用志向、訓練志向である

最後に留学経験無しの初級者について仮説を述べていく。留学経験無しの初級

者について以下の三つの仮説が立てられる。

7.　動機づけにおいて留学経験無しの初級者は他の集団に比べて関係志向、自尊志向、報酬志向といった内容分離的動機づけを持つ傾向が強くなるが、大学生という立場のため就職など将来のために英語の必要性が増すため、内容関与的動機づけのうち実用志向の傾向だけは強くなる。また単語学習方略において他の集団に比べて反復方略を選択する傾向が強くなり、予習時の学習方略においては他の集団に比べて援助要請を選択する傾向が強くなり、さらに授業時の学習方略において留学経験無しの初級者は他の集団に比べて受動的方略を選択する傾向が強くなる。

8.　留学経験無しの初級者では動機づけの関係志向、自尊志向、報酬志向と単語学習方略の反復方略、予習時の学習方略の援助要請、授業時の学習方略の受動的方略にはそれぞれ相関がある

9.　仮説 8 より留学経験無しの初級者を効率の悪い学習に駆り立てている動機づけは関係志向、自尊志向、報酬志向である

3.5 結果と分析

3.5.1 動機づけにおける各集団の傾向について

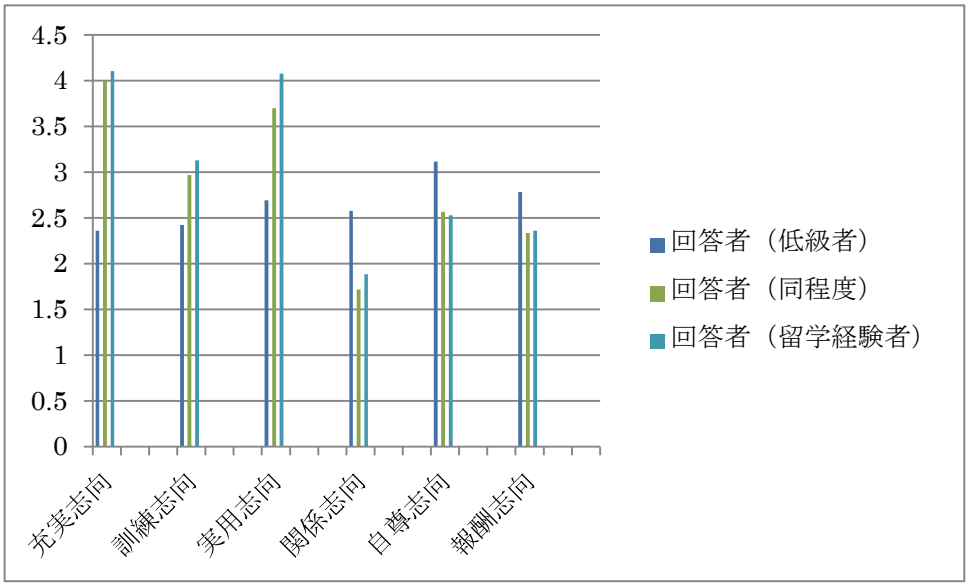


図 3　各集団別の学習動機の傾向

上の表は各集団における学習動機についての質問に対する回答を項目別にまとめ平均化したものであるが、それを見ると留学経験無しの初級者は他の集団よりも充実志向、訓練志向、実用志向といった内容関与的動機づけを持つ傾向が弱く、逆に関係志向、自尊志向、報酬志向といった内容分離的動機づけを持つ傾向が強いことが分かる。また内容関与的動機の中でも実用志向の傾向が若干高いことも分かる。以上より留学経験無しの初級者については仮説通りの結果が得られたと言える。

留学経験無しの上級者は留学経験無しの初級者に比べて、充実志向、訓練志向、実用志向といった内容関与的動機づけを持つ傾向が強く、逆に関係志向、自尊志向、報酬志向といった内容分離的動機づけを持つ傾向が弱いことが分かる。また留学経験有りの上級者に比べて、若干ではあるが、実用思考が弱い傾向にあることが分かる。以上のことから留学経験無しの上級者についても仮説通りの結果が得られたと言える。

留学経験有りの上級者は留学経験無しの低級及び上級者に比べて、充実志向、訓練志向、実用志向といった内容関与的動機づけを持つ傾向が最も強く、逆に関係志向、自尊志向、報酬志向といった内容分離的動機づけを持つ傾向が弱いことが分かる。これらのことから留学経験有りの上級者についても仮説通りの結果が得られたと言える。

また内容関与的動機の傾向が弱い留学経験無しの初級者においても実用志向だけは平均以上であることからどの集団においても実用志向が強い傾向にあることが言える。この点については 4 章で考察する。

3.5.2 単語学習方略における各集団の傾向について

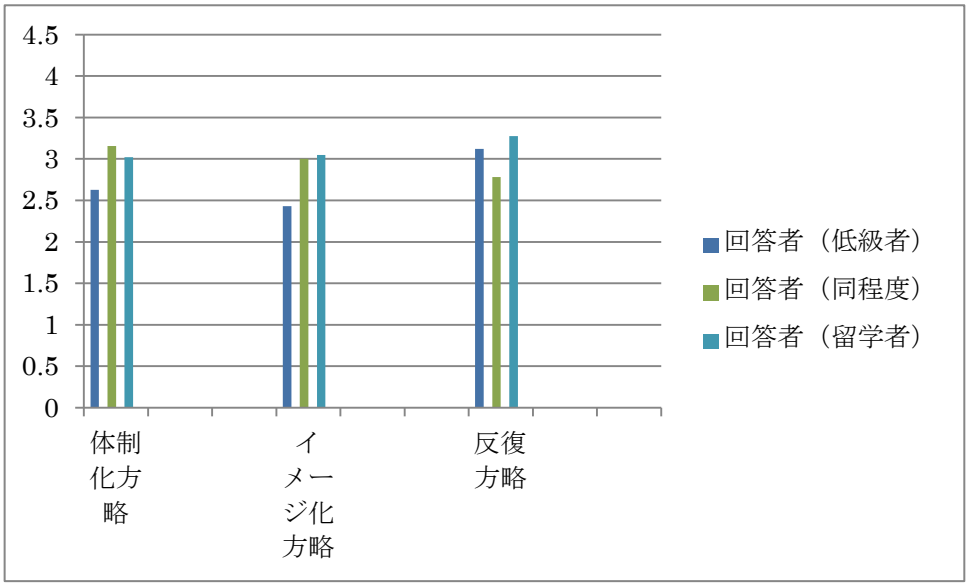


図 4　各集団別の単語学習方略の傾向

上の表は各集団における単語学習方略についての質問に対する回答を項目別にまとめ平均化したものであるが、それを見ると留学経験無しの初級者は他の集団よりも体制化方略、イメージ化方略の二つの方略を選択する傾向が弱く、反復方略を選択する傾向が強いことが分かる。以上より留学経験無しの初級者については仮説通りの結果が得られたと言える。

留学経験無しの上級者は留学経験無しの初級者に比べて、体制化方略、イメージ化方略の二つの方略を選択する傾向が強く、反復方略を選択する傾向が最も弱いことが分かる。以上のことから留学経験無しの上級者についても仮説通りの結果が得られたと言える。

留学経験有りの上級者は留学経験無しの低級及び上級者に比べて、すべての方略を選択する傾向がある。この結果は留学経験有りの上級者についての仮説に反するものである。この点については 4 章で考察する。

3.5.3 予習時の学習方略における各集団の傾向について

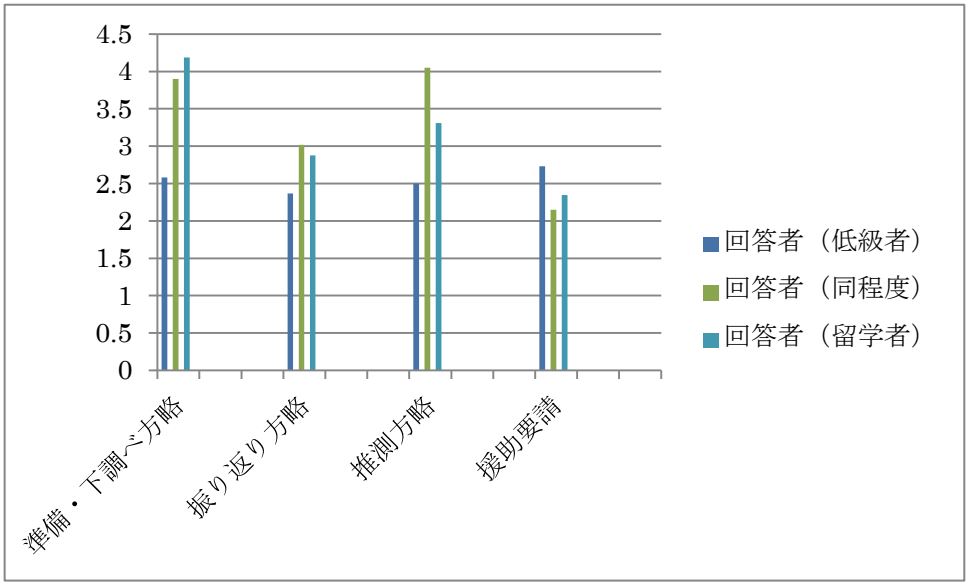


図 5　各集団別の予習時の学習方略の傾向

上の表は各集団における予習時の学習方略についての質問に対する回答を項目別にまとめ平均化したものであるが、それを見ると留学経験無しの初級者は他の集団よりも準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略を選択する傾向が弱く、援助要請を選択する傾向が最も強いことも分かる。以上より留学経験無しの初級者について仮説通りの結果が得られたと言える。

留学経験無しの上級者は留学経験無しの初級者に比べて、準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略を選択する傾向が強く、援助要請を選択する傾向が最も弱いことが分かる。また他の集団に比べて、推測方略を選択する傾向が最も強いことが特徴として挙げられる。以上より留学経験無しの上級者についても仮説通りの結果が得られたと言える。

留学経験有りの上級者は留学経験無しの初級者に比べて、留学経験無しの上級者と同様に準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略を選択する傾向が強く、援助要請を選択する傾向が弱いことが分かる。

また他の集団に比べて、準備・下調べ方略を選択する傾向が最も強いことが特徴として挙げられる。以上のことから留学経験有りの上級者についても仮説通りの結果が得られたと言える。

3.5.4. 授業時の学習方略における各集団の傾向について

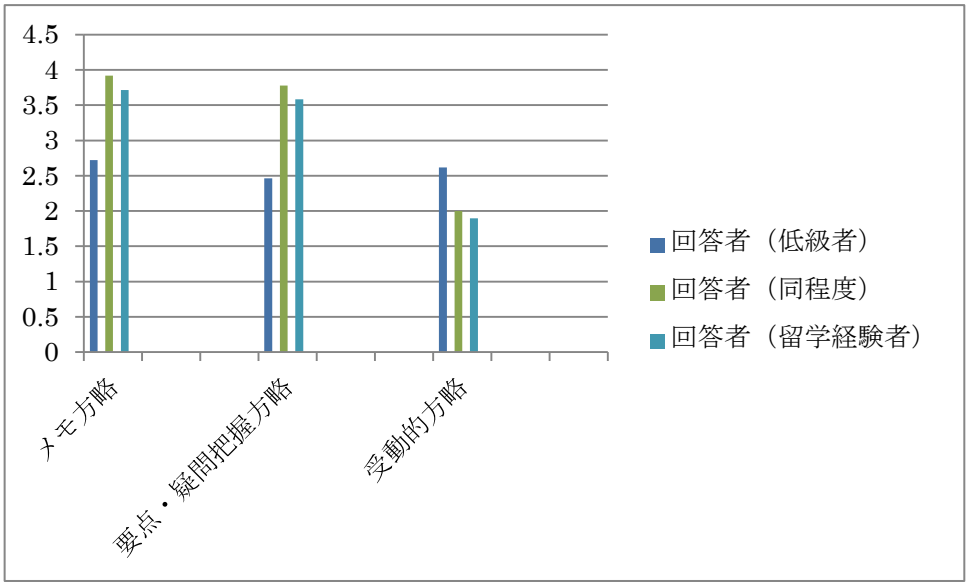


図 6　各集団別の授業時の学習方略の傾向

上の表は各集団における授業時の学習方略についての質問に対する回答を項目別にまとめ平均化したものであるが、それを見ると留学経験無しの初級者は他の集団よりもメモ方略、要点・疑問把握方略を選択する傾向が弱く、受動的方略を選択する傾向が最も強いことが特徴として挙げられる。以上のことから留学経験無しの初級者についても仮説通りの結果が得られたと言える。

留学経験無しの上級者は他の集団に比べて、メモ方略、要点・疑問把握方略を選択する傾向が強く、受動的方略を選択する傾向が弱いことが特徴として挙げられる。以上より留学経験無しの上級者についても仮説通りの結果が得られたと言える。

留学経験有りの上級者は留学経験無しの低級及び上級者に比べて、留学経験無しの上級者同様にメモ方略、要点・疑問把握方略を選択する傾向が強く、受動的方略を選択する傾向が最も弱いことが特徴として挙げられる。以上より留学経験無しの上級者についても仮説通りの結果が得られたと言える。

3.5.5. 留学経験無しの初級者における動機づけと各学習方略との相関

		動機づけ		
		関係志向	自尊志向	報酬志向
学習方略	反復方略	0.134140827	0.218405085	-0.070024821
	援助要請	0.378807503	0.013988722	0.398036518
	受動方略	-0.053555339	-0.493031796	0.315940146

表 1　留学経験無しの初級者における動機づけと学習方略との間の相関

上の表は留学経験無しの初級者について内容分離的動機づけと学習方略の間の相関係数を算出したものである。それによると動機づけの関係志向、自尊志向、報酬志向と単語学習方略の反復方略については自尊志向と反復方略の間に弱い正の相関があることが分かる。

また関係志向、自尊志向、報酬志向と予習時学習方略の援助要請については関係志向及び報酬志向と援助要請の間に弱い正の相関があることが分かる。

さらに関係志向、自尊志向、報酬志向と授業時学習方略の受動方略については自尊志向と受動的方略の間に比較的強い負の相関があり、報酬志向と受動的方略の間に弱い正の相関があることが分かる。自尊志向と受動方略の間には比較的強い負の相関があることについては、4 章で考察を行う。

以上のことから仮説は概ね正しいと言える。

3.5.6. 留学経験無しの上級者における動機づけと各学習方略との相関

		動機づけ		
		実用志向	充実志向	訓練志向
単語学習方略	体制化方略	0.533192024	-0.152849601	0.238350146
	イメージ化方略	0.737638636	0.519013819	0.732938863
予習時学習方略	振り返り方略	0.769762474	-0.114626682	0.760048389
	推測方略	0.080166878	0.340030257	0.189858463
	準備･下調べ方略	0.420062935	-0.256138368	0.362150632
授業時学習方略	要点･疑問把握方略	0.61262639	0.316599896	0.736228284
	メモ方略	0.593171382	0.215038846	0.538361483

表 2　留学経験無しの上級者における動機づけと学習方略との間の相関

表 2 は留学経験無しの上級者について内容関与的動機づけと学習方略の間の相関係数を算出したものである。それを見ると学習動機の実用志向、充実志向、訓練志向と単語学習方略の体制化方略については実用志向と体制化方略との間に比較的強い正の相関が、訓練志向と体制化方略との間に弱い正の相関があることが分かる。また実用志向、充実志向、訓練志向と単語学習方略のイメージ化方略については実用志向、充実志向、訓練志向と単語学習方略のイメージ化方略との間に比較的強い正の相関があることが分かる。

次に学習動機と予習時の学習方略との相関を見ていく。実用志向、充実志向、訓練志向と授業時学習方略の振り返り方略については実用志向、訓練志向と振り返り方略の間には比較的強い正の相関があることが分かる。また実用志向、充実志向、訓練志向と推測方略については訓練志向と推測方略の間には弱い正の相関があることが分かる。さらに実用志向、充実志向、訓練志向と準備・下調べ方略については実用志向、訓練志向と準備・下調べ方略の間には弱い正の

相関があり、充実志向と準備・下調べ方略の間には弱い負の相関があることが分かる。充実志向と準備・下調べ方略の間には弱い負の相関があることについては 4 章で考察を行う。

最後に学習動機と授業時の学習方略との相関を見ていく。動機づけの実用志向、充実志向、訓練志向と授業時学習方略の要点・疑問把握方略については実用志向、訓練志向と要点・疑問把握方略の間には比較的強い正の相関があり、充実志向と要点・疑問把握方略の間には弱い正の相関があることが分かる。また実用志向、充実志向、訓練志向とメモ方略については実用志向、訓練志向とメモ方略の間には比較的強い正の相関があり、充実志向とメモ方略の間には弱い正の相関があることが分かる。以上より仮説は概ね正しいと言える。

3.5.7. 留学経験有りの上級者における動機づけと各学習方略との相関

		動機づけ		
		実用志向	充実志向	訓練志向
単語学習方略	体制化方略	-0.128134182	0.355524851	0.169392892
	イメージ化方略	0.088950944	-0.003040935	0.199914818
予習時学習方略	振り返り方略	0.295262257	0.423904735	0.368711804
	推測方略	0.40611657	0.662137277	0.545758414
	準備･下調べ方略	-0.174919926	-0.005898961	-0.091160123
授業時学習方略	要点･疑問把握方略	0.525298425	0.815014909	0.645644811
	メモ方略	0.447100694	0.679391615	0.566098535

表 3　留学経験ありの上級者における動機づけと学習方略との間の相関

表 3 は留学経験有りの上級者について内容関与的動機づけと学習方略の間の相関係数を算出したものである。学習動機の実用志向、充実志向、訓練志向と単語学習方略の体制化方略については充実志向と体制化方略との間に弱い正の相

関があることが分かる。また動機づけの実用志向、充実志向、訓練志向と単語学習方略のイメージ化方略については訓練志向と単語学習方略のイメージ化方略との間に比較的弱い正の相関があることが分かる。

次に学習動機と予習時の学習方略との相関を見ていく。動機づけの実用志向、充実志向、訓練志向と予習時学習方略については実用志向、充実志向、訓練志向と振り返り方略の間には比較的弱い正の相関があることが分かる。また実用志向、充実志向、訓練志向と推測方略については実用志向、充実志向、訓練志向と推測方略の間には比較的強い正の相関があることが分かる。さらに実用志向、充実志向、訓練志向と準備・下調べ方略については実用志向、充実志向、訓練志向と推測方略の間にはいずれも相関がないことが分かる。

最後に学習動機と授業時の学習方略との相関を見ていく。動機づけの実用志向、充実志向、訓練志向と授業時学習方略の要点・疑問把握方略については実用志向、訓練志向と要点・疑問把握方略の間には比較的強い正の相関があり、充実志向と要点・疑問把握方略の間にはかなり強い正の相関があることが分かる。また実用志向、充実志向、訓練志向とメモ方略については実用志向、充実志向、訓練志向とメモ方略の間には比較的強い正の相関があることが分かる。以上のことから仮説の多くは間違っていると言える。また各集団の相関の特徴については4章で考察する。

第4章　考察

はじめにどの集団においても実用志向が強い傾向にあることについて考察していく。これは仮説で述べたように英語が就職などにおいて役に立つので、英語の必要性がどの集団においても増したからであるという理由のためであると考えられる。

次に留学経験有りの上級者は単語学習方略において留学経験無しの低級及び上級者に比べて、すべての方略を選択する傾向があることについて考察していく。この結果は留学経験有りの上級者についての仮説に反するものである。これについては被験者の数があまり多くないので偶然このような結果になってしまったという理由と留学経験有りの上級者が効率を度外視して量的に多くの学

習を行おうとするからであるという理由が考えられる。

また留学経験無しの初級者において自尊志向と受動的方略の間には比較的強い負の相関があることについては、自尊志向の強い者は他者からの尊敬のためや他者からの優越のために常に他者の存在を気にして学習を行うので、授業のような他者の目に触れやすい学習場面においては受動方略のような他者の心象を悪くするような方略をとりづらいためにこのような結果になったのであると考えられる。

さらに留学経験無しの上級者で充実志向と準備・下調べ方略の間に弱い負の相関があることについては被験者の数があまり多くないので偶然このような結果になってしまったという理由が考えられる。

最後に各集団の相関の特徴について考察していく。留学経験無しの初級者では自尊志向と反復方略の間に正の相関が、受動方略の間には負の相関があり、関係志向と援助要請の間に正の相関があり、報酬志向と援助要請、受動方略の間に正の相関があるというように各志向によって相関のある学習方略が違うことが特徴として挙げられる。このことからも分かるように例外はあるが、主に留学経験無しの初級者は関係志向、自尊志向、報酬志向の複合的な働きによって効率の悪い学習方略を選択しているのだといえる。

留学経験無しの上級者については充実志向を除いて考えると、推測方略以外はどの学習方略とも正の相関があること、そして推測方略については充実志向との間に相関があることが特徴として挙げられる。以上のことからも分かるように留学経験無しの上級者を主に学習に駆り立てている要因は実用志向と訓練志向であり、充実志向が補佐的な役割を果たしているのだと考えられる。

さらに留学経験有りの上級者については留学経験無しの上級者と違い、充実志向と多くの学習方略の間に正の相関が見られることが特徴として挙げられる。このことから分かるように留学経験有りの上級者を主に学習に駆り立てている要因は充実志向であると考えられる。

第 5 章　結論と今後の課題

本論で調査を行った結果分かったことを改めて述べていく。はじめに留学経

験無しの初級者についてわかったことを以下に挙げていく。

1. 他の集団よりも充実志向、訓練志向、実用志向といった内容関与的動機づけを持つ傾向が弱く、逆に関係志向、自尊志向、報酬志向といった内容分離的動機づけを持つ傾向が強い。また内容関与的動機の中でも実用志向の傾向が若干高い

2. 他の集団に比べて単語学習方略では体制化方略、イメージ化方略の 2 つの方略を選択する傾向が弱く、反復方略を選択する傾向が強い。また予習時学習方略では準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略を選択する傾向が弱く、援助要請を選択する傾向が最も強い。さらに授業時学習方略ではメモ方略、要点・疑問把握方略を選択する傾向が弱く、受動的方略を選択する傾向が最も強い

3. 単語学習方略では自尊志向と反復方略の間に弱い正の相関がある。また予習時学習方略では関係志向及び報酬志向と援助要請の間に弱い正の相関がある。さらに授業時学習方略では報酬志向と受動方略の間に弱い正の相関があり、自尊志向と受動方略の間には比較的強い負の相関がある。

4. 留学経験無しの初級者は関係志向、自尊志向、報酬志向の複合的な働きによって効率の悪い学習方略を選択している

次に留学経験無しの上級者についてわかったことを以下に挙げていく。

5. 留学経験無しの初級者に比べて、充実志向、訓練志向、実用志向といった内容関与的動機づけを持つ傾向が強く、逆に関係志向、自尊志向、報酬志向といった内容分離的動機づけを持つ傾向が弱い

6. 留学経験無しの初級者に比べて、体制化方略、イメージ化方略の二つの方略を選択する傾向が強く、反復方略を選択する傾向が最も弱い。また予習時学習方略では準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略を選択する傾向が強く、

援助要請を選択する傾向が最も弱い。さらに授業時学習方略ではメモ方略、要点・疑問把握方略を選択する傾向が強く、受動的方略を選択する傾向が弱い。

7. 単語学習方略では実用志向と体制化方略との間に比較的強い正の相関が、訓練志向と体制化方略との間に弱い正の相関があり、実用志向、充実志向、訓練志向とイメージ化方略との間に比較的強い正の相関がある。また予習時学習方略では実用志向、訓練志向と振り返り方略の間には比較的強い正の相関が、訓練志向と推測方略の間には弱い正の相関があり、さらに実用志向、訓練志向と準備・下調べ方略の間には弱い正の相関がある。授業時学習方略では実用志向、訓練志向と要点・疑問把握方略の間には比較的強い正の相関が、充実志向と要点・疑問把握方略の間には弱い正の相関があり、さらに実用志向、訓練志向とメモ方略の間には比較的強い正の相関があり、充実志向とメモ方略の間には弱い正の相関がある

8. 留学経験無しの上級者を主に効率の良い学習に駆り立てているのは実用志向と訓練志向であり、充実志向が補佐的な役割を果たしている

最後に留学経験有りの上級者についてわかったことを以下に挙げていく。

9. 他の集団に比べて、充実志向、訓練志向、実用志向といった内容関与的動機づけを持つ傾向が最も強く、逆に関係志向、自尊志向、報酬志向といった内容分離的動機づけを持つ傾向が弱い

10. 単語学習方略では他の集団に比べて、すべての方略を選択する傾向が　ある。また予習時学習方略では他の集団に比べて、留学経験無しの上級者と同様に準備・下調べ方略、振り返り方略、推測方略を選択する傾向が強く、援助要請を選択する傾向が弱い。さらに授業時学習方略では留学経験無しの上級者同様にメモ方略、要点・疑問把握方略を選択する傾向が強く、受動的方略を選択する傾向が最も弱い。

11. 単語学習方略では充実志向と体制化方略との間に弱い正の相関が、訓練志向とイメージ化方略との間に比較的弱い正の相関がある。また予習時学習方略では実用志向、充実志向、訓練志向と振り返り方略の間には比較的弱い正の相関があり、実用志向、充実志向、訓練志向と推測方略の間には比較的強い正の相関がある。さらに実用志向、充実志向、訓練志向と推測方略の間にはいずれも相関がない。授業時学習方略では実用志向、訓練志向と要点・疑問把握方略の間には比較的強い正の相関があり、充実志向と要点・疑問把握方略の間にはかなり強い正の相関がある。また実用志向、充実志向、訓練志向とメモ方略の間には比較的強い正の相関がある。

12. 留学経験有りの上級者を主に効率の良い学習に駆り立てているのは充実志向である

以上のことが本論では明らかになったが、四点改善すべき点が残されている。
一点目は被験者数についてである。被験者数が多いということは、より正確な結果につながるので、被験者数はより多くすべきであると考えられる。
二点目は英語運用能力や留学期間などの被験者の定義をする際の条件についてである。これらを細分化し、より細かな被験者のグループ分けをすることによってより確かなデータが得られるのではないかと考えられる。
三点目は調査に用いた尺度についてである。本論文の調査では全ての質問項目に対して 5 尺度で回答する形式としたが、これを 7 尺度のようにさらに細分化すれば、本論文のデータとは違ったデータが得られる可能性もあるのではないかと考えられる。
四点目は留学経験無しの上級者において充実志向と準備・下調べ方略の間に弱い正の相関があることについてである。これについて本論文では被験者の数が少ないからであるということしか理由として提示できなかったが、他の要因が作用してこのような結果になった可能性も捨てきれないのでさらに調べる必要があると考えられる。

参考文献

安藤寿康・鹿毛雅治『教育心理学――教育の科学的解明を目指して』　慶應義塾大学出版会株式会社、2013 年

市川伸一　『学習と教育の心理学』岩波書店、1995 年

市川伸一　『学ぶ意欲の心理学』PHP 研究所、2001 年

小池生夫監修、SLA 研究会編　『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店、1994 年

小林敏彦　「海外短期語学研修で英語力はどのくらい伸びるものか」、『人文研究』97 号、1999 年、83-100 ページ

篠ヶ谷圭太　「高校英語における予習方略と授業内方略との関係―パス解析によるモデルの構築―」、『教育心理学研究』、第 58 巻 4 号、2010 年、452-63 ページ

中平里実　「短期留学が日本人英語学習者に与える影響：情意、動機付け、コミュニケーションへの意思の変化（小中高大を見通した大学英語教育-一貫したカリキュラムを求めて）」、『JACET 全国大会要綱 46』、2007 年、174-175 ページ

平山　祐一郎・平山　祥子　「大学生における学習動機の 2 要因モデルの検討」『東京家政大学研究紀要』第 41 集 1 号、2001 年、101-105 ページ

堀野緑・市川伸一　「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」、『教育心理学研究』、第 45 巻 2 号、1997 年、140-47 ページ

付録

実験で使用する質問項目

いずれの質問項目も市川（2001）、堀野・市川（1997）、篠ヶ谷（2010）の予備調査の結果得られたデータを因子分析して得られた項目を流用している。

①動機付けについての質問項目

【充実志向】

1.新しいことを知りたいという気もちから
2.いろいろな知識を身につけた人になりたいから
3.すぐに役に立たないにしても、勉強が分かること自体おもしろいから
4.何かができるようになっていくことは楽しいから
5.勉強しないと充実感がないから
6.わからないことは、そのままにしておきたくないから
【訓練志向】
1.勉強することは、頭の訓練になると思うから
2.学習のしかたを身につけるため
3.合理的な考え方ができるようになるため
4.いろいろな面からものごとが考えられるようになるため
5.勉強しないと、筋道だった考え方ができなくなるから
6.勉強しないと、頭のはたらきがおとろえてしまうから
【実用志向】
1.学んだことを、将来の仕事にいかしたいから
2.勉強したことは、生活の場面で役に立つから
3.勉強で得た知識は、いずれ仕事や生活の役に立つと思うから
4.知識や技能を使う喜びを味わいたいから
5.勉強しないと、将来仕事の上で困るから
6.仕事で必要になってからあわてて勉強したのでは間に合わないから
【関係志向】
1.みんながやるから、なんとなくあたりまえと思って
2.友達といっしょに何かしていたいから
3.親や好きな先生に認めてもらいたいから
4.回りの人たちがよく勉強するので、それにつられて
5.みんながすることをやらないと、おかしいような気がして
6.勉強しないと、親や先生にわるいような気がして
【自尊志向】
1.成績がいいと、他の人よりすぐれているような気もちになれるから
2.成績が良ければ、仲間から尊敬されると思うから

3.ライバルに負けたくないから
4.勉強して良い学校を出たほうが、りっぱな人だと思われるから
5.勉強が人なみにできないのはくやしいから
6.勉強が人なみにできないと、自信がなくなってしまいそうで
【報酬志向】
1.成績が良ければ、こづかいやほうびがもらえるから
2.テストで成績がいいと、親や先生にほめてもらえるから
3.学歴があれば、おとなになって経済的にも良い生活ができるから
4.学歴がいいほうが、社会に出てからもとくなことが多いと思うから
5.勉強しないと親や先生にしかられるから
6.学歴がよくないと、おとなになっていい仕事先がないから
市川（2001：54-55 に基づく）

②単語学習時の学習方略についての質問項目
【体制化方略】
一つの単語をいろいろな形（名詞形・動詞形）を関連させて覚える
同意後、類義語、反意語をピックアップしてまとめて覚える
同一場面で使える関連性のある単語をまとめて覚える
動詞の変化形をまとめる
新しいことを知ることができるから
スペルが似ている単語、意味が似ている単語をまとめて覚える
その単語使っている熟語を覚える

【イメージ化方略】
単語のスペルを頭の中に印刷の文字ごと浮かぶようにイメージする
単語をながめながらアルファベット配列の雰囲気をつかむ
頭の中に単語がイメージできるように何度も見る
何か他の単語と関連させて連想できるようにして覚える
発音が何か他の別の言葉（日本語）に似ていたら語呂合わせをする
【反復方略】

手と頭が完璧に覚えるまで何度も書く
英語から日本語、日本語から英語へと何度も書き換える
新しいわからない単語にラインをひいておく
発音しながら単語を書く
わからない単語をチェックペンとシートを使って意味と単語を繰り返し覚える
堀野・市川（1997:143 に基づく）

③予習時の学習方略についての質問項目
【準備・下調べ方略】
分からない単語の意味を辞書で調べる
教科書の意味を把握しながら読む
どの単語が分からないかを確認する
意味の分からない文を調べる
どの文の意味がわからないかを確認する
教科書に目を通しておく
以前に習ったことを思い出す
【振り返り方略】
以前に習った教科書の内容を読み直す
今までのノートも読み直してみる
次回の授業でしっかり聞こうと思うところを把握する
分からない文法に関する教科書や参考書の説明を読んでおく
新しく覚える単語を何度も書いて覚える
【推測方略】
意味の分からない文をすぐに調べずに推測する
意味の分からない単語をすぐに辞書で調べずに推測する
【援助要請】
友達と内容を確認する
うまく訳せないところを誰かに聞く
篠ヶ谷（2010: 454 に基づく）

④授業時の学習方略についての質問項目

【メモ方略】

先生の説明のうち大切だと思ったところをメモする

自分の訳を修正する

文法を理解しようとする

文法事項をノートに書き込む

単語の意味を書き込む

先生の説明をメモする

なぜその訳になるかを考える

意味のまとまりが分かるように文にしるしをつける

アクセントを書き込む

自分の考えと違っている内容を書き込む

【要点・疑問把握方略】

分からないことがあったら先生に聞く

授業内容について疑問点を把握する

自分が分からないところと関係があるか考えながら聞く

自分の知りたいことが説明されているかをチェックしながら聞く

単語の意味を覚えようとする

【受動的方略】

特に意味は考えずに板書を移す

難しい文は意味を考えずに訳を書く

どこが重要かあまり考えずに授業を受ける

篠ヶ谷（2010: 455 に基づく）

The Effect of the Number of Years of Study Abroad on Second Language Processing Among Japanese Learners of English

Ayako Yamamoto

1. Introduction

To develop second language skills, Llanes and Muñoz (2013: 64) state "SA[1] has been claimed to be the most efficient way to learn an L2". It could be inferred that studying abroad is one of the best ways to improve language skills, better than just sitting and studying at school as a second language in their home country without having any interaction with native speakers. Perhaps, a majority of people might expect great language improvement in their second language skills after participating in overseas program. They may go for a month, half a year, or a year, depending on their plan for language development. In Japan, since English is studied for many years as their second language, starting from elementary or junior high school, people tend to choose an English-spoken country as their study abroad destination. In fact, according to the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), the number of people who went to study abroad by country showed that 21,290 people went overseas study in the United States of America in 2010, which is greater than in any other country. The total number of people who went to study abroad throughout the world in the same year was 58,060 (mext.go.jp). Despite the different number of years studying abroad, most people came back with successful improvement of their language skills in certain ways, and will have learned many things from their stay in a foreign country.

However, it is a question whether studying abroad for a short term truly affects language processing. Some might think that only a short stay, a few weeks or a few months, would make no change at all in acquiring language skills. Therefore, this study is to determine whether Japanese learners of English with different amounts of time studying or living abroad, will process their second language differently. For example, do those with longer experience abroad show faster processing times in English (or perhaps even in their native language,

Japanese) than those who have studied abroad either for less time or not at all? It is assumed that students with the longer study abroad experience would show greater differences than those who have never been to another country, and those who went to study abroad for one academic year would perform somewhere in the middle of those with experience and those with no long year experience.

2. Previous research

Some of the study abroad research has focused on to the impact of short-term study abroad. It could be observed from some studies that even a few weeks or days of study abroad experience can make more of a difference on certain skills than at home. Llanes and Muñoz (2009), mention that the analysis of Evans and Fisher (2005) showed remarkable improvement among sixty-eight French learners (age thirteen to fourteen) in their listening and writing skills after only six to eleven days of study abroad. Surprisingly, the improvements on the skills were still notable although two years had passed since the overseas program. Moreover, Llanes and Muñoz (2009) themselves have also concluded that three to four weeks of study abroad will show great achievements on listening comprehension, oral fluency, and accuracy.

Other studies have reported that a year stay will also make a change on language acquisition as well. Aoyama et al. (2003) demonstrated that one year stay in a foreign country will have a great impact on phonetic aspects. They conducted two experiments on the discrimination of phonetic sounds; the second one was conducted after their participants reside in the US for one year. The Speech Learning Model (SLM) (Flege) hypothesis was evaluated in this study, which regards “the effect of perceived cross-language phonetic dissimilarity on the learning of L2 phonetic segments” (Aoyama et al., 2013: 235). Japanese native-speaker adults and children were tested in this study. The results revealed that Native Japanese children showed a better discrimination of English [l] and [ɹ], and of [ɹ] and [w] after a one-year stay in the US, while adults did not show any differences on the same experiment. Also, children have improved in distinguishing /r/ from /l/ in production from the first time of the experiment to the

second time. From this study, it could be said that a year of living abroad will make a significant difference on phonetic aspects before the stay. Furthermore, even though adults had the same number of years of stay as the children, the adults were unsuccessful at showing a difference on the test, which means that the age when people go to study abroad might also have an effect on language acquisition. In addition, Tsukada et al. (2004: 286) have concluded from their results that "children are more successful than adults in L2 speech learning".

From these studies, even short term study abroad has been shown to be effective on some skills. In addition, they showed that the differences in study abroad experiences suggest that greater number of years of abroad would have much a greater effect on language acquisition. According to Slotkin et al. (2012: 170), "long-term (i.e. residential) programs that requires students to spend an academic year abroad may place more emphasis on foreign language acquisition, short-term study abroad programs focus on providing students exposure to international travel as well as cultural immersion opportunity". Moreover, in case of language processing, a longer abroad experience will lead to show faster response times than those who have less experience abroad.

3. Experiment

3.1 Purpose

The purpose of this study is to examine the hypothesis the duration of study abroad influences second language processing among Japanese English L2 learners by testing their language processing with a Lexical Decision task (LDT), and to compare the results among groups of individuals with different years of study abroad experience.

3.2 Participants

Forty-five university students who are native speakers of Japanese (fourteen males, thirty-two females), aged twenty-one to twenty-three participated in the experiment. They have all studied English for more than eight years (maximum of

twenty years) with different amounts of study abroad experience. Based on their background information, those are classified into three groups:

Group1: No experience abroad, three males and seven females (NE)

Group 2: Six months to one year study abroad experience, five males and five females (Short Term (ST))

Group 3: More than three consecutive years of living abroad, two males and eight females (Long Term (LT)).

Ten participants are classified into each group. All of the participants in group 2 and group 3 had come back to Japan within the past five years. The reason to set the return years within five years is not to allow a huge gap between their return and the present.

Other fifteen students did not meet the criteria for any of the groups so their data have been excluded from analysis.

3.3 Materials

The LDT is used for this experiment, and it was administered with Superlab experimental presentation software. The LDT is used in this case because it is possible to "gain insights into how lexical knowledge is structured and accessed" (Jiang, 2012: 79). Two blocks of stimuli, one in English and one in Japanese are tested in this experiment. Forty real words and forty non-words (eighty stimuli in total) were selected for each block, English and Japanese. The real words are classified by frequency: twenty high frequency words and twenty low frequency words. The words frequency is used in the test because Duyck et al. (2008: 850) said "participants respond faster to high-frequency (HF) words than to low-frequency (LF) words". In the study, they revealed that "Bilinguals showed a considerably larger frequency effect in their second language" (Duyck et al, 2008: 850). Additionally, English frequency measures were taken from the "Corpus of contemporary American English", and the average of English high and low frequency words used in the experiment measures are 154,143.6 and 1,811.802, respectively, which is a difference of 152,331.798. The frequency measures of Japanese stimuli were taken from "A 150,000 Japanese frequency word list" and the average frequency measures are 256.9487 for high frequency and 5.755159 for

low frequency words, which is a difference of 251.193541 (The stimuli of Japanese words were selected in collaboration with Nanao Kobayashi.). Because the two corpuses (English and Japanese) use different scales, the numbers for English and the numbers for Japanese are completely unrelated to one another. English non-words were selected from the website, "Pseudo-words" 2009 (ibbly.com) and some of the words were altered in order to match the word length with the English real words. Japanese non-words were made in collaboration, again, with Nanao Kobayashi. In addition, English and Japanese groups contain three different word-classes: verbs, nouns, and adjectives. Each group matches with the average word length for about 5.16 to 5.28 for English words and non-words, and 3.5 to 3.57 for Japanese words and non-words (see Appendices 1 through 3 for further information of specific stimuli).

3.4 Procedure

Participants took the test at a café, at school or in a quiet room. A simple background questionnaire was completed in English, before or after the experiment to investigate their English study experience. It contains nine to fifteen questions depending on their study abroad experience (see Appendix 4). The experiment was administered using a SONY VAIO personal computer, model of PCG-4T1N. Participants were seated in front of the computer and the participants were asked to judge whether the words that appeared on the screen are real words are non-words. They were asked to response as quickly and accurately as possible. All participants were tested on the English section first and then the Japanese section. Participants were asked to use either "z-key" or "/-key" on the computer keyboard to respond in the test using their left and right index finger, respectively. The key assignments differed between group A and group B, and all of the participants were divided into either group randomly. The number participants in group A are equal to group B (50%:50%). For group A, the participants use "z-key" for real word and "/-key" for non-word and group B used the opposite. The stimuli were shown on white background with black font color. The instructions were given in English first, and the experiment was started when the participants press either key (z or /) that is used. Four stimuli (two real words, two non-words) were

shown in English, as practice of the test first, and then the main part begins. Each stimulus began with a “+” fixation mark presented at the center of the screen. The duration between the fixation mark and the stimuli is 500ms. Participants must respond in order to proceed to the next stimulus. The response time (RT) is measured between the appearance of the stimulus and when the participants pressed a key. Participants are allowed to take a short rest after they respond to forty stimuli (one half) of the English block, and before the start of the Japanese section, and again at the middle of the test of the Japanese section.

3.5 Data analysis

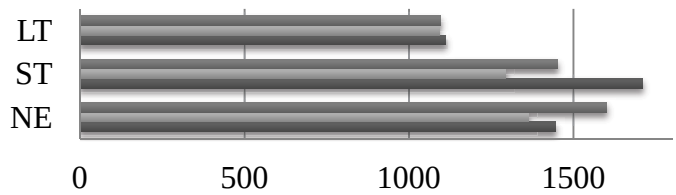
The RTs for the non-words, and all incorrect responses (errors) were not included to the data analysis. Data from all of participants were pasted into Excel by group, and then counted and summarize electronically. Average RTs were calculated by group, by frequency, and by word class. Accuracy on the test was also recorded for both English and Japanese, and compared by group.

4. Results

Average of RTs was compared by each factor: accuracy, high vs. low frequency, English vs. Japanese, and word class. The analysis was made by ANOVA comparing frequency, two languages by group, and the interaction of the two. It showed that all three factors have significant differences: frequency: $F(1,2041) = 115.1$ $P<0.0001$, group language: $F(5,2041) = 36.97$ $P<0.0001$, and interaction: $F(5,24041) = 5.222$ $P<0.0001$. The results are explained below by each category of contrast.

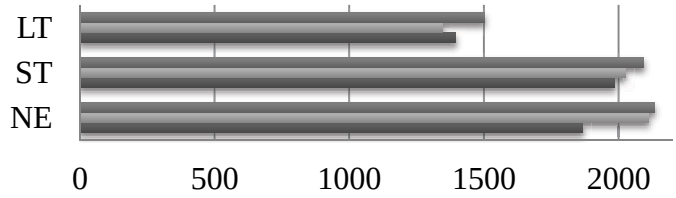
4.1 Word classes

Figure 1 Comparison of mean RT by word class: English High Frequency



	NE	ST	LT
adjective	1601.101449	1449.791045	1096.83824
verb	1364.216667	1294.474576	1091.98333
noun	1444.470588	1710.652174	1111.84058

Figure 2 Comparison of mean RT by word class: English Low Frequency



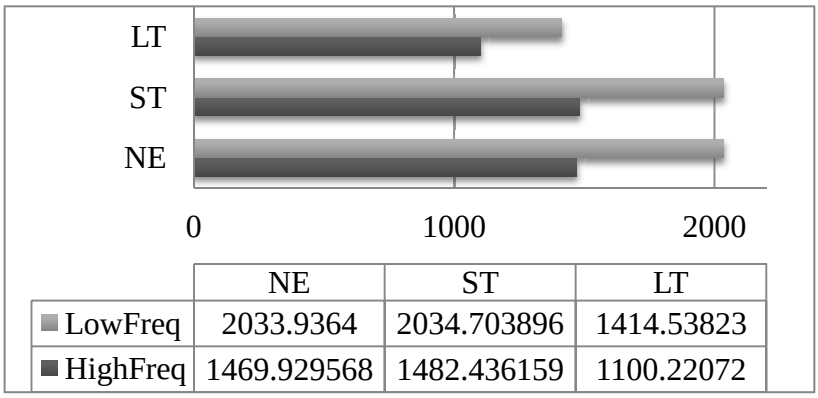
	NE	ST	LT
adjective	2133.4737	2094.258065	1501
verb	2111.3077	2025.586957	1347.88889
noun	1867.028	1984.266667	1394.72581

Note. Graphs are made in Excel refer to the data of a pivot table for the mean of each word class.

Figures 1 and 2 show the results of comparison of English word classes, high vs. low frequency with the different groups. The two graphs indicate that there is no difference between the frequency and the word classes. For the LT group, the participants did not show big differences among three word classes in either high and low frequency. However, for the NE and ST group, those did show a slight difference among the word classes in high frequency.

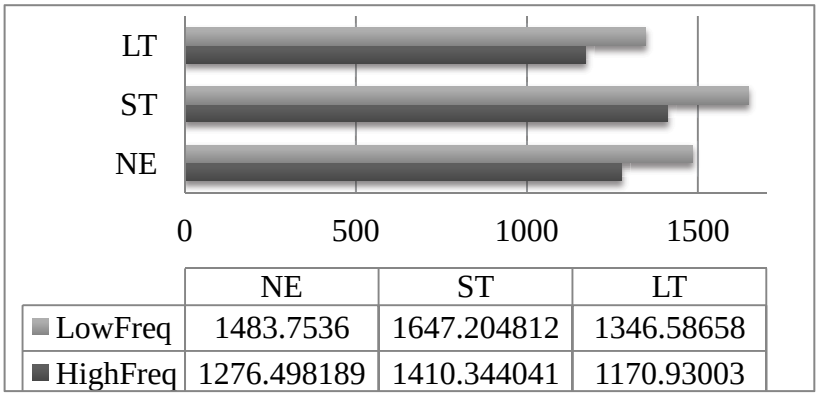
4.2 Frequency (high vs. low)

Figure 3 Comparison of mean high and low frequency RT: English



	NE	ST	LT
LowFreq	2033.9364	2034.703896	1414.53823
HighFreq	1469.929568	1482.436159	1100.22072

Figure 4 Comparison of mean high and low frequency RT: Japanese



	NE	ST	LT
LowFreq	1483.7536	1647.204812	1346.58658
HighFreq	1276.498189	1410.344041	1170.93003

Note. Mean of the RT was calculated by Excel for each group.

The data were tested by post-hoc analysis using Sidak's multiple comparisons test, and it revealed that all three groups, except for Japanese word frequency among the long term abroad group, had significant differences between high and low frequency words (NE English (Eng) $p<0.0001$, NE Japanese (Jpn) $p<0.05$, ST Eng $p<0.0001$, ST Jpn $p<0.05$, LT Eng $p<0.001$ and LT Eng $p>0.05$). On the basis of the test, it can be inferred from Figure 3 that all three groups had showed similar results on English data.

4.3 Language (English vs. Japanese)

Figures 5 and 6 are graphs comparing the RTs between the two languages. Post-hoc analysis with Tukey's multiple comparison test showed that there is no significant difference for high frequency words between the two languages among the three groups. However, the NE and the ST groups showed significant differences ($p<0.0001$) for low frequency words, but the LT group did not ($p>0.05$).

Figure 5 Comparison of mean RT of English and Japanese: High Frequency words

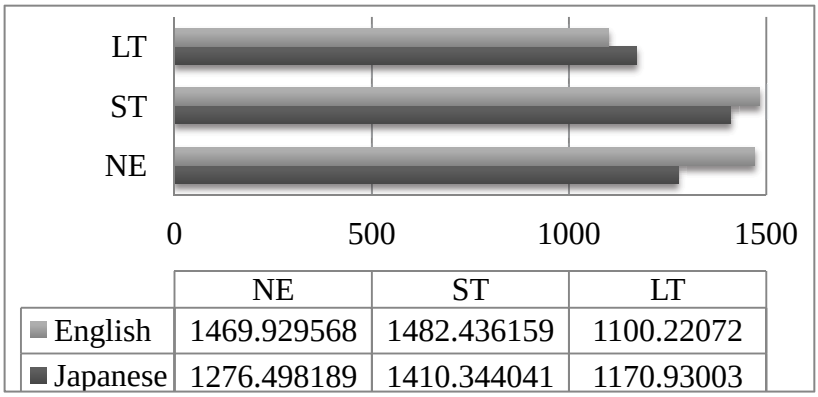
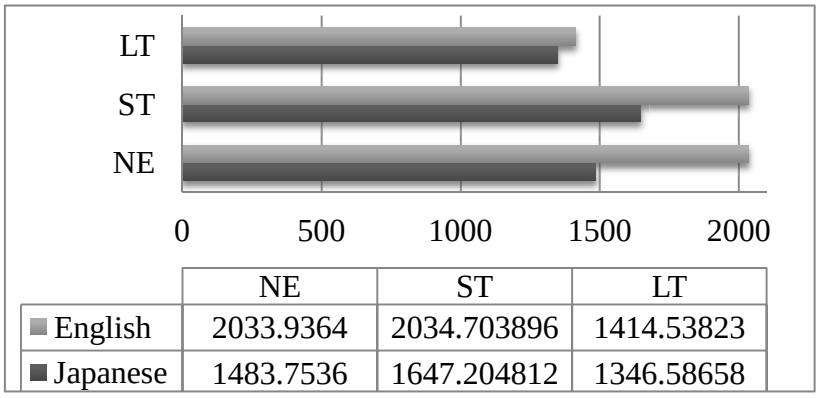


Figure 6 Comparison of mean RT of English and Japanese: Low Frequency words

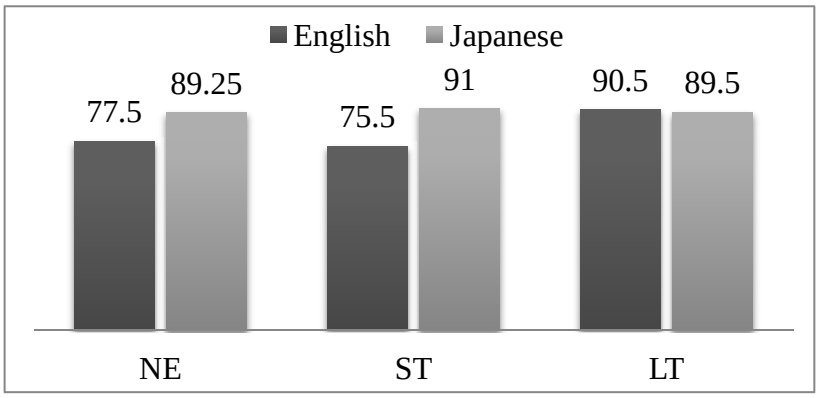


Note. Mean of the RT was calculated in Excel by group.

4.4 Accuracy

According to the data in Figure 7, the NE group and the ST group showed almost the same difference in accuracy on this experiment between the two languages. Those two groups got lower accuracy in English, but the LT group showed almost no difference between the two languages.

Figure 7 Comparison of accuracy on English and Japanese tests



Note. Accuracy was measured by dividing the number correct (x) by the total number (y) of stimuli and multiplied by 100. (x/y*100).

5. Discussion

This study revealed that longer experience of living abroad would show significant differences than shorter or no experience of studying abroad.

In Figure 3, all three groups showed the same results in the English data. According to the result, it can be inferred that there are frequency effects in English in all groups. In the same Figure, the LT group showed the shortest RT between high and low frequency, suggesting that their abroad experience effect on language processing. On the other hand, only the LT groups did not show any significant differences on the Japanese data, according to Figure 4. This might be because of their long term abroad experience affected somehow in their Japanese language processing.

In addition, the LT group did not show any differences in both languages, English and Japanese, as can be seen from Figures 5 and 6. It can be assumed that their long experience of living abroad have changed in their language processing of both high and low frequency in both languages, because their language processing between the two languages looks similar. This might suggest that the LT group is more familiar with their second language concern for words frequency because of their long stay in overseas. On the other hand, the ST group showed interesting results in those two graphs. In Figure 5, the ST group showed no significant differences on high frequency words, but they showed significant differences on low frequency words in Figure 6. From this result, it can be inferred that the ST groups of abroad experience had affected their language processing for high frequency, but not for low frequency. Furthermore, the NE group requires longer RTs when responding to English than they do to Japanese, according to Figures 5 and 6, while both SA groups show no real difference in RTs between two languages in high frequency. This gives an idea that even one year abroad also alerts processing of second language.

Interestingly, a clear distinction was found on the accuracy on English and Japanese tests by group. In Figure 7, it showed an interesting result that all three groups had almost same accuracy on the Japanese test, but the LT group showed the highest accuracy in English than other two groups. In addition, the LT group did not show any difference on the Japanese and the English tests, while the other two groups did. From this result, it supports one of the reasons to stay longer years in overseas would be more effective. In spite of more recent return from study abroad program of the ST group than the LT group, the LT group still had the high

accuracy. Furthermore, because of all three groups had similar accuracy on the Japanese test, it can be said that the longer year experience abroad have no effects on accuracy in their native language. Some might think that longer reside in a foreign country might show differences in native language, because of less time using of their native language. However, in this study, it can be inferred that people who went to long-term abroad does not show any differences in their native langue on accuracy than the other two groups, who stayed longer years in their home country.

However, there are two points that cannot be concluded from this experiment. Firstly, the number years of living abroad. There are eight years difference in range between the participant of the longest stay (eleven years) and the shortest stay (three years) in the LT group. This might result differently by eight years abroad than three years abroad student. The range should have to be controlled, or make shorter to fill the years gap between the participants. Secondly, in what age when the participants had their abroad experience. Some students in the LT group went abroad in their younger age (two to fifteen years old) while the ST group participants went abroad in their older age (around 20 years old). Therefore, older participants who lived abroad in long duration and returned recently, and younger participants who went to studying abroad for one year, need to participate to control the age effect in the experiment.

Moreover, after finishing collecting the data and analyzing it, three other hypotheses on language processing have raised;

1. How the participants in the LT groups differ from English native speakers in the English test. Whether the LT participants show similar RT from native speakers or not at all.
2. Whether in what age when students went abroad will be effective.
3. Whether the duration of years of English study will affect.

Finally, studying in other country will be very helpful to develop ones second language skills. However, students must be active while their stay on overseas program to achieve significant language ability, as Wang (2010: 51) mentioned “SA students need to have regular and substantive interactions with

native speakers, particularly those who can speak and write properly in the TL[2] *and* are willing to play the role of supportive interlocutor in the process of SLA[3]".

6. Conclusion

The present study conducted an investigation into the students' language processing with different years of studying abroad experience. It is to determine whether the number years of abroad experience will effect on language processing. Some studies have mentioned that even a short-term abroad has significant impact on language acquisition and production, but the present study made clear that longer time abroad is more effective on language processing, whereas the ST group showed small differences than the NE group.

In the experiment, the LDT was conducted to determine the effects of years studying abroad, and forty-five Japanese university students who all studies English have participated. At the same time, those participants had filled in an easy background questionnaire to find their English study experience. Thirty of those data were used for analysis, and all errors and non-words RTs were excluded.

As a result, the examination revealed that both SA groups showed differences than the NE group, but the LT group showed the more significant differences than other two groups. In addition, the LT group got the highest accuracy in English part, compared to those of the other two groups. From this result, it suggests that students should stay more than one year in order to improve on their second language processing. However, three more hypotheses should be examined to indentify more specifically about the language processing. Firstly, how the participants in the LT group perform different from native English speakers. Secondly, whether the age when the students went to studying abroad will matter on language processing. Lastly, the effects on language processing by the duration of English study.

Overall, studying abroad experiences would show significant effects on language acquisition and processing. The longer year of overseas stay will be the more helpful way for language development. However, whenever to go to study

abroad, it must be in mind that people should be active and have interactions with native speakers, not just studying quietly in the classroom.

Notes

[1]SA: Study Abroad

[2]TL: Target Language

[3]SLA: Second Language Acquisition

References

A 15,000 Japanese Word Frequency List. Web. 3 October, 2013 <http://www.manythings.org/japanese/words/leeds/>

Aoyama, Karsura., Flege, J.E., Guion, Susan G., Akahane-Yamada, Reiko., and Yamada Tsuneo. (2003) Perceived Phonetic Dissimilarity and L2 Speech Learning: the case of Japanese /r/ and English /l/ and /r/. *Journal of Phonetics 32* (2004): 233-250

Corpus of Contemporary American English, 450 million words, 1990-2012. Web. 3 October, 2013 <http://corpus.byu.edu/coca/>

Duyck, Wouter., Vanderelst, Dieter., Desmet, Timothy., and Hartsuiker, Robert J. (2008) The Frequency Effect in Second-language Visual Word Recognition. *Psychonomic Bulletin & Review 15 (4)* (2008): 850-855

Flege, J. E. (1995) Second Language Speech Learning: Theory, Findings, and Problems. In W. Strange (ed.), *Speech perception and linguistic experience: Issues in Cross-Language Research*. Pp. 233-277. Timonium, MD: York P

Jiang, Nan. (2012) *Conducting Reaction Time Research in Second Language Studies*. New York: Routledge

Llanes, Àngels., Muñoz, Carmen. (2009) A Short Stay Abroad: Does it Make a Difference?. *System 37* (2009): 353-365

Llanes, Àngels., Muñoz, Carmen. (2013) Age Effects in a Study Abroad Context: Children and Adults Studying Abroad and at Home. *Language Learning A*

Journal of Research in Language Studies 63 (March 2013):63-90

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. *Nihonjin no Kaigai Ryuugaku Jyoukyou* [Japanese Studying Abroad Aspects]. (8 February, 2013). Web. 15 November, 2013. <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/__icsFiles/afieldfile/2013/02/08/1330698_01.pdf>

Pseudo-words, July 2009. Web. 5 October, 2013. <http://ibbly.com/Pseudo-words.html>

Slotkin, Michael H., Durie, Christopher J., and Eisenberg, Jarin R. (2012) The Benefits of Short-term Study Abroad as a Blended Learning Experience. *Journal of International Education in Business* 5 (2012): 163-173

Tsukada, Kimiko., Birdsong, David., Bialystock, Ellen., Mack, Molly., Sung, Hyekyung., Flege, James. (2004) A Developmental Study of English Vowel Production and Perception by Native Korean Adults and Children. *Journal of Phonetics 33* (2005): 263-290

Wang, Chilin. (2010) Toward a Second Language Socialization Perspective: Issues in Study Abroad Research. *Foreign Language Annals*. Vol. 43, No.1: 50-63

Appendix

Appendix 1 English Stimuli

1.1 English High Frequency words (20 words)

Word Class	Stimuli	Frequency measures
Verb	become	140745
	believe	139539
	call	149795
	live	115282
	might	240578
	start	108424
Noun	area	119347

	education	137463
	fact	164506
	idea	101258
	night	193436
	part	224094
	program	145251
Adjective	able	118785
	better	245829
	economic	186692
	human	123497
	large	130865
	real	142280
	young	160290

1.2 Stimulus measurement averages

Word Class	Word Length	Frequency
Verb	5.16667	149060.5
Noun	5.28571	155050.7
Adjective	5.28571	158319.7
Average	5.24603	154143.6

1.3 English Low Frequency words (20 words)

Word class	Stimuli	Frequency
Verb	undo	1593
	enact	2367
	kneel	945
	poke	1883
	transmit	1995
	weave	1992
Noun	claw	1426
	hunch	1094

	meadow	2912
	nutrient	2023
	raft	2431
	tick	1955
	torque	1692
Adjective	faulty	2331
	dice	1627
	gingerly	1281
	oily	1369
	iced	1508
	rainy	2638
	veiled	1190

1.4 Stimulus measurement averages

Word Class	Word Length	Frequency
Verb	5.16667	149060.5
Noun	5.28571	155050.7
Adjective	5.28571	158319.7
Average	5.24603	154143.6

Appendix 2 Japanese Stimuli

2.1 Japanese High Frequency words (20 words)

Word Class	Stimuli	Frequency
Verb	いただく	346.64
	うける	261.99
	かんじる	285.81
	くださる	330.72
	はじめる	192.97
	みえる	204.39
	わかる	210.53

Noun	ことば	267.39
	ぎじゅつ	215.72
	じょせい	226.31
	すこし	217.76
	せいかつ	248.26
	かんけい	408.9
	りよう	220.74
Adjective	あたらしい	197.61
	おおい	424.65
	おおきい	222.41
	たかい	273.68
	つよい	195.51
	わるい	192.82

2.2 Stimulus measurement averages

Word Class	Word Length	High Frequency
Verb	3.571429	261.8643
Noun	3.571429	257.8686
Adjective	3.5	251.11333
Average	3.547619	256.9487

2.3 Japanese Low Frequency words (20 words)

Word Class	Stimuli	Frequency measures
Verb	おとる	7.97
	またがる	3.11
	こらえる	2.34
	しいる	8.48
	せしめる	2.52
	につく	9.85
	めくる	5.96
Noun	きけつ	3.86

	ざっき	2.33
	じゅちゅう	8.19
	たんてき	7.57
	ふへん	8.58
	ふじょ	4.2
	みんぽう	2.26
Adjective	あらい	9.91
	くどい	7.89
	せいぜい	2.45
	とぼしい	9.59
	ひとしい	4.83
	ぼろい	3.18

2.4 Stimulus measurement averages

Word Class	Word Length	Low Frequency
Verb	3.571429	5.788333
Noun	3.571429	5.747143
Adjective	3.5	5.73
Average	3.547619	5.755159

Appendix 3 Non-words stimulus

3.1 English non-words stimuli (40 words)

arble	copic	hemic	lably	greas	Tened	frenes
assis	cring	hered	liced	prope	trism	penito
blung	dised	intes	mility	ritors	unquent	yarde
bacter	ested	idology	merlie	reval	wouned	tita
beave	embos	kaise	nette	ragil	vinzed	pret
ector	forer	narge	ories	sible		

Note. Average word length 5.25

3.2 Japanese non-words stimuli (40 words)

あずしい	こんじょ	ぎびゅち	わおい	ざたさ	たくい
くしりとう	つのよい	くだふる	よつく	じてる	りわん
ふらめる	ししわい	しょむえ	せるい	たげむ	すらあ
とびゅう	えまふい	かんぬる	にとば	ふっぱ	ましく
ころろとい	せおてこ	はまらね	ひとれ	ぼすく	おとい
いたへく	まかみい	めてん	うぐる	みがい	
ももちゃう	とくみう	きども	こめほ	せとめ	

Note. Average word length 3.5

Appendix 4 Background questionnaire

Name: _____ Age: _____ Sex: _____

Status: _____

1. Where are you from? (Country, Prefecture,

   City)_____

2. Where have you lived the most? (Country, City, Prefecture)

   _____

3. What is your parent's native language?

   _____

4. 1) Have you ever studied abroad? Yes _____yr(s)

   No

   2) If yes, which country?

   _____

   3) If yes, when did you start? (What age?)

   _____

   4) If yes, where did you stay at? a) with host family b) with parent c) at

   dormitory

   5) If yes, when did you come back to Japan?

   _____

5. How long have you studied English?

   _____yr(s)

6. When did you start studying English?

   _____yr(s)

7. 1) Do you have any chance to speak to English native speakers? Yes

   No

2) If yes, how often do you speak with them?

_____hrs/m

8. 1) Have you ever taken any kind of standardized English test?

(TOEIC, TOEFL, 英語検定.) ? Yes_____

No

2) If yes, which skill was the best??

Reading Listening Writing Speaking

9. Are you left or right handed? Left Right

Appendix 5

5.1 Participants' information

Subject	Age	Group	Gender	Length of Abroad (yrs)	Number years of studying English
1	23	LT	M	7 y	12 y
2	21	LT	M	8 y	8 y
3	22	LT	F	11 y	18 y
4	22	LT	F	11 y	20 y
5	21	LT	F	13 y	20 y
6	22	LT	F	3 y	9 y
7	22	LT	F	3 y	10 y
8	21	LT	F	4 y	15 y
9	23	LT	F	3.5 y	11 y
10	23	LT	F	3 y	10 y
11	22	ST	M	1 y	10 y

12	22	ST	F	1 y	10 y
13	22	ST	F	1 y	8 y
14	23	ST	M	1 y	11 y
15	22	ST	F	6 m	10 y
16	21	ST	M	1 y	8 y
17	22	ST	M	1 y	10 y
18	22	ST	M	1 y	10 y
19	22	ST	F	1 y	9 y
20	22	ST	F	10 m	15 y
21	21	NE	F	0	9 y
22	22	NE	F	0	10 y
23	21	NE	F	0	15 y
24	21	NE	F	0	9 y
25	22	NE	M	0	10 y
26	21	NE	M	0	10 y
27	23	NE	M	0	10 y
28	21	NE	F	0	12 y
29	22	NE	F	0	10 y
30	22	NE	F	0	11 y

5.2 Proportion average, and average years of English study experience by group

Groups	Proportion average M/F	Average of length of Abroad (yrs)	Average number of years studying Eng
LT	M: 20% F: 80%	6.65 yrs	13.3 yrs
ST	M: 50% F: 80%	0.943 yrs	10.1 yrs
NE	M: 30% F: 70%	0	10.6 yrs
Ttotal	M: 25% F: 75%	2.528 yrs	11.3 yrs

On Classification of Old English Christian Terms into the Native or Exotic Type

Yuta Kinouchi

1. Introduction

Past research shows Old English (OE) had much resourcefulness in utilizing native words to enrich its vocabulary instead of borrowing. Baugh & Cable (2013: 85-86) say "[t]he English did not always adopt a foreign word to express a new concept. Often an old word was applied to a new thing and by a slight adaptation made to express a new meaning." They go on to give some words as the examples that were inherited from Germanic and applied to new concepts relevant to Christianity, which was introduced into Britain in 597. However, they don't discuss sufficiently how many native words, compared with loanwords, were used to express the new concepts. Moreover, while the general percentage of loanwords in the OE vocabulary have been discussed, the percentage that are restricted to the OE Christian terms haven't yet. In brief, there needs to be a specific research on the topic.

Incidentally, in the preceding paragraph, the term loanword was used in a broad sense. However, loanword is strictly just one of the types into which loans[1] are classified based on a morphological typology. Loans and their typology are complicated to discuss, and it is necessary to review their basic notions proceeding to the issue above.

Therefore, the present thesis aims at examining whether OE Christian terms' morphemes (i.e. etyma[2] and affixes) are of native or exotic origin, at classifying them into different kinds of loans, and at calculating each proportion.

The following is this paper's structure. Chapter 2 offers an overview of OE loanwords (not loans) based on some previous studies. Chapter 3 discusses the loan typology which is appropriate enough to achieve the main aim, referring to Fischer (2002), Haugen (1950), and Kastovsky (1992). Chapter 4 introduces methods of investigation. Chapter 5 illustrates the results of analysis of data selected from *Thesaurus of Old English* (*TOE*) giving some words. In Chapter 6, I

will make conclusive remarks and mention further studies to be made.

2. An Overview of OE Loanword

The recorded vocabulary of OE[3] is approximated at 30,000 words and, only about 3 percent of them are of non-Germanic origin, that is, loanwords (Minkova 2005: 779; Kastovsky 1992: 294). The language from which OE borrowed the largest number of loanwords is Latin (including Latinized ones from Greek), and the second is Scandinavian. Minkova (2001: 32) observes "[a]bout 3 percent of the Old English word stock comes from Latin, or in some cases, from Greek through Latin." Scandinavian exerted a great influence on the OE vocabulary, but, unlike Latin, most of the loanwords were not recorded until after the Norman Conquest, or in Early Middle English (Minkova 2005: 779; Kastovsky 1992: 320-321). Few words did OE borrow from other languages, such as Celtic, whose elements are mostly left on place names. There were also a few words from French (e.g. *capun* and *castel*), but they might have been derived from Latin (Mitchel 1992: 30).

3. Loan Typology

Some previous studies have made loan typologies so far. Fischer (2002: 97-98) attempts to classify them into the following three types: (1) morpho-etymological (or morphological) one, which concentrates on "the morphological structure and the etymology of borrowings," (2) lexico-semantic (or semantic) one, which looks at "the lexical and semantic consequences of borrowing," and (3) socio-historical (or sociolinguistic) one[4], which mainly focuses on "the socio-historical aspects of contact situations." This paper, as is mentioned above, is primarily concerned with loans' morphemes, and therefore goes into details in morphological terms hereafter.

Haugen (1950: 213-222) defines basic notions concerning borrowing (see Note 2), and then makes general divisions of loans, "according to their extent of morphemic substitution," into (1) loanwords, which "show morphemic importation without substitution" (e.g. AmE. *shivaree* < Fr. *charivari*)[5], (2) loanblends, which

"show morphemic importation as well as substitution" (e.g. AmPort. *alvachus* < E. *overshoes*), and (3) loanshifts, which "show morphemic substitution without importation." Loanshifts are subdivided into either loan translations (also calques), which have imported "a particular structural pattern" (e.g. Fr. *gratte-ciel* < E. *skyscraper*), or semantic loans, which have imported "only a meaning" (e.g. AmPort. *humoroso* 'humorous', whereas 'capricious' in Port., < AmE. *humorous*). Hybrid creations, which exotic etyma with native morphemes have secondarily created within the receptor language, don't precisely belong to loans because they haven't imitated the models in theory (e.g. Yaqui *liósnóoka* 'pray' ← *liós* 'God' (< Sp. *dios*) + *nóoka* 'speak' (native morpheme)). Additional subdivisions are also put forward, but, since this paper's aim isn't to make the more detailed typology, there is no need of mentioning them here (and also henceforth).

When it comes to a typology of OE loans, Kastovsky (1992: 299-317) discusses well. First of all, he distinguishes loans into the following two types depending on importations: (1) a lexical item or (2) only the meaning of a lexical item. The latter is subdivided into (2.1) semantic loans (e.g. OE *synn* 'injury, enmity, feud' adopted 'sin, crime' < L. *peccatum*) or (2.2) loan formations, which "are in principle new formations and therefore necessarily complex, i.e. compounds or derivatives." And he also says "[t]hey involve the activation of some productive word-formation pattern in the recipient language" (311). Loan formations have further three subdivisions of (2.2.1) loan-translations (e.g. OE *godspellboc* 'gospel book' < L. *liber evangelii* [*benedictionum*]), (2.2.2) loan-renditions (e.g. OE *leorningcniht* 'disciple' < L. *discipulus*), and (2.2.3) loan-creations (e.g. OE *fahwyrm* 'basilisk' < L. *basiliscus*), according to their correspondence to the foreign model: perfect, partial, or none, one after the other.

It is certain that the typologies above make it possible to arrange loans comprehensively. However, their divisions don't show completely whether loans are of either native or exotic type. They have two points to be reconsidered here. Firstly, the author expediently treats a hybrid creation as a kind of loanblends in contrast to Haugen (1950). This is just because it includes an exotic etymon which has already been imported. The second point is concerned with loan formations. Kastovsky (1992: 313) regards *mæsseboc* (< L. *liber missalis*) and *pistolboc* (< L.

liber epistolaris) as loan translations. This means that *mæsse-* and *pistol-* are regarded as native morphemes which were substituted for *missalis* and *epistolaris*, and that they imported "only the meaning of a lexical item." However, they apparently consist of both of an exotic etymon and a native morpheme, and this paper views such words as kinds of loanblends.

On the basis of the discussion above, the author reorganizes the way to divide loans as follows:

(1) LOANWORD[+ importation, - substitution] (exotic)
(1.1) LOANWORD
(1.2) EXOTIC COMPOUND
(2) LOANBLEND [+ importation, + substitution](exotic)
(2.1) HYBRID
(2.2) HYBRID CREATION
(3) LOANSHIFT [- importation, + substitution] (native)
(3.1) SEMANTIC LOAN
(3.2) LOAN CREATION

This classification shows that three major divisions are morphologically different types of loans respectively, and also whether each of them is of the native or exotic type. They and their subdivisions except for exotic compound and loan creation[6] follow Haugen's (1950) typology. Exotic compounds are words which are composed of two or more etyma from another language. In a strict sense, they don't belong to loans as well as hybrid creations. The criterion to distinguish between hybrids or hybrid creations is the same one as Haugen (1950)'s, in other words, whether they have imitated the models or not. As for loanshifts, if a certain loan is a morphological neologism, it is regarded as a loan creation, not a semantic loan. This criterion follows Kastovsky (1992: 312)'s.

4. Methods of Investigation

The following is how to investigate OE Christian loans. First of all, the author has collected the data from *TOE Online*, which is a searchable database of OE vocabulary. Out of the eighteen category headings in *TOE*, the sixteenth one labeled as religion contains the Christian terms, and its total number of the entries amounts to 3,399. However, it is required to count as one the items which appear with different meanings more than once, since there is the possibility that their meanings might have been developed from the core meanings, not imported. As a result, the total number decreases to 2,932, which is the object to investigate. Moreover, this paper aims at the conduct of morphological analysis, and a little disregard of semantic aspects is unproblematic.

When analyzing the data above, I refer to the three previous studies, that is MacGillvray (1902), Serjeantson (1935) and Baugh & Cable (2013). They made chronological lists of OE Christian loanwords, which are useful for identification of exotic etyma. In order to identify the rest of loans as the native or exotic type, I utilize the two following dictionaries: Hall (1960) and Terasawa (1997).

5. Results of Analysis

5.1 The Exotic Type

Here, I present the results of analysis and classification of the data exemplifying some words. In the first place, let us begin with the exotic type of loans. The total number of loanwords amounts to 158, fourteen of which are exotic compounds. They are all as follows: *angelcyrice*, *bisceopseonoþ*, *candelmæsse*, *capitolmæsse*, *cristesmæsse*, *mæssecapitel*, *mæssecrēda*, *mæsseprēost*, *mæssewīn*, *munucregol*, *mynstermunuc*, *mynsterprafost*, *mynsterprēost*, *nun(nan)mynster*. Their meanings are almost transparent.

The number of loanblends is about three times as large as loanwords. It adds up to 459. They are necessarily complex words, that is, derivatives or compounds, including an exotic etymon; to put it in another way, they are composed of an exotic etymon and either of a native affix or etymon. For example, the following words are given: as derivatives, *(ge)bisceopian*, *(ge)cristnian*, *abboddōm*,

ælmesful, *bisceophād*, *dauidlic*, *dēofollīce*, *īdelnes*, *mæssere*, *templic*, *un(ge)munecod*, *uncristen*; as compounds, *ælmesgifa*, *bisceopcynn*, *canonbōc*, *capitelhūs*, *dēofolscipe*, *ēastportic*, *efencristen*, *fantbæþ*, *gedwolbiscop*, *hāligportic*, *īdelgield*, *lofsealm*, *mæssehacele*, *mæsseniht*, *munucrēaf*, *ymbrendagas*. It is interesting that not all of them originate from Latin (or Greek), but there are a couple of loans from another source; *drȳcræft*, *drȳcræft drīfan*, *drȳcræftig*, *drȳcge*, *drȳlic*, *drȳmann*. Their etymon *drȳ*, whose modern form is *druid*, arises from Celtic.

Although they have further subtypes of hybrid and hybrid creation, it isn't easy to subdivide them, since their models must be identified in another language. In order to accomplish the perfect typology, a comparative linguistic approach is needed. Unfortunately, the present thesis can't and needn't deal with so detailed an investigation, and therefore it is one of the further studies to be made in the future.

5.2 The Native Type

As is obvious from the description of Baugh & Cable's (2013) in Chapter 1, loanshifts take the largest number of Christian loans. It sums up to 2,315. Examples of these are chosen at random as follows: *(ge)bedrǣden* 'prayer, intercession', *(ge)hālgian* 'to hollow, sanctify', *(ge)wītegian* 'to prophesy, predict', *āsegendnes* 'an offering', *ælfsiden* 'elvish influence', *ælmihtig* 'almighty', *dǣdbōt* 'amend, penitence', *forswerian* 'to swear before', *godcundnes* 'divine nature, divinity', *hēafodsynn* 'deadly sin', *leorningcniht* 'student, disciple', *ūpware* 'inhabitants of heaven', *unlybba* 'witchcraft', *weorþscipe* 'worth, respect, dignity, glory', *woruldgeþōht* 'worldly thought'. It depends on Hall (1960) to decide whether loans are really native or exotic.

Although they can be further subdivided following the way presented in Chapter 3, this paper deliberately ignores them here, as well as loanblends' subdivisions. In theory, there is an apparently simple criterion to distinguish between semantic loans and loan creations, namely whether they were morphological neologisms or not. It is certain that complex loans of the native type whose models are identified are necessarily concluded to be morphological neologisms, i.e. loan creations: *leorningcniht* (< L. *discipulus*), *ælmihtig* (< L.

omnipotentem), *godspel* (< L. *evangelium*) and, probably, the examples above, too. However, simple words whose models are not identified are some ploblematic: such as *(ge)hlot*, *(ge)þe_on*, *(ge)writ*, *ār*, *bearn*, *botm*, *earm*, *fæt*, *frēo*, *gif*, *hām*, *lār*, *morþ*, *rōd*, and so on. They can't be concluded as semantic loans unless it becomes obvious that they are not neologisms. However, OE has left only a few of the documents before Christianization, and it is difficult to determine. Therefore, in order to classify them, there must be a detailed etymological research on them.

6. Conclusion

6.1 Conclusion of Investigation

Firstly, I summarize each of the number of OE Christian loans which are discussed above, and calculate each proportion. The total number of the data is 2932;

Table 1

Loan typology	Number	Proportion
loanword	158	5%
loanblend	459	16%
loanshift	2,315	79%

Secondly, Table 1 is reorganized into Table 2, as it shows the relationship between the native and exotic type of loans.

Table 2

type of loans	number	proportion
exotic	617	21%
native	2,315	79%

In Chapter 1, citing Baugh & Cable (2013)'s description about OE Christian loans, the author raised the two following questions: "how many native words, compared with loanwords, were used to express the concepts related to

Christianity" and "the percentage that are restricted to the OE Christian terms haven't been discussed yet". In this thesis, both of them are answered clearly by concrete figures based on the data collected from a corpus..

6.2 Further Studies to be Made

I make some comments on loan typology here. Although the typology suitable for the main aim was made in Chapter 3, it cannot be fully used in this paper because of the problems abovementioned. Therefore, I intend to solve them and analyze the data in further detail in the future.

When it comes to the general problems as to typological research, Fischer (2002) observes that

> [m]orphological and semantic typologies on the other hand, though seemingly more traditional, can yield a great deal of new information if an attempt is made to study a whole semantic domain and if such studies are truly comparative, comparing different text types, different source languages or different periods (110).

The author agrees to the idea entirely, and considers that loan typology should be polished from various points of view and also should be applied to various fields.

As a further study, I am planning to make research which puts focus on each loan's frequency. Through reading OE prose texts, such as *Anglo-Saxon Chronicles* and *Ecclesiastical-History of English People*, I will check the Christian terms used in the texts, and investigate each word's frequency. The main point of an argument is whether the frequency is correlative with loan typology. If I read the latter in Latin, this research can have an another aspect, that is to say, a comparative study.

Notes

[1] The essence of Haugen (1950: 212)'s definition of borrowing is "the attempted reproduction in one language of patterns previously found in another," and he labels what is reproduced as loan, the original pattern as model, respectively. Besides, he divides the way of reproduction into importation and substitution as mentioning

> [i]f the loan is similar enough to the model so that a native speaker would accept it as his own, the borrowing speaker may be said to have imported the model into his language, provided it is an innovation in that language. But insofar as he has reproduced the model inadequately, he has normally substituted a similar pattern from his own language. (212)

He emphasizes that borrowing is a process involving reproduction, not a consequence, namely a loan.

[2] Brown & Anderson (2006: 45) define an etymon as "[a]n earlier form from which a word has been formed or has developed, or a donor form from which it has been borrowed or adopted." The term is often used as a synonym for a radical, which helps to reveal the word's etymology (Ishibashi 1973: 302). The present thesis uses it as the latter meaning.

[3] It must be born in mind that the recorded vocabulary of OE isn't equal to the total as Clark (1970: 89) makes the following comment: "[t]he OE vocabulary is certainly very incompletely recorded: extant OE documents are comparatively few and short, and limited in range of subject matter and genre, and lack, more or less by chance, instances of thousands of words that must have actually (even though perhaps only rarely) been used."

[4] Fischer (2002: 110) points out that sociolinguistic types may be the least useful of the three for a study of borrowing in the history of English. He brings the two reasons for it as follows: "First, lexical borrowing, especially of content words, does not seem to be very indicative of the intensity of contact. Second, since there is so little information about the precise circumstances of contact situations in the past, circular arguments seem unavoidable", and he proceeds to conclude "the

socio-historical and the linguistic evidence in these cases cannot clearly be separated."

[5] This example is classified into loanwords, not loanblends, because in the word "speakers have imported not only the meaning of the form but also its phonemic shape, though with more or less complete substitution of native phonemes" (213-214).

[6] Certainly, loan creation can be called loan translation, and indeed the latter is most often used. However, the denomination of loan translation is some misleading since semantic loans are also translated from words of another language.

References

Baugh, Albert C. and Thomas Cable. *A History of the English Language*. 6th ed. London: Routledge, 2013.

Brown, Edward K. and Anne H. Anderson, ed. *Encyclopedia of Language and Linguistics*, 2nd ed. (vol. 14) Amsterdam: Elesiver, 2006.

Clark, Horn W. *Early English: a Study of Old and Middle English*, rev. ed. London: Deutsch, 1970.

Fischer, A. "Lexical Borrowing and the History of English: A Typology of Typologies." *Language Contact in the History of English*, 2nd rev. ed. edited by Dieter Kastovsky and Arthur Mettingers. Studies in English Medieval Language and Literature 1. Frankfurt and Main: Lang, 2003. 97-115.

Hall, John R. Clark, ed. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. 4th ed. New York: Macmillan, 1960.

Haugen, E. "The Analysis of Linguistic Borrowing." *Language* 26 (1950): 210-231.

Ishibashi, K. *Gendai Eigogaku Jiten* [Seibido's Dictionary of English Linguistics]. Tokyo: Seibido, 1973.

Kastovsky, D. "Semantics and Vocabulary." *The Cambridge History of the English Language: vol.1 The Beginnings to 1066*. edited by Richard Hogg. Cambridge: CUP, 1992. 290-408.

MacGillivray, Hugh S. *The Influence of Christianity on the Vocabulary of Old English*. Part 1 (First Half). Halle: Niemeyer, 1902.

Minkova, D. "Old English." *Encyclopedia of Linguistics*. edited by Philip Strazny. New York: Fitzroy Dearborn, 2005. 777-80.

---. *English Words: History and Structure*. Cambridge: CUP, 2001.

Mitchell, B. *An Invitation to Old English and Anglo-Saxon England*. Oxford: Blackwell, 1995.

Roberts, J. and Christian Kay, ed. *Thesaurus of Old English*. 2 vols., 1995. Available online at [http://oldenglishthesaurus.arts.gla.ac.uk/]. Accessed on 23 November 2013.

Serjeantson, M. S. *A History of Foreign Words in English*. London: Routledge, 1935.

Terasawa, Y. ed. *Eigo Gogen Jiten* [The Kenkyusya Dictionary of English Etymology]. Tokyo: Kenkyusya, 1997.

大学院論文

A Wonder Book for Girls and Boys にみるホーソーンの文壇批判

内田　裕

はじめに

ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）は、1851 年に当時のアメリカ文学の歴史において他に類を見ない試みであった、ギリシア神話の児童向けの再話を行った。*A Wonder Book for Girls and Boys*（1851）のかたちでまとめられたこの試みには、1851 年の J. T. フィールズ（J. T. Fields）宛の手紙にホーソーン自身が綴っているように、長い時間は必要とせず、ほぼ二ヶ月の内に書くことができると語られている。とはいえ、多くの批評家が指摘する通り、『緋文字』（*The Scarlet Letter*）出版のわずか一年後に書かれたという事実、また彼の公私における境遇の変化との相関からも注目に値するべきものであり、作家としての当時の彼の問題意識をうかがい知る資料としても有益なものである。

体裁としては児童文学の形をとりつつ、様々な主題を有する本作は、基本的な神話のあらすじは守りつつも、彼の自由な想像力の赴くままに脚色されていることが本作の序文にて明言されている。そのように自由な姿勢のもと程度の差こそあれ、ホーソーンの筆で色づけされ描かれた作品が六編収録されたのが本作である。それら六編の中で、主に本稿では最初と最後の短編作品、「ゴーゴンの首」（“The Gorgon’s Head”）と「キメラ」（“The Chimaera”）という青年冒険譚の趣が強い二作品を取り上げ、作家としての地位を築いたホーソーンの意識がどのように反映されているかを見て、その問題意識の性質を探りたい。

第 1 章　「ゴーゴンの首」にみるホーソーンの文芸市場批判

「ゴーゴンの首」の基本的なあらすじは、ギリシャ神話、ペルセウスとメドゥーサの逸話に取材しているが、本稿序文でも触れたとおり、作者の自由な想像力のおもむくままに脚色されている。それは以下のように明言されている。“He [author] has generally suffered the theme to soar, whenever such was its tendency, and when he himself was buoyant enough to follow without an effort.” （4）

無論ギリシャ神話は神話であることから、口承文学としての性質があり、地域、時代によってその内容に少なからぬ差異がある。そのため当時のホーソーンがどの逸話に取材したかによって、実際に彼がどれほどの脚色を加えたかということに関する推測が変わってくる。従って、主に本稿では、本作の語り手ユースタス・ブライト（Eustace Bright）が参照したとされるアメリカ古典研究者であるチャールズ・アンソン（Charles Anthon）の編纂した神話的事実、なかでもアントンの神話編纂書のなかでも網羅的なものである *A Classical Dictionary*（1825）の内容を基準の神話として据えた上で議論することにしたい。

まず第一に、本短編とアントン版との間の最も大きな違いとして、ポリデクテス王（King Polydectes）の扱われ方が挙げられる。ホーソーンの再話においてもポリデクス王の横暴ぶり、勇敢な青年ペルセルス（Perseus）のゴーゴン討伐にいたるまでと、基本的なあらすじはアンソンの記した神話的事実を踏襲している。しかしながら、ホーソーンにおいては、国王の悪漢さ、狡猾さは、“smiling craftily”や、“with a cunning smile”（11）といった描写によって、度々強調されている。ただ結果的に国王は、ペルセウスが持ち帰ったメドゥーサの視線により石となってしまうため、本作はアントン版同様に全体として勧善懲悪の感が強い。

ただここで興味深いことに、アンソン版の、持ち帰ったゴーゴンの首の視線によって国王を石にかえてしまうという結末に、ホーソーンはさらに筆を加えている。持ち帰ったメドゥーサの首を見せるように命じられたペルセウスは、即座にそれを見せることなく、次の引用部にあるように、休日を設けた後、国民全体を集め当の品を見せたいと申し出る。

> “It is really an objects that will be pretty certain to fix the regards of all who look at it. And, if your majesty think fit, I would suggest that a holiday be proclaimed, and that all your majesty’s subjects be summoned to behold this wonderful curiosity.” （33）

アンソン版では、“ … Polydectes had summoned thither all the people, to see the formidable head of the Gorgon”（411）とあり、国王自らが全国民を集めるとの記述がなされていることから、このペルセウスからの申し出という設定は、明らかな書き換えということになる。

つまりここでホーソーンは、ペルセウスが悪漢の国王の命を果たし、彼に復讐を遂げるというプロットに、国王のみならず国民全体をその復讐の対象に含み入れるという設定を加えたということが明らかになるのである。村田希巳子は、他の神話との比較を考慮に入れたうえでホーソーンの再話は「最も残酷な結末」を持つものとしている（53）。

しかしながら、なぜホーソーンは国民までをも復讐の対象にするという脚色を加えたのであろうか。無論本作は子どもを対象としたものであり、物語の皮相では勧善懲悪といった教訓めいた色調が強いが、国民全体への抗議という設定はいささか奇妙である。このことは本短編において、勇敢な青年の冒険譚という単純なプロットの中に、国民の特徴、そしてその国民と国王の関係性までが詳細に描き込まれているという点に注目すると理解できる。

本短編において国民はみな、見物が好きであり、彼らのほとんどが、我先にと物珍しいものに飛びつき、流行に迎合する性質を持った者たちであることが以下のようにことさらに強調されているのだ。

> Most of the inhabitants, at all events, ran as fast as they could to the place, and shoved, and pushed, and elbowed one another, in their eagerness to get near a balcony, on which Perseus showed himself, holding the embroidered wallet in his hand. （33）

そしてこの国民の性質を国王自身もよく認識していることが、“The King well knew that his subjects were an idle set of reprobates, and very fond of sight-seeing, as idle persons usually are” （33）と述べられており、ペルセウスの提案を受け入れるという決断も、国民の趣向を満たすため、換言するならば、自国民の懐柔のために為されたものであるということが、読み込めるのである。

それではホーソーンはなぜ、このような国民の性質、また国王、国民間の関係を描く必要があったのだろうか。

ヘンリー・ジェイムズ（Henry James）は本作ワンダーブックについて、本作が“あまりにも安易な文学が生み出されつつある時代（とくにそうした国で）児童に対して

なされた、もっとも魅力ある文学的貢献”であるとし、同時に当時起こった児童小説ブームの質の低さを示唆している。またホーソーン自身、アメリカで女性作家による感傷小説が濫作された時分に、編集者ウィリアム・ティクナー（William Ticknor）に宛てた手紙で、その時流に対し語気を強めながら苦言を呈したことで知られる。そのため彼が市場の動向に対する持論を作品に反映させたとしてもなんら不思議ではない。

しかしながらなによりも、本作における国王と国民の性質、その関係性は、語り手ユースタス・ブライトの描かれ方との比較によって、ホーソーンの主張に見事結合するようである。語り手であるユースタス・ブライトは休暇の時期に大学から帰った大学二年生であり、その言動には彼が語ることになるペルセウス自身を思わせる無邪気さが散見される。また彼の身のこなしに関しては、“This learned student was slender, and rather pale, … but yet of a healthy aspect, and as light and active as if he had wings to his shoes (7)”と述べられており、あたかもその靴には羽が生えているようであると描写され、その点においても本作のペルセウスに関する描写との類似が見られる。そして何よりも看過できないのが、ユースタスが作家としての大成を考えている青年であるという事実である。本小説の終盤ではあるが、実際にホーソーンの著作の出版を行っていた、フィールズや、ティクナー社の名前を挙げながら、その胸中を以下のように口にしているのだ。

> “ … I mean to spend all my leisure, during the rest of the vacation, and throughout the summer-term at college, in writing them out for the press. Mr. J. T. Fields (whom I became acquainted when he was in Berkshire, last summer, and who is poet, as well as a publisher) will see their uncommon merit, at a glance. He will get them illustrated, I hope, by Billings, and will bring them before the world under the best of auspice, through the eminent house of TICKNOR & CO. In about five months from this moment, I make no doubt of being reckoned among the lights of the age!”（170-71）

つまりホーソーンは、作家としての飛翔を志すユースタスにペルセウスの神話を語らせながら、国民には迎合主義的性質を、そして国王にはその嗜好を満たすことで国民を懐柔し権威を保とうとする性質を付与したのだ。そしてそこに 19 世紀中葉当時の文学市場における出版社、消費者間の構図を描き込んだのだと考えるのが妥当である。さらに作家を目指す青年ユースタスの語る物語のなかでその覇権が奪取されるという結末までを書き足すことで、批判の声をより明瞭なものとしているのだ。

また、本作における「見る」（sight）という行為に注目し、そのことによる物語の展開との関係を論じたラフラドの論考にも目を向けたい。“Sight is used in ‘The Gorgon’s Head’ to illustrate the movement from blindness, or inexperience, to the ability to “see”, to control one’s narration, to become one’s own author.” （77）彼女によれば、ペルセウスは盾を磨き上げることにより、メドゥーサを見ながら、見ないという行為を達成する。他者を見ることにより、その他者の物語をコントロールする能力を手にするというのだ。この議論の興味深い点は、最終的にペルセウスはメドゥーサの視線を使うことで、実際的に王国の行く末、つまりナラティヴまでをコントロールしたという点である。そして「見る」という行為によって明け渡された国家のナラティヴはペルセウスのコントロール下にもたらされ、彼が「著者」としてその行く末を書き換えていくことになるというわけだ。彼女の論は、「見る」という象徴的意味と物語の展開を見事に明示するにとどまっているが、作家を志す青年としてのユースタスがそのことを語る点を考慮に入れるならば、当時の文芸市場における権力関係に対する示唆というより積極的なホーソーンの問題意識を読み取るべきである。

最後に、メドゥーサの視線により石となった人々を描写した一節は、“They were all fixed, forever, in the look and attitude of that moment. （34）”とある。つまり、本短編最後の国民、国王のように石化した人々は、その見た目だけでなく、姿勢（“attitude”）つまり物理的な意味のみならず、文学作品の受容における態度においても石化してしまうということが読めるのだ。そしてそのように石化してしまった人々は、“… stone, and stand with and that uplifted arm for centuries, until time, and the wind and weather, should crumble him away. （14）”とあるように、時の潮流に耐え抜くことはできず、雨風にさらされ、いつかぼろぼろと崩れ落ちてしまうことが示唆されている。一時的な市場価値だけを重んじる姿勢への、このうえなく辛辣なホーソーンの批判が読み込めるのだ。

第 2 章　「キメラ」に聞くメルヴィルへの声

本短編「キメラ」（“The Chimæra”）は、本短編集を締めくくる短編小説である。物語の流れとしては、勇敢な青年ベレロフォン（Bellerophon）が国民を苦しめる怪獣キメラを討伐するため、翼の生えた馬ペガサスの力を借り、見事にその目的を完遂するという、ある種単純明快な物語である。アンソンによるキメラの説明によると、キメラの実体には諸説あるとのことであるが、本作の描写から判断するにホーソーンは

執筆にあたりヘシオドスが編纂した神統記にまとめられたキメラの逸話に取材したようである。

話の展開としては、前節で扱った「ゴーゴンの首」同様、勇敢な青年が偉業を成し遂げるというものである。しかしながら、本作では権威への抵抗といったことよりも、ベレロフォンがペガサスを獲得するにあたり心に抱く感情や、彼の心理的な揺れ動きに焦点が当たっているようである。本章では、本作においてベレロフォンの心理的側面を仔細に語るという脚色をホーソーンが加えた意図を探る。

ホーソーンがベレロフォンの心理的側面について意識的に筆を加えた点は大きく二つあるようである。一点目はペガサスの出現を今か今かと待ち望む場面であり、二点目は姿を表したペガサスの捕獲に際しての描写においてである。まず一点目に注目したい。

ライシア（Lycia）の王、アイオバティス（Iobates）の提案を受け入れるかたちで、ベレロフォンは己の名を高めるためにキメラ討伐に発つ。そこで彼はキメラと対等に戦うために素早く動ける馬を見つけることにするが、その試みは、一人の少年を除いた他の町民たちにとっては現実離れした夢見ごとにしか映らず、まるで相手にされない。ここで注目に値するのは、本作においてベレロフォンを信じない者として描かれる老人、「田舎者」（country fellow）が、それぞれ、過去のことに重きを置かない、あるいは実利的な考え方を優先する大人として描かれている点であろう。彼らはベレロフォンを以下のように嘲笑する。

> The rustic people … would often laugh at poor Bellerophon, and sometimes take him pretty severely to task. They told him that an able-bodied young man, like himself, ought to have better business than to be wasting his time in such and idle pursuit.　（149）

ここで語られるような、一見して無意味かとも思われる行為に実利的価値観を押しつけ蔑むという姿勢には、以下に引証する『緋文字』の序文、「税関」で描かれる物語作家を目指すホーソーンへの先祖からの視線が自ずと想起される。

> "What is he?" murmurs one grey shadow of my forefathers to the other. story books! What kind of business in life—what mode of glorifying God, or being serviceable to mankind in his day and generation— may that be? Why, the degenerate fellow might as well have been a fiddler!" Such are the compliments bandied between my great grandsires and myself, across the gulf of time!

このように作家として身を立てようとするホーソーン自身がかつて感じた劣等感の表象ともとれる先祖からの視線と、ペガサスの出現を希求するベレロフォンへの町民の視線には、ホーソーンが自身に対し抱いていた実利性の欠如に伴う劣等意識という共通項が見いだせる。またそのような他者からの無理解という厳しい視線に耐えながら過ごす際の時の流れについて、ホーソーンは以下のように過分なほどの同情を交えた語りをユースタスにさせる。

> Oh, how heavily passes the time, while an adventurous youth is yearning to do his part in life, and to gather in the harvest of his renown! How hard a lesson it is, to wait! Our life is brief; and how much of it is spent in teaching us only this! （152）

この感傷的なユースタスの語りの中にも、評価が得られないまま作品創作を続けていたかつてのホーソーンの心情が反映されていると考えられる。つまりホーソーンは、ベレロフォンのペガサス待望の念、あるいはその際に周囲から投げかけられる不理解の姿勢を詳細に描きこむことで、大成を待つ若き作家の苦悩をベレロフォンに投影しているのである。

次に第二点目として、ペガサス捕獲の場面におけるベレロフォンの苦悩に目を向けたい。ベレロフォンはペガサスに馬勒をつけ手なずけることになるが、ここで彼がその登場から持っており、その描写がいささか印象的なブライドルの持つ意味についても考えたい。

前節で扱った「ゴーゴンの首」のなかで、本短編の主人公ベレロフォン同様、勇敢な青年として登場し偉業を成し遂げることになるペルセウスは、ゴーゴンの首をとるために出かけるが、そのために必要な知識、装備の獲得をほぼ他者からの協力により得る。また、最も象徴的な協力として、ゴーゴンとの決戦を決定づける盾の使い方を、クイックシルヴァー（Quicksilver）によって教えられることで、見事勝利をおさめる。しかしながらそれとは対照的に、キメラ討伐に決定的な影響を与えるペガサスの入手に必要な馬勒は、本作中誰からも与えられるものではなく、ベレロフォンが初めから持つものとして描かれる。そのためペガサス獲得は、クイックシルヴァー的な人物による神がかり的補助によってではなく、熟考と時間を要し、それに伴う周囲からの視線に耐え、解決策を自ら思案しながら対処しなくてはならない事項として描かれているのである。

ここで看過できないのが、本短編集にたびたび登場するクイックシルヴァーという謎めいた人物の不在という問題である。村田氏はクイックシルヴァーという人物に関し、神話の再話である本短編集において、ホーソーンによるかなりの「肩入れ」がされた人物であるとし、彼の名前の響きに注目しながら、神話のアメリカ化を図るうえで重要な要素であることを指摘している（52）。しかしながら、クイックシルヴァーの持つ意味を考えるにあたり、彼の担う作品中での役割にも注意を注ぐ必要がある。

短編集に収録されている性質の異なる作品に度々登場するクイックシルヴァーの共通した描写として、風変わりな帽子をかぶり、「若きヤンググッドマン・ブラウン」（“Young Goodman Brown”）におけるブラウンの従者のそれを彷彿とさせる蛇の巻き付いたような奇妙な杖を持ち、いたずらっぽい笑みをたたえた青年であるという点がある。しかしながらその作品中における働きは様々なかたちで描かれており、「ゴーゴンの首」においては上述のように強力な援助者として、また、パンドラの箱の逸話を扱った「子どもたちの楽園」（“Paradise of Children”）においては、災厄のもととなる箱をパンドラに届ける人物として、そして「魔法の水差し」（“The Miraculous Pitcher”）ではゼウス（Zeus）と共に放浪し、主人公の老夫婦をからかう人物として、クイックシルヴァーは描かれている。各作品において異なる働きを担っていると考えられるクイックシルヴァーではあるが、彼の短編集中における一貫した働きとしては、物語の展開を方向付ける人物としての働きがある。彼が援助を施さなければ、ペルセウスはゴーゴンとの対決を迎えることさえなく、彼がパンドラのもとへ箱を届けなければ、彼女がふたを開けることはない。また彼がボーキス（Baucis）をからかわなければ、彼ら老夫婦の善性は際立たないのである。

そのような物語の展開を決定づける役割を持つ人物クイックシルヴァーであるが、本稿で取り上げた青年冒険譚二作品における彼の登場と不在という対照には、とりわけホーソーンの強い意図が読み取れる。

「ゴーゴンの首」におけるクイックシルヴァーの持つ意味には、短編集 *Mosses from an Old Manse*（1846）収録の“The Celestial Railroad”に登場するスムーズ＝イット＝アウェイ氏（Mr. Smooth-it-away）との類似を思わせるものがある。ホーソーンはその名の持つ「滑らかにする」という意味からも、以下に付したスムーズ＝イット＝アウェイ氏の発言にも明白に現れているように、本来出会うはずの艱難そのものを取り除いてしまい、その過程に得られるより肝要なものを失わせてしまうという含みを持たせて使用している。

> You observe this convenient bridge. We obtained a sufficient foundation for it by throwing into the slough some editions of books of morality, volumes of French philosophy and German rationalism, tracts, sermons, and essays of modern clergymen, extracts from Plato, Confucius, and various Hindoo sages, together with a few ingenious commentaries upon texts of Scripture - all of which, by some scientific process, have been converted into a mass like granite. The whole bog might be filled up with similar matter. （809）

つまりホーソーンは、この二編の青年冒険譚という比較的類似点の多い逸話を短編集の最初と最後に配置することによって、本作におけるクイックシルヴァーの不在という性質を強調しているのだろう。そして、彼の不在により光が当てられるベレロフォンの苦悩を通して、その苦悩の必要性を読者に訴えかけようとしているのである。それではベレロフォンの苦悩という問題を克明に描き通すことで、ホーソーンの意味したものとはなんなのであろうか。そのことは本作の後に語られる「話のそのあと」“After the Story”までを視野に入れることで、明確なかたちを帯びてくるようである。

六話すべてを語り終えたユースタスは、実際にその場にペガサスがいたら、とさらに空想を膨らませ、仲間の作家たちがいる場所に文学巡礼に発ちたいという願望を口にする。彼はそのなかで、ペガサスの飛翔に身を預け、名前を挙げながら幾人かの実在する作家や詩人のもとを訪れる空想を語る。そこでは文学界における高名な人物たちの名前が挙げられるが、名字だけで特定できるような文士たちに紛れ、一際目を引くのが当時ホーソーンほどに地位は確立していない作家であったハーマン・メルヴィル（Herman Melville）の名前がフルネームで挙げられていることである。この名前の明示はまるでホーソーンがメルヴィルの著名な文学者たちの中への仲間入りを認め、さらには推挙しているようでさえある。さらにメルヴィルの語られ方は、次にあるように、彼の創作世界の壮大さと、それに対し厳然と存在する実社会とが、創作中の『白鯨』のイメジと書斎の窓越しに迫りくるに山並みというイメジを並べながら語られるのだ。“On the hither side of Pittsfield sits Herman Melville, shaping out the gigantic conception of ‘White Whale’, while the gigantic shape of Graylock looms upon him from his study-window.（169）

ベレロフォンのキメラ獲得に象徴される、想像的活動に伴う社会的な非承認の視線とは、まさにかつてのホーソーン自身が感じた、そして彼にとってのメルヴィルを代表するような後続の若き文士たちが抱えていた意識の表出であるとはいえないだろう

か。さらにホーソーンはそのような苦悩がいつかは報われるということを、希望的観測の念を込めながら、ベレロフォンのキメラ獲得、あるいは彼を最後まで信じ続け、遂には偉大な詩人となることになる少年の描写を通して語ろうとしていたのではないだろうか。

本作の執筆に取りかかる以前の 1850 年 8 月、ホーソーンはメルヴィルと共通の知人を介して面会している。その際の詳細はデルバンコの伝記的研究に詳しいが、彼はその際同伴したという記者の話を用い、ホーソーンとメルヴィルの相互の理解を以下のように記している。

> They learned so much of each other's character, and found that they held so much of thought, feeling and opinion in common, that the most intimate friendship for the future was inevitable.　（126）

つまり彼らは出会ってすぐに互いの近似性を感じ取り、感化しあったわけである。またそれだけでなく、同様に「話のそのあと」にはもう一点ホーソーンからメルヴィルへの声が聞けそうな描写がある。

本作の終盤、ユースタス達の近所に住む、「物静かな男」"silent man"とされる人物が描かれる。彼はユースタス達をも消してしまうほどの強大な力を持った恐ろしい人物として語られ、短編集の終盤に突如登場する人物としては奇妙な印象を与える。しかしながら、ここで描写される、家の特徴、彼の子どもたちとの散歩といった目撃談などから、この人物はホーソーン自身であると考えるのが妥当であろう。この箇所の解釈について、今一度ラフラドの論考に尋ねたい。"Full of confidence that allows him to mock his accomplishments as motley and to transform himself into a god with complete power over his creations, Hawthorne ends *A Wonder Book*."（96）つまり彼女の解釈によれば、この冗談めかした作者自身の登場とは、作家としての自信に満ちたホーソーン自身の余裕の現れであるというわけである。ただのジョークと言ってしまえば身も蓋もない話ではあるが、前年 1850 年に投稿されたメルヴィルの批評「ホーソーンと苔」（"Hawthorne and His Mosses"）と比較することで、このいささか奇妙な人物の描写からもメルヴィルに対する言葉が読み取れそうである。

メルヴィルは、ホーソーンと出会い親密な言葉を交わしたその二週間後、*The Literary World* に同批評を投稿する。主に 1846 年に出版されたホーソーンの短編集『旧牧師館の苔』（Mosses from an Old Manse）に収録された作品群の批評と、作家としてのホー

ソーンに対する評価を記してある。概してホーソーンを礼讃する内容が目立つその中に、人々にとってのホーソーンの捉えられ方についてメルヴィルの考えが記されている箇所がある。以下がその一部分である。“Where Hawthorne is known, he seems to be deemed a pleasant writer, with a pleasant style, - a sequestered, harmless man, from whom any deep and weighty thing would hardly be anticipated … （242）”ここでメルヴィルは、重大で深遠な物事について考えない人々にとってホーソーンは、人畜無害な隠遁者であると見られていると語っているのであるが、本作最後に登場するホーソーン自身としての物静かな男の描写には、ここでのメルヴィルの記述に呼応する性質がある。以下が物静かな男の描写である。

> … Our neighbor in the red house is a harmless sort of person enough, for aught I know, as concerns the rest of world: but something whispers me that he has a terrible power over ourselves, extending to nothing short of annihilation （170）

つまりホーソーンは自身の著作のなかで自身を描き、つまり当然のことながら語り手たちの存在そのものをコントロールする人物として登場させるというある種のおふざけをやってのけながら、メルヴィルの彼に対する分析への同意を示しているのである。一見してとりとめもない冗談めいた人物描写の中に織り込まれたメルヴィルへの声が、そして彼ら二人の関係性の一面が読み取れるのである。

以上のようにホーソーンは大成した作家としての立場から、ギリシャ神話の青年冒険譚に自身もかつて抱いた精神的重圧、苦心といった要素を仔細に描き込むことで、後進の文士であったメルヴィルを叱咤激励する声を織り込んでいたのである。

結論

このように本作ワンダーブックが、ホーソーンが作家としての大成を経験した時期に書かれたことを考慮に入れ読み解くと、彼の作家としての立場の変化に伴い問題意識が、文学市場、あるいはそれに伴いより至近な作家への視線へと向けられていることがわかる。

自らの作家としての成功を誇示しながら、より影響力を持つようになった彼の筆で市場と読者を批判し、さらにはメルヴィルといったような後進の作家を激励するホーソーンの姿勢がみえる。序文にも記したように、ワンダーブックは長期間にわたり構想を練った大作というわけではないが、むしろだからこそ当時の彼の至近な問題意識を探る糸口としても重要な作品に位置づけられよう。

参考文献

Anthon, Charles. *A Classical Dictionary*. New York: Harper & Brothers, Publishers, 1872.

Delbanco, Andrew. *Melville, His World and Work*. ,2005.

Hawthorne, Nathaniel. “The Celestial Railroad”. *Mosses from the Old Manse*. Vol. 10 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel*. Ed. William Chavvat etal. Columbus: Ohio State University Press, 1965.

---. *The Scarlet Letter*. Vol. 1 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel*. Ed. William Chavvat et al. Columbus: Ohio State University Press, 1962.

---. *A Wonder Book for Girls and Boys*. Vol. 7 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel* Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State University Press, 1972.

Laffrado, Laura. *Hawthorn’s Literature for Children*. Georgia: University of Georgia Press, 1992.

Melville, Herman. “Hawthorne and his Mosses”. Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860: Volume Nine, Scholarly Edition. Ed. Harrison Hayford etal. 1980.

村田希巳子「ホーソーンと児童文学」『ホーソーンの軌跡—生誕 200 周年記念論集』開文社出版、2005 年、45 頁。

Passives in Early Interlanguage Grammar: A Preliminary Survey

Takayuki Kimura

1. Introduction

Passive constructions are one of well-studied constructions in syntactic theories. From the comparative perspective, Japanese and English exhibit interesting similarities and dissimilarities in terms of the distribution of Case Suppression and structural make-up. This study focuses on the interlanguage representation of elementary Japanese learners of English concerning passive constructions. Moreover, we will consider syntactic aspects in detail prior to the discussion on the interlanguage representation, which previous studies have ignored.

This paper is organized as follows: Section 2 provides detailed syntactic descriptions of passives and discusses cross-linguistic differences between Japanese and English. Based on the descriptions given in Section 2, Section 3 reviews how they have been studied in previous studies in L2 acquisition. In Section 4, experimental information is given. The results are discussed in Section 5, and Section 6 concludes the paper.

2. The Minimalist Analysis of the Syntactic Structures of Passives

This section introduces the syntactic structure of passives. Section 2.1 provides the general mechanism of passivization, and subsequent subsections describe constructional and cross-linguistic differences.

2.1 Syntactic derivation in Minimalist Program

The current theory of minimalist syntax (Chomsky, 1995; 2000; 2001; 2004; 2007; 2008) assumes a distinction between unvalued features (Pesetsky & Torrego, 2004; 2007) ([*u*F] for short) lacking a feature value in the lexicon and interpretable/valued features ([F] for short) (henceforth, 'valued feature')[1] Unvalued features are required to receive a Case feature value from the valued counterpart. For example, the Accusative Case feature on the transitive verb and

the Nominative Case feature on Tense Phrase (TP) are valued features, and the Case feature of nouns is the unvalued feature. Feature values are given via a basic syntactic operation which is dubbed as FEATURE VALUATION or AGREE. Unvalued features search for the cognate valued features and AGREE relation is established when unvalued features successfully locate the valued equivalent (cf. Bošković, 2007; Pesetsky & Torrego, 2001; 2007). AGREE takes place as in (1).

(1) [*u*F:_____] ... [F: *value*]
→[*u*F: <u>*value*</u>] ... [F: *value*]

I will show below that passive constructions exhibit a different pattern of AGREE from active sentences: i.e., the Case feature of the transitive verb does not AGREE with the direct object.

2.2 General Syntax of Passives

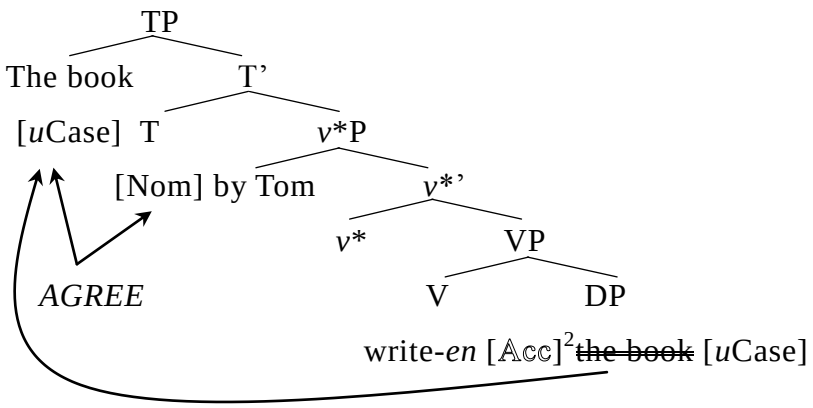
The study of passive constructions in generative grammar theory has greatly developed from Chomsky (1981) onwards. Subsequent influential studies which are dependent on Chomsky's intuition generalize passivization as follows (e.g., Jaeggli, 1986; Baker, 1988; Baker, Johnson & Roberts, 1989).

(2) Generalization of Passivization
The passive morpheme *-en* absorbs Accusative Case.

Generalization refers to the process which is generally called *Case Absorption*: Accusative Case of the transitive verb is absorbed by the passive morpheme *–en* without establishing an AGREE relation with a direct object. Following (2), passive sentences like (3) are derived as shown in the tree diagram represented in (4).

(3) The book was written by Tom.

(4)



Note: *v** = transitive little verb

All noun phrases (or determiner phrases DP) have the unvalued Case feature which must receive a value before Spell-Out. In (4), however, the passivized transitive verb 'written' is unable to value a Case feature to the direct object as a result of Case Absorption[3]. Consequently, the direct object DP moves to TP to acquire a Case feature value. After the unvalued Case feature of DP is assigned a feature value, derivation converges. As for the transitive passive (hereafter, *Direct Passive*), the generalization of passivization offers the elegant explanation. However, it is too limited to cover a wide range of passive constructions. Consider the following example.

(5) I was talked to by a foreigner.

This sentence is an example of Pseudo-Passive which is very common in English. Here, the Case which is subject to Absorption is not Accusative but Oblique (cf. Abels, 2003; Truswell, 2009), and hence it is beyond the scope of the generalization. Then, we are simply required to eliminate the word 'Accusative' in the generalization. In theory, any Case features are possibly absorbed unless the resulting derivation invokes violation of language-specific rules or universal principles (such as the Phase Impenetrability Condition or Full Interpretation). Besides, the word "Absorption" is not an appropriate term. Authors such as Baker et al. (1989) assumes that *-en* is an 'argument' which 'absorbs' and possesses a

Case feature and θ-role like as nouns. If we do not adopt such a claim but merely assume that Case is suppressed, it is more appropriate to call the process *Case Suppression*. Thus, I will use this term throughout this paper, instead of Case Absorption[4].

2.3 Constructional and Cross-linguistic Variation

This section describes variation of constructions within and between the languages on the basis of Case Suppression approach explained above.

2.3.1 Direct and Ditransitive Passives

As discussed in the previous section, the Direct Passive is derived from active transitive sentences via Suppression of Accusative Case. Japanese has a corresponding construction where NP-movement is present (Kuroda, 1979; among others). The object moves to pick up Nominative Case as a consequence of Accusative Case Suppression. Note that –(*r*)*are* is a passive marker in this language.

(6) Taro-ga Hanako-ni tatak-are-ta[5].
Taro-Nom Hanako-by hit-Pass-Past
'Taro was hit by Hanako.

Passivization of ditransitive verbs such as 'give', 'tell', 'send' and so forth exhibits the similar Suppression pattern to Direct Passive: i.e., Accusative Case is suppressed. Ditransitive verbs have small-clause like projections called ApplicativeP[6] (ApplP) under vP (Pylkkänen, 2002). Because of the presence of ApplP where Dative Case is supplied, the direct object can remain in situ if Accusative Case of the verb is suppressed.

(7) a. Bill gave Mary a book.
b. Mary was given a book by Bill.
[Mary ... [$_{v}$ give $_{\cancel{[ACC]}}$ [$_{ApplP}$ ~~Mary~~ $_{Appl\ [DAT]}$ a book]]]

The existence of double object construction in Japanese has been discussed over years. Since Hoji (1985), it has been assumed that Japanese lacks double object construction, and the surface word order resembling double object construction is derived via scrambling. However, this view has been challenged by various researchers (e.g., Kishimoto, 2001; Miyagawa & Tsujioka, 2004). Before looking at their arguments, let us introduce the test they employed. See below (cited from Miyagawa & Tsujioka, 2004: 7).

(8) a. Taroo-ga mati-o futa-tu otozure-ta.
Taroo-Nom town-Acc 2-CL visit-Past
'Taro visited two towns.'
b. *Hito-ga mati-kara futa-tu kita.
people town-from 2-CL come-Passt
'People came from two towns.'

In Japanese, numeral quantifiers such as *futa-tu* (2-CL) can float off its host in the case that the host is DP (or NP) (Shibatani, 1978). In the example (8a) above, the numeral quantifier can float off its host (*mati*(*-o*)). This suggests that the host *mati-o* is DP. On the other hand, (8b) resists numeral quantifier floating. Hence, we can know that *mati-kara* (from town) is not DP, rather PP. Based on this, Miyagawa and Tsujioka (2004) tests whether Japanese has the double object construction.

(9) a. Taroo-ga gakusei-ni futa-ri nimotu-o okut-ta.
Taro-Nom student-Dat 2-CL package-Acc send-Past
'Taro sent two students a package.'
b. *Daitooryoo-ga kokkyo-ni futa-tu heitai-o okut-ta.
president-Nom border-to 2-CL soldier-Acc send-Past
'The President sent two borders soldiers.'

(Miyagawa & Tsujioka, 2004: 7)

The difference in grammaticality shows that there are two types of *ni*, that is,

Dative Case marker and prepositional, exist in Japanese ditransitive construction. Consequently, Japanese has the double object construction in addition to the dative construction like English. Following this, ditransitive verbs can be passivized as expected (10).

(10) Taro-ga Hanako-ni nimotu-o okur-are-ta.
Taro-Nom Hanako-by package-Acc send-Pass-Past
'Taro was sent a package by Hanako.'

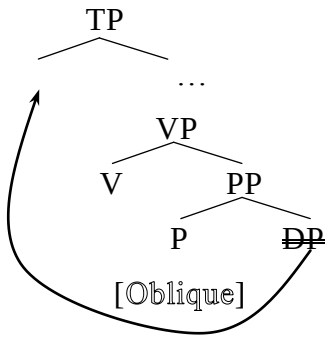
2.3.2 Pseudo Passive

Pseudo Passive or P-stranding under A-movement (Abels, 2003) is very common in English.

(11) Mary was laughed at *t* by Tom.

Syntactic analysis of passivization of PP elements is a long-standing dispute over years. The most influential claim on V + PP construction in GB theory is the Reanalysis approach (Hornstein & Weinberg, 1981). Under this approach, V and P are linked together to form a complex verb V*. This analysis enables us to explain the passivization of PP very simply: i.e., just absorbing (suppressing) Case of the verb[7]. However, this approach has been exposed to criticism by many researchers (e.g., Baltin & Postal, 1996). Alternatively, on the Case Suppression account assumed so far (see also Abels, 2003), the phenomenon can be accounted for in a unified fashion: i.e., Oblique Case is absorbed, and the complement of the preposition is promoted to the subject.

(12)



The corresponding construction is not allowed in Japanese (e.g., Kageyama, 1996).

(13) *Taro-wa gaikokujin-ni ni hanasikake-rare-ta.
Taro-Top foreigner-by to talk-Pass-Past
'Taro was talked to by a foreigner.'

I will not discuss detailed investigations about the availability of Pseudo Passive, since it requires much theoretical background. To argue it simply, the availability of Pseudo Passive depends on the status or structure of Prepositional Phrases (Abels, 2003; Bošković, 2014). Japanese has a so simple PP structure, therefore, Case Suppression and movement of a noun out of PP invoke a general ban on movement. In English, on the other hand, PP structures are more complex, and Case Suppression and movement of a noun out of PP do not violate any principle (See footnote 8 for details). To sum up, Pseudo Passive is derived via Case Suppression but it does not work in languages where it invokes violation of a principle or rule. Therefore, English has this construction, but Japanese lacks it.

2.3.3 Possessive Passive

While English disallows the Possessive Passive, Japanese permits it, as given in (14a; b), respectively.

(14) a. *Tom was stolen (his) book yesterday.
b. Tom-wa kinou (kare-no) hon-o nusm-are-ta.
Tom-Top yesterday he-Gen book-Acc steal-Pass-Past

Passive in Japanese is controversial. Some syntacticians assume that the possessor subject undergoes raising as a result of Case-Suppression (e.g., Kubo, 1992; Hasegawa, 2007), whilst others believe that there occurs no movement (e.g., Fukuda, 2006; see also Pylkkänen, 2000). I offer some evidence in favor of the former view.

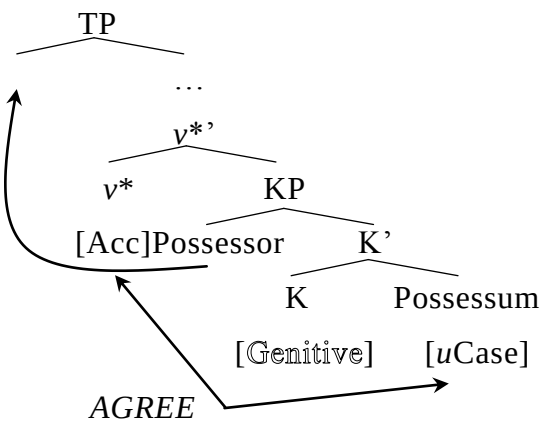
(15) Ken-wa jitensha-o kowasi-ta.
Ken-Top bicycle-Acc break-Past
'(Lit) Ken broke bicycle.'

The natural interpretation of this sentence does not contain a possession relation between the subject 'Ken' and the object 'bicycle'. The bicycle is someone else's. Consider next the following example of Possessive Passive.

(16) Ken-wa jitensha-o kowas-are-ta.
Ken-Top bicycle-Acc break-Pass-Past
'(Lit) Ken was broken his bicycle.'

Interestingly, there is a possession relation between the subject 'Ken' and the object 'bicycle' in this sentence. The fact that the possession relation is established only in Possessive Passive suggests that the subject undergoes the raising operation as a result of Case-Suppression. We have more empirical evidence for possessor raising in addition to the above. We will discuss this issue later, based on comparisons with Indirect Passives. In the following section, I will clarify the difference between Possessive Passive and Indirect Passive, and argue that Possessive Passive is derived via Case-Suppression. The derivation of Possessive Passive via Case-Suppression is given below. Since Accusative Case of the verb is not suppressed, it is retained.

(17)



2.3.4 Indirect Passives

The most distinctive construction of Japanese passives is Indirect Passive which is typologically very rare, but this construction is impossible in English, as shown in (18).

(18) a. Tom-ga jyosei-ni mado-o ake-rare-ta.
b. *Tom was opened a window by a woman.

Interestingly, intransitive verbs can be passivized and transitive verbs can be passivized without Case Suppression in Japanese Indirect Passives. This construction has been studied actively by various researchers (e.g., Kuno, 1983; Kuroda, 1979; among others) and revealed that this passive introduces one additional argument which receives the θ–role AFFECTEE. Consider the following examples.

(19) a. Taro-wa shoujyo-ni nak-are-ta. [intransitive]
Taro-Top girl-by cry-Pass-Past
'(Lit.) Taro was cried by a girl.'
b. Taro-wa yonaka-ni rinjin-ni piano-o hik-are-ta. [transitive]
Taro-Top midnight-at neighbor-by piano-Acc play-Pass-Past
'(Lit.) Taro was played the piano by a neighbor at midnight.'

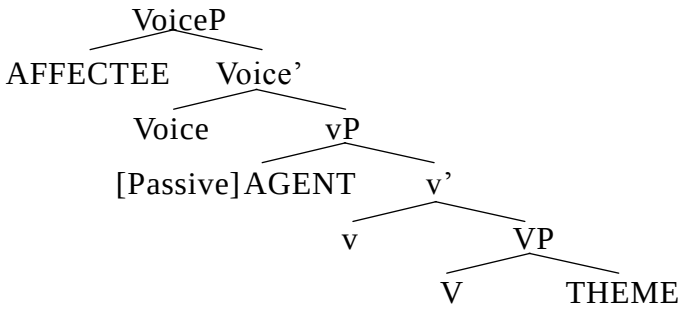
In both cases, the subjects 'Taro' are AFFECTEE who are affected by the event described in the following phrases. Despite the fact that the verbs are followed by the suffix *-en*, the verb phrases are analogous to actives. Therefore, their meaning is like as (20b).

(20) a. Taro-wa yonaka-ni rinjin-ni piano-o hik-are-ta.
'Taro was played the piano by a neighbor at mid night.'
b. [Taro AFFECTED [$_{VP}$ a neighbor played the piano at midnight]]

This semantic representation is considered to be derived from the VoiceP structure

as shown below.

(21)



The structure captures the fact that Indirect Passive constructions share the same VP-layer structure as actives. Moreover, the mechanism where Voice-head above vP introduces a new adversative argument is compatible with Kuno's (1983) observation that the AFFECTEE himself/herself is not directly involved in the event.

Some articles (from classical to up-to-date ones) argue against the independent Indirect Passive analysis, and instead, propose a unified account (Howard & Niyekawa-Howard, 1976; Ishizuka, 2007; 2010; Kuno, 1983, among others). However, we have some compelling empirical evidence supporting the existence of Indirect Passives which do not fall under Case-Suppression class passives. First, the Voice-head of the Indirect Passive construction assigns Dative Case feature (spelled out as *ni*) to the external argument (actor) of vP. The Floating Numeral Quantifier test introduced earlier is useful here. Compare the following sentences.

(22) a. San-nin-no gakusei-ga Taro-o hihan sita. *Active*
3-CL-modifier[9] student-Nom Taro-Acc criticizedid
'Three students criticized Taro.'
b. *Taro-wa gakusei-*ni* san-ninhihans-are-ta. *Case-Suppression Passive*
Taro-Topstudent-by 3-CL criticize-Pass-Past
'Taro was criticized by three students.'

(23) Taro-wa musuko-*ni* san-nin sin-are-ta. *Indirect Passive*
Taro-Topson-Dat 3-CL die-Pass-Past
'(Lit.) Taro was died by three sons.'

The im/possibility of Floating Numeral Quantifiers clearly suggests that *ni* in Case-Suppressing Passives and that in Indirect Passives are distinct. The ability of Indirect Passives to assign Dative Case supports the existence of the high VoiceP, the locus of Dative Case assignment (Fukuda, 2006). Case-Suppressing Passives lack such high, Case assigning VoiceP. Another piece of evidence for the distinction comes from the behavior of reflexives *zibun* (*-self*) (Shibatani, 1990). The distinction between the Possessive Passive and (transitive) Indirect Passives are still controversial. They resemble in surface structures and both marks adversative meaning. However, the interpretation of the reflexive is sharply different. Compare the followings.

(24) a. *Possessive Passive*
Hanako$_i$-wa Taro$_j$ -ni *zibun*$_{i/*j}$-no heya-de kami-o kir-are-ta.
Hanako-Top Taro-by reflexive-Gen room-in hair-Acc cut-Pass-Past
'Hanako was cut her hair in her room by Taro.'

b. *Indirect Passive*
Hanako$_i$-wa Taro$_j$-ni *zibun*$_{i/j}$-no heya-de piano-o hik-are-ta.
Hanako-Top Taro-by reflexive-Gen room-in hair-Acc cut-Pass-Past
'Hanako was played the piano in his/her room by Taro.'

In (24a), only one referent is available, whereas in (24b), two referents are possible. This suggests that the Possessive Passive is mono-clausal on one hand, and Indirect Passives are bi-clausal on the other hand. Therefore, the existence of high VoiceP in Indirect Passives is attested.

Based on the empirical discussion above, we distinguish them. For the sake of the clear distinction, I will call *low passives* when referring to the group of Case -Suppressing passives (Passive element is within low VP). By contrast, I will call Indirect Passives *high passives* where Case is not suppressed, as opposed to low

passives for convenience (Voice is merged at a higher place than vP).

Before concluding this section, let us summarize the distribution of passive constructions in English and Japanese.

Table 1. Summary of variation between English and Japanese.

	Direct	*Ditransi-tive*	*Pseudo*	*Possess-ive*	*Indir (intr)*	*Indir (tr)*
English	✓	✓	✓	*	*	*
Japanese	✓	✓	*	✓	✓	✓

3. Previous Studies

This section presents some previous studies. Izumi and Lakshmanan (1998) is a representative research exploring Indirect Passives in interlanguage grammar of Japanese speaking learners of English (JLEs). They conducted a Grammaticality Judgment Task (GJT), a Translation Task (TT), and written picture description, and revealed that JLEs overused Indirect Passives.

Inagaki et al. (2009), pointing out the small scale of Izumi and Lakshmanan's (1998) study, conducted a GJT and TT with a larger group of participants. Their experiment contained the following types: actives, direct passives, intransitive indirect passives, and transitive indirect passives. Based on the results, they propose developmental stages as follows.

Stage 1: Both [intransitive & transitive indirect passives] are equally overgenerated.
Stage 2: Intransitive indirect passives start to decrease.
Stage 3: Transitive indirect passives start to decrease.
Stage 4: Both are unlearned.

Although not explicitly mentioned in the paper, their proposal implies the effect of transitivity as for Stages 2 and 3. Moreover, this effect also seems present

even in Stage 1 (and presumably 4 as well). Thus, Intransitive Indirect Passive is easier than Transitive one at all stages. However, it seems to me that their results are far from conclusive for both theoretical and experimental reasons. For one thing, they treat sentences such as *I was eaten my cake* as Indirect Passive. However, as we saw earlier, Indirect Passives show very different characteristics from Possessive Passive. Therefore, it is not appropriate, from the theoretical perspective, to treat such sentences as Indirect Passive. Moreover, many of the stimuli used in their tasks should not be categorized into the same type. For example, Intransitive Indirect Passive contains verb phrases such as *fallen by rain*, *cried*, and *sat in front of*. *Fallen by rain* is a {unaccusative + inanimate noun} phrase, *cried* is an {unaccusative} verb which requires an animate noun, and *sat in front of* is a {V + PP} phrase. Thus, all of the phrases classified into one type are syntactically and/or semantically different. More crucial problem lies in the way they presented the stimuli. They showed Active, Direct Passive, and Indirect Passive sentences to participants simultaneously. This method might cause redundant task effects because it allows learners to compare the sentences using meta-linguistic knowledge and so on.

Indeed, Ando (2009) reported different results from Inagaki et al. (2009). He presented test items individually, not simultaneously, in his GJT. He found no significant difference between Intransitive and Transitive Indirect Passives.

If transitivity effect which, Inagaki et al. believe, was found in their study really exists, we should ask why such effect was present. Conversely, if it is lost as a result of sophistication of materials and syntactic reconsiderations, the story will be radically different from previous studies'.

4. Experiment

This experiment primarily aims to reveal interlanguage grammar concerning passive constructions in elementary Japanese learners of English (JLEs).

4.1 Participants

Participants in this study are 27 JLEs whose age is 18 or 19. They study

psychology at Bunkyo University. They took the Oxford Quick Placement Test and all of them were classified as 'Elementary learners'.

4.2 Task

I conducted the Acceptability Judgment Task. Participants were asked to judge test sentences on 4 scales, as shown below. They marked 'I don't know' when they could not judge the sentence. I used this method (i.e., 4 scales with the 'I don't know' option) to avoid the mid value often labelled as 'cannot judge' or 'I don't know'. The judgment 'I don't know' is, I believe, radically different from the others, since participants mark other scales 1 to 4 under the premise that they 'can' judge the sentence.

1	2	3	4	・I don't know
incorrect	probably incorrect	probably correct	correct	

4.3 Material

The experiment contains seven experimental types: active (there are three subtypes: *Transitive*, *Ditransitive*, and *V* (*intransitive*) +*PP*); three grammatical passives which correspond to active subtypes (i.e., *Direct Passive, Ditransitive Passive, and Pseudo-Passive*); and three ungrammatical passives which do not have active counterparts (i.e., *Intransitive Indirect Passive, Transitive Indirect Passive,* and *Possessive Passive*). All sentences are controlled for structures, animacy, and word familiarity. As shown below, passive sentences contain 'subject +passivized verb phrase (+object) +by phrase + adjuncts (PP/AP/AdvP)'. Word familiarity is based on Yokokawa (2006) where familiarity is defined in scales (1-6). I selected words whose familiarity scales are above 4.

(25) Examples of grammatical types

a. Active

My parents scolded me last night.

b. Direct Passive

I was scolded by my parents last night.

c. Ditransitive Passive

I was told a lie by the teacher in class.

d. Pseudo Passive

I was laughed at by students in class.

(26) Examples of ungrammatical types

a. Transitive Indirect Passive

I was played the guitar by a neighbor at midnight.

b. Intransitive Indirect Passive

I was cried by a girl in the park.

c. Possessive Passive

I was stolen my bag at the station

These test sentences are followed by short contexts where adversative or other meanings are expressed. Contexts which convey adversative meaning are required for indirect passives in many cases (e.g., Ishizuka, 2010), since the subject is given the Affectee θ-role. An example is given in (27).

(27) *Context*: Tom looked upset. So I asked him what happened. He said to me,
Test sentence: "I was stolen my bag by a man at the station."

4.4 Data Analysis

I selected appropriate data prior to data analysis: 1) all data marked for 'I don't know' were eliminated, 2) data for low passives (i.e., Direct, Ditransitive, and Pseudo passives) are eliminated from further analysis in the case their active counterparts were failed to accept. After data selection, I first calculated the mean responses to stimuli (i.e., 1 to 4), and then, the acceptance rate in percent. 1 'incorrect' and 2 'probably incorrect' are counted as 'not accepted' and 3 'correct' and 4 'probably correct' are counted as 'accepted' when I calculated the acceptance rate.

4.5 Results

Figure 1 below represents the results for Active sentences and grammatical passives. It is clear from the figure that V+PP passive (i.e. Pseudo Passive) was less accepted. The others were generally accepted correctly.

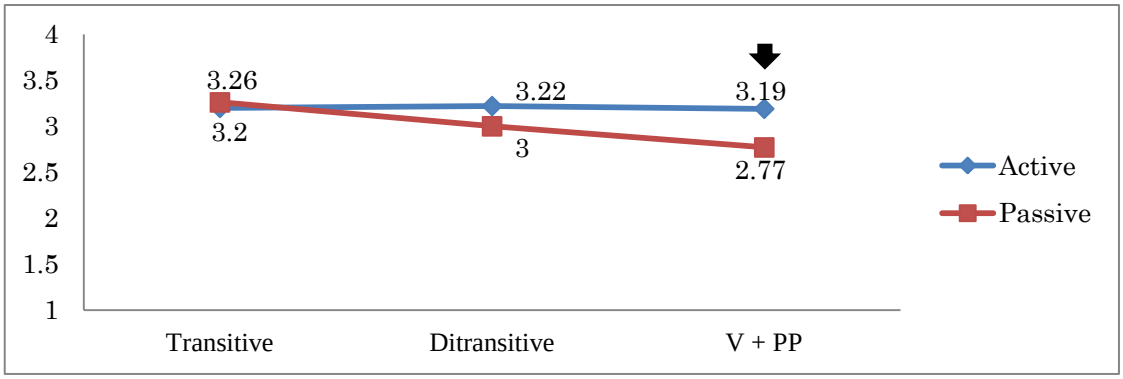


Figure 1. Mean scores of grammatical types in AJT.

Figure 2 below shows mean scores of ungrammatical types. Scores for Indirect Passives are relatively low. However, the score for Possessive Passive is relatively high. Moreover, we cannot see significant differences between intransitive and transitive indirect passives.

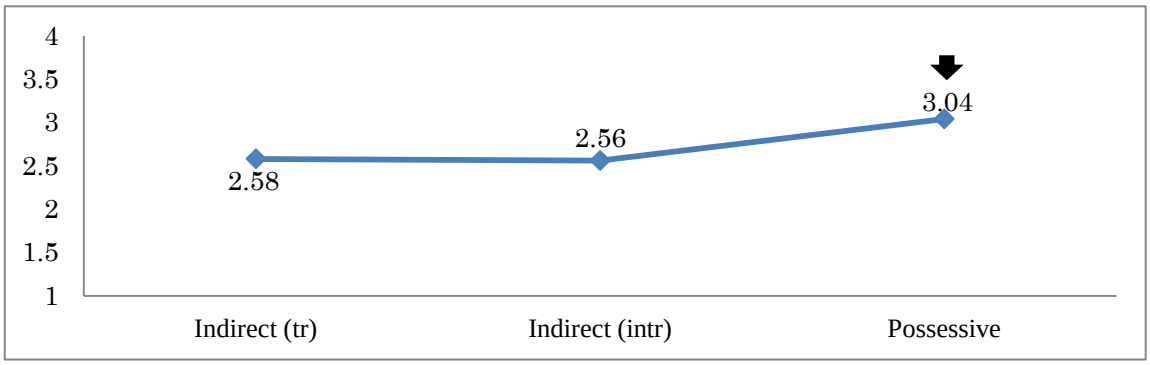


Figure 2. Mean scores of ungrammatical types in AJT.

Figures 3 and 4 show mean acceptance rate for grammatical and ungrammatical sentences, respectively.

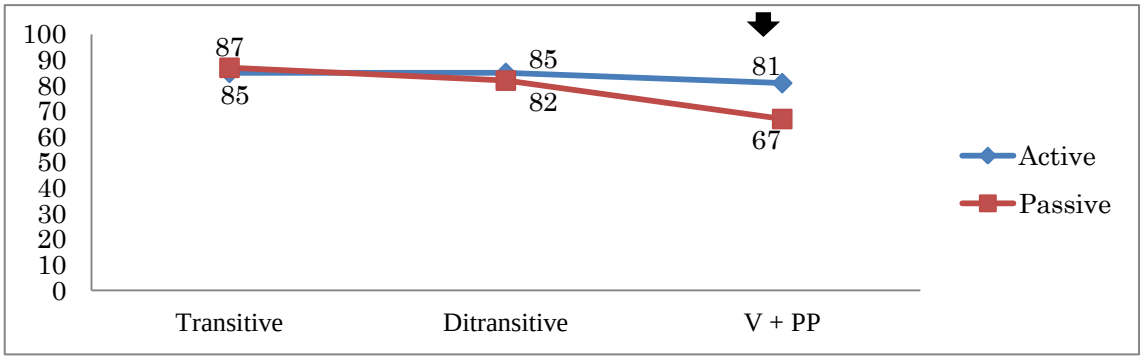


Figure 3. Mean acceptance rate (%) for grammatical sentences.

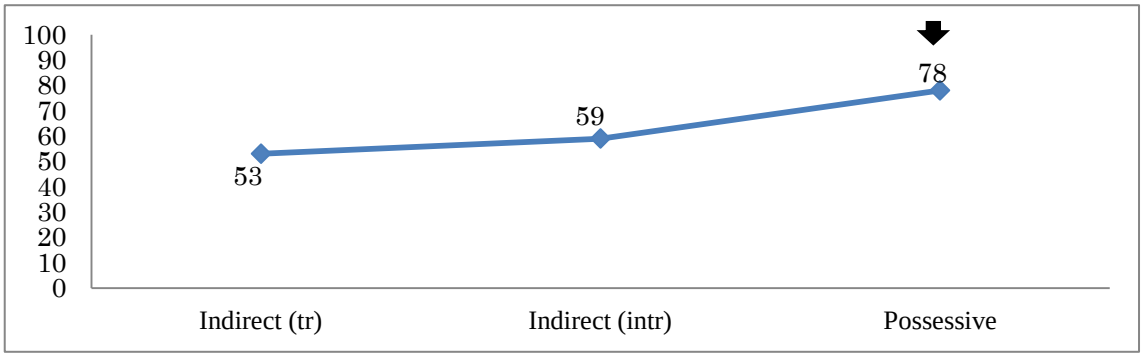


Figure 4. Mean acceptance rate (%) for ungrammatical passive sentences.

Here is the summary of results: 1) JLEs generally accepted Active sentences correctly; 2) They had difficulty in accepting Pseudo Passive and rejecting Possessive Passive; 3) They resisted accepting Indirect Passives; and 4) There was little difference in responses for intransitive and transitive Indirect Passives. Table 2 below summarizes the comparison of the distribution of Case-Suppression.

Table 2. Comparison of the distribution of Case-Suppression.

	Direct	*Ditran-sitive*	*Pseudo*	*Posse-ssive*	*Indir (intr)*	*Indir (tr)*
Suppressed Case	Acc	Acc	Oblique	Gen	N/A	N/A
English (L2)	✓	✓	✓	*	*	*
Interlanguage	✓	✓	*	✓	*	*
Japanese (L1)	✓	✓	*	✓	✓	✓

5. Discussion

The results did not show significant differences between intransitive and transitive Indirect Passives. This suggests that transitivity effect is not involved in delearning these constructions. Participants clearly distinguished high passives (over 80% of acceptance for grammatical Direct and Ditransitive Passives) from low passives (around 50% of acceptance for ungrammatical constructions). This sharp distinction is interesting when we consider the following comparison.

(28)a. Tom was given a book by Mary yesterday. (Ditransitive Passive)
b. *Tom was sung a song by students at midnight. (Transitive Indirect Passive)

These sentences share the very similar appearance. Both have the subject, verb, and direct object. However, as discussed earlier, they are made up in radical different ways: Low Ditransitive Passive in (28a) is derived by Accusative Case Suppression; and High Indirect Passive is built by the introduction of the passive element *-en* or *–(r)are*. Given this, the fact that L2 learners made a distinction between them suggests that interlanguage of Japanese learners of English does not obey 'linear' laws, but 'structural' ones. In other words, participants rejected sentences such as (28b) on the basis of the assumption that high passives where the passive element *-en* is located above vP (29) is not grammatical in English and/or that one Case feature must be suppressed as a result of passivization. Both assumptions are on the syntactic, structure-building, basis.

(29) *[Voice *–en* $_{[\text{Case: Dat}]}$[vP [VP]]]

What actually causes difficulty in delearning ungrammatical passives is the acquisition or reconstruction of knowledge about the distribution of Case Suppression. Results summarized in Table 2 showed that JLEs failed to accept Psuedo Passive where the Oblique Case is suppressed, and incorrectly accepted Possessive Passive where the Genitive Case is suppressed. This suggests that their knowledge on the distribution of Case-Suppression in English is incomplete and is

based on their L1. In the Minimalist Program style derivation, the structure is built up by merging and AGREEing lexical items and features with the existing structure. Thus, merge of lexical items or features is the essential starting point of derivation. As Lardiere (2000; 2008) points out, it is problematic for L2 learners when featural configurations are divergent in L1 and L2. It is exactly the case as the present study shows. JLEs whose L1 allows Case Suppression to operate on Genitive Case faces difficulty in delearning this option. Besides, they also have problems with tolerating Suppression of Oblique Case presumably due to L1 influence. Wakabayashi's (1997; 2002; 2009) proposal might also be relevant here. Wakabayashi shed light on the construction of the numeration in L2 and suggests that numerating functional items is problematic. Numeration (later replaced with Lexical Array in Chomsky (2000)[10]) is a theoretical construct introduced by Chomsky (1995) where lexical items and (formal) features are numerated and count as inputs to syntax. Once items are numerated, they are sent to syntax. Thus, when a construction in L1 lacks a feature F^X but the equivalent construction in L2 requires it, L2ers is expected to fail to numerate F^X if L1 effects work. Conversely, if a construction in L1 requires F^X but the equivalent in L2 lacks it, L2ers would over-numerate it. This seems exactly what was happening in our participants' interlanguage. Hence, L1 transfer occurs in constructing knowledge of distribution of Case-Suppression and/or numerating the abstract Case suppressor.

6. Conclusion

This preliminary survey explores interlanguage grammar of low proficient Japanese learners of English concerning passive constructions. Results suggest that L1 effects appear in reconstructing knowledge of the distribution of Case feature suppression.

I will need to collect data from native speakers of English to strengthen the validity of the task and from more advanced second language learners to explore developmental stages in future study.

Acknowledgment

This paper is presented at 33rd Second Language Research Forum (SLRF) held at University of South Carolina. I would like to thank the audience for their helpful comments. I appreciate Mayumi Shibuya for recruiting participants and John Matthews for checking my experiment. Thanks also go to Tomohiro Hokari, Shigenori Wakabayashi and two reviewers for insightful comments and feedback. All remaining errors and shortages are of course my own.

Notes

[1] Interpretable/Uninterpretable features are the common term for valued/unvalued features since Chomsky (2001). However, Pesetsky and Torrego (2007) convincingly argue that (un)-interpretability and specifications of the values are not necessarily connected. For example, Case features of nouns are neither interpretable nor valued. On the other hand, the Tense feature of verbs is interpretable but unvalued.

[2] Throughout the paper, I will use the following abbreviations: Acc = Accusative Case; CL = classifier; DAT = Dative Case; Gen = Genitive Case; Nom = Nominative Case; Pass = Passive marker; Past = Past tense marker; Top = Topic marker.

[3] Strictly speaking, Accusative Case on the lexical V originates from the functional *v**. See Chomsky (2008) for the details of the mechanism of Feature Inheritance.

[4] I do not adopt here a recently influential approach to the syntax of passives called 'Smuggling' proposed by Collins (2005) due to theoretical and empirical problems. One is that smuggling of VP (phrasal VP-movement) leaves the unvalued φ-features of little *v* remain unvalued, causing derivation to crash. Secondly, it cannot explain the expletive *there* passive like (1) below.

(1) a. There was a man killed.
b. *There was killed a man.

Under the smuggling approach, VP is smuggled and moves to a higher position (VoiceP in Collins' mechanism). In common passives, the internal argument (typically, direct object)

further moves to the subject position (TP). However, in the case above, the expletive *there* is inserted to the subject position, instead of an internal argument. Therefore, if we assume Collins' smuggling approach, the internal argument 'a man' cannot move to the subject position, nor can it precede the passivised verb 'killed'. If my argument is on the right track, it follows that Collins' smuggling approach cannot derive the expletive passive.

[5] There is little consensus about two *by*-phrases *–ni* and *–ni yotte* in Japanese. Kuroda (1979) and Hoshi (1991; 1994; 1999) attribute these differences to those of derivational processes i.e., *-ni yotte* passives involve NP-movement but *–ni* passives do not. However, there are many exceptions to this generalization. See Kuno (1983) and Mihara & Hiraiwa (2006).

[6] ApplP stands for 'Applicative Phrase' which is responsible for possession, benefaction, and so forth. See Pylkkänen (2002) for details.

[7] The significant differences between Absorption and Case Suppression lie in the width of distribution of Case disappearance (Suppression approach has wider distribution) and whether the process absorbs/suppresses argumenthood (or θ-roles).

[8] Abels (2003) associates the impossibility of Pseudo Passive with the strength of phases (i.e., whether a category in question can or cannot be the spell-out domain). While in languages which allow Pseudo Passive, P is non-phasal, in languages which disallow it, P is phasal. However, Drummond, Hornstein, and Lasnik (2010) provide interesting evidence which shows that English P is also phasal. Based on Drummond, Hornstein, and Lasnik (2010), Bošković (2014) attributes the (im)possibility to richness of PP structures in these languages. Bošković assumes that the highest projections of lexical categories are phases, and movement must take place across a phrase (XP) (Bošković, 1994). Movement within a phrase i.e., Complement to Spec violates a principle called anti-locality. Given these assumptions, rich PP languages like English allow movement of DP from PP_1-Comp to PP_2-Spec without violating anti-locality. On the other hand, poor PP languages like Japanese disallow such movement because movement from PP_1-Comp to PP_1-Spec invokes anti-locality violation. I will not pursue this matter in the article. The point here is that Case Suppression is barred when application of it ends in violation of principles/rules due to the specific structure in a language.

[9] Indirect passive: There is a dispute on whether this *no* is a Genitive Case marker (Saito, Lin, and Murasugi, 2008) or not (Kitagawa & Ross, 1982; Watanabe, 2010). As Watanabe points out, classifiers cannot be Case-marked, hence, this *no* is not a Case marker, but a linker. This

paper follows Watanabe's (2010) idea.

[10] Lexical Array and Numeration are not so distinct. However, Numeration counts how many times items will be used (e.g., [the: 2] means that *the* must be used twice). All lexical items and features must be exhausted to converge. On the other hand, Lexical Array has no such counting mechanism. Since this distinction does not matter in our story, we ignore the details. But note that I do not assume such a counting mechanism when I mention them.

References

Abels, K. (2003). *Successive Cyclicity, Anti-locality, and Adposition Stranding*. PhD dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Ando, N. (2009). *Nihonzin Eigogakushusha-ni Yoru Kansetu-Ukemibun-no Kajo Siyo* [Overgeneration of Indirect Passives by Japanese-speaking Learners of English]. BA thesis, Chuo University.

Baker, M. (1988). *Incorporation.* Chicago: Chicago University Press.

Baker, M., Johnson, K., and I Roberts. (1989). Passive arguments raised. *Linguistic Inquiry* 20: 219–251.

Baltin, M and P.M. Postal (1996). More on Reanalysis Hypotheses. *Linguistic Inquiry* 27, 127–145.

Bošković, ž. (1994). D-structure, theta-criterion, and movement into theta-positions. *Linguistic Analysis* 24, 247-286.

Bošković, ž. (2007). On the locality and motivation of Move and Agree: An even more minimal theory. *Linguistic Inquiry* 38: 589-644.

Bošković, ž. (2014). Now I'm a phase, now I'm not a phase: On the variability of phases with extraction and ellipsis. *Linguistic Inquiry* 45: 27-89.

Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program.* Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, N. (2000). Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. R. Martin, D. Michaels & J. Uriagereka, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, N. (2001). Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. M. Kenstowicz, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, N. (2004). Beyond Explanatory Adequacy. In A. Belletti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, 104–131, Oxford: Oxford University Press.

Chomsky, N. (2007). Approaching UG from below. In Sauerland, U., & Gartner (eds.). *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics.* Mouton de Gruyter.

Chomsky, N. (2008). On phases. In *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. R. Freidin, C. Otero & M. Zubizarreta, 133–166. Cambridge, MA: MIT Press.

Collins, C. (2005). A smuggling approach to the passive in English. *Syntax* 8:81–120.

Drummond, A., Hornstein, N, and H. Lasnik (2010) A Puzzle about P-Stranding and a Possible Solution. *Linguistic Inquiry* 41, 689–692.

Fukuda, S. (2006). Japanese passives, external arguements, and structural case. *UCSD Linguistics Papers*, 2:86–133.

Hasegawa, N. (2007). Nihongo no ukemibun-to little v no sosei. *Scientific Approaches to Language*, *6*, 13–38. Center for Language Sciences: Kanda University of International Studies.

Hoji, H. (1985). *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*. PhD dissertation, University of Washington.

Hornstein, N & A. Weinberg. (1981). Case Theory and Preposition Stranding.*Linguistic Inquiry* 12, 55–91.

Hoshi, H. (1991). The Generalized Projection Principle and Its Implications for Passive Constructions. *Journal of Japanese Linguistics* 13, 53–89.

Hoshi, H. (1994). Theta-Role Assignment, Passivization, and Excorporation. *Journal of East Asian Linguistics* 3, 147–178.

Hoshi, H. (1999). Passives. In Tsujimura, N. (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, 191–235. Blackwell, Malden, MA.

Howard, I. and A.M. Niyekawa-Howard. (1976). Passivization. *Syntax and Semantics* 5:201–237.

Inagaki, S., Katsurahara, M., Yamashita, G., Kusrini, D., & M. Dohi (2009).Why can't you "be eaten your cake?: overgeneralizations of the passive by

Japanese EFL learners at different proficiency levels. Paper presented at the *9th Annual Conference of Japan Second Language Association.*

Ishizuka, T. (2007). Japanese passivization revisited: promotion of possessors. *MIT Working Papers in Linguistics*, *55*, 85–96.

Ishizuka, T. (2010). Toward a Unified Analysis of Passives in Japanese: A Cartographic Minimalist Approach. PhD dissertation. UCLA.

Izumi, S & U. Lakshmanan. (1998). Learnability, negative evidence and the L2 acquisition of the English passive. *Second Language Research*, *14*, 62-101.

Jaeggli, O. (1986). Passive. *Linguistic Inquiry.* 17:587–622.

Kageyama, T. (1996). *Doshi Imiron.* [Verb Semantics]. Tokyo: Kuroshio.

Kubo, M. (1992). Japanese passives. *Working Papers of the Department of Language and Cultures*, vol. 23, 231-301. University of Hokkaido.

Kuno, S. (1983). *Shin Nihon Bunpo Kenkyu.* [New Study of Japanese Grammar]. Tokyo: Taishukan.

Kuroda, S-Y. (1979). On Japanese passives. In G.Bedell, E. Kobayashi, and M, Muraki (eds.), *Exploration in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, Kenkyusha: Tokyo. (Reprinted in In S.Y. Kuroda (1992) *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*, 181-221, Kluwer: Dordrecht.)

Kishimoto, H. (2001). The Role of Lexical Meanings in Argument Encoding: Double Object Verbs in Japanese. *Gengo Kenkyu* [Language Research] 120, 35–65.

Kitagawa, C and C. N. G. Ross. (1982). Prenominal modification in Chinese and Japanese. *Linguistic Analysis* 9: 19–53.

Lardiere, D. (2000). *M*apping features to forms in second language acquisition . In Archibald, J. (ed), *Second language acquisition and linguistic theory.* Malden, MA: Blackwell 102-29.

Lardiere, D. (2008). Feature assembly in second language acquisition. In Liceras, J.M., Zobl, H. and Goodluck, H. (eds.) *The role of formal features in second language acquisition.* New York: Lawrence Erlbaum Associates, 106-40.

Mihara, K & K. Hiraiwa. (2006). *Shin Nihongo no toogo kouzou* [The Syntactic Structures of Japanese]. Tokyo: Shohakusha.

Miyagawa, S. & T. Tsujioka. (2004). Argument structure and ditransitive verbs in

Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 13, 1–38.

Pesetsky, D & E. Torrego. (2004). Tense, case, and the nature of syntactic categories. In Jacqueline Guéron & Jacqueline Lecarme (Eds.), *The syntax of time*. Cambridge, MA: MIT Press.

Pesetsky, D & E. Torrego. (2007). Pesetsky, D. & E. Torrego. (2007). The syntax of valuation and the interpretability of features. *Phrasal and Clausal Architecture: Syntactic derivation and interpretation. In honor of Joseph E. Emonds*, ed. by Simin Karimi, Vida Samiian and Wendy K. Wilkins, 262-294. Amsterdam: John Benjamins.

Pylkkänen, L. (2000). What Applicative Heads Apply To. *UPenn Working Papers in Linguistics* 7:1 197-210.

Pylkkänen, L. (2002). Introducing arguments. Ph.D. dissertation, MIT.

Saito, M., Lin., T.-H. J. & K. Murasugi. (2008). N'-ellipsis and the structure of noun phrases in Chinese and Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 17: 247–271.

Shibatani, M. (1978). Mikami Akira and the Notion of 'subject' in Japanese Grammar in J. Hinds and I. Howard (eds.), *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha, Tokyo.

Shibatani, M. (1990). *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Truswell, R. (2009). Preposition stranding, passivisation, and extraction from adjuncts in Germanic. In the *Linguistic Variation Yearbook* 8, J.V. Craenenbroeck (ed.), John Benjamins, pp. 131-178.

Wakabayashi, S. (1997). The acquisition of functional categories by Japanese learners of English. PhD dissertation. The University of Cambridge.

Wakabayashi, S. (2002). The acquisition of non-null subjects in English: a minimalist account . *Second Language Research* 18, 28-71.

Wakabayashi, S. (2009). Lexical learning in second language acquisition: optionality in the numeration. *Second Language Research, 25*(2), 335–341.

Watanabe, A. (2010). Notes on nominal ellipsis and the nature of no and classifiers in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 19:61–74.

Yokokawa, H. (2006). *Nihonzin Eigo Gakushusha-no Eitango Sinmitudo*

Mozi-hen: Kyoiku Kenkyu-no Tame-no Daini Gengo Detabesu [Japanese Speakers Familiarity with Written English Words: Second Language Database for Education and Research]. Tokyo: Kurosio.

中央大学文学部英米文学会会則

昭和 57.11.18
改正平成 2.5.11
改正平成 16.5.11

（名　称）
第 1 条　本会は中央大学文学部英米文学会（略称、中大英米文学会）と称する。
（目　的）
第 2 条　本会は英米の文学・語学、および関係諸学科の研究ならびに研究発表を行い、会員相互の親睦交流を図ることを目的とする。
（事　業）
第 3 条　本会は前条の目的を達成するために研究会、講演会、親睦会等を開催し、機関誌を随時発行する。
（会員資格）
第 4 条　本会は中央大学文学部英語文学文化専攻の専任教員、学部・大学院の在学生および卒業生を会員とする。
（会　費）
第 5 条　本会の会費は無料とする。なお、会計年度は 4 月 1 日にはじまり、翌年の 3 月 31 日をもって、おわるものとする。
（役　員）
第 6 条　本会は役員として、会長 1 名、教員幹事 1 名、大学院生幹事若干名、学部学生幹事若干名、卒業生幹事若干名をおく。
第 7 条　会長は教員の中から幹事会が推薦し総会で承認する。
第 8 条　教員幹事は教員会員の中から互選する。
第 9 条　大学院生幹事は大学院生会員の中から互選する。
第 10 条　学部学生幹事は学部学生会員の中から互選する。
第 11 条　卒業生幹事は卒業生会員の中から互選する。
第 12 条　幹事は幹事会を組織して、会務を執行する。
第 13 条　役員の任期は 1 年とする。ただし再任をさまたげない。
第 14 条　幹事は次の事務を分担する。　1. 庶務　2. 会計　3. 渉外　4. 編集
（総　会）
第 15 条　本会は年一回総会を開く。総会は会長が招集する。
第 16 条　総会において幹事は前年度の事業報告および会計報告、またその年度の事業計画および予算案を発表する。
（議　決）
第 17 条　総会の議決は出席会員の過半数をもって成立する。
第 18 条　本会の会則の変更は総会の議を経なければならない。
第 19 条　本会は事務所を中央大学文学部英語文学文化共同研究室におく。
第 20 条　本会則は昭和 57 年 11 月 18 日から施行する。

研究室動向

◆ 藤平育子教授は 2014 年 3 月をもって退職されました。

◆ 小林恵昭准教授は 2014 年 3 月をもって退職されました。

◆ 久保尚美准教授が 2014 年 4 月から本専攻教員として着任されました。

英語文学文化専攻専任教員

青木　和夫	（あおき　かずお）	大田　美和	（おおた　みわ）
オニキ ユウジ	（おにき　ゆうじ）	河西　良治	（かさい　りょうじ）
兼武　道子	（かねたけ　みちこ）	久保　尚美	（くぼ　なおみ）
高尾　直知	（たかお　なおちか）	丹治　竜郎	（たんじ　たつろう）
中尾　秀博	（なかお　ひでひろ）	堀田　隆一	（ほった　りゅういち）
John Matthews	（ジョン マシューズ）	若林　茂則	（わかばやし　しげのり）

編集後記

本号では、二名の教員による査読審査を経て、八編の学部卒業論文と二編の大学院論文が掲載された。多岐に渡る研究成果の提供の場として本誌が活用され、本専攻が研究面において発展していくことを願う。

（編集一同）